

フとアセルステインの馬は遺憾なく武装せる巨大な主人の重みやこれ迄の働きの疲勞してゐたからである。勘當騎士の馬術の妙は、その打ち跨がった駿馬の活動と相俟つて、暫くの間、三人の敵手を遠ざけることを得させた。彼は空翔る隼はやぶさの如き早業で身を交し、向きを變へて、敵を出来るだけ遠く追ひ除け、今一人を襲つたかと思ふと、次には他の一人に突進して、切り下し、相手に斬り返す暇も與へなかつた。

併し、滿場喝采して彼の手練を賞め讃へたけれども、たしかに終ひには、彼が打ち破られるに違ひなかつた。で、見るに見兼ねたジョン親王の周りの貴族達は、試合中止の采配を投じて、斯くも勇敢な騎士が衆寡敵せず敗られることの不面目をお救ひ下さるようにと、聲を揃へて親王に懇願した。

「斷じてならぬ」とジョン親王は答へた、「姓名を隠し、予の申し込んだ款待を輕んずる、この若者こそは、昨日既に一個の賞品を獲た、今日は順序として人に譲るべきである。」彼がかう言つた途端、試合場にはこの日の運命を變へる意外な出來事が持ち上つた。

勘當騎士の組の中に、黒い鎧を着、乗手に似て、大きく、高く、見るからに逞しく屈強な黒馬に打ち跨つた一人の戰士がゐた。楯に何の紋章も記さぬこの騎士は、これ迄戦ひの成行きに餘り心を傾けず、自分に打つて掛る闘士をば如何にも樂々と撃退し、而もその勝ちに乗じて進まうともせねば、又何人を攻撃しようともしなかつた。つまり、彼はこれ迄この試合の一方の味方となつて一役演ずると云ふよりは寧ろ觀衆の役を勤めてゐたのであつた。彼が觀衆の間に「黒い不精者」といふ名を得たのは、

かうした事からである。

この騎士も、自分の組の大將が悪戦苦闘に陥つたのを見ると、直ちに今迄の冷淡を打ち棄てたらし、元氣潑刺たる乗馬に拍車を當て、喇叭の響のやうな音聲を擧げて、「勘當騎士殿、御助勢申す！」と呼ばはりつゝ、雷電の如く應援に駆けつけた。時こそよけれ、勘當騎士が寺侍に詰寄つてゐる間に、フロン・ド・ブーフは劍を上段に振り冠つて彼に近づいてゐたが、まだその劍が下りぬ中に、かの黒裝束の騎士はフロン・ド・ブーフの頭上に一撃を加へたのである。劍を磨いた冑を逸れて、乗馬の馬兜に殆んど初めと同じ猛しさで落ち、馬も人も等しく太刀風の鋭さに目をまはして、フロン・ド・ブーフは地上に轉び落ちた。「黒い不精者」はそれからコニングスボローのアセルステインに馬首を向けた、そして自分の劍はフロン・ド・ブーフとの一戦に折れて了つたので、この巨男のサクソンの手から彼が振り廻してゐた戰斧を奪ひ取つて、この武器を手慣れた者の如くに、兜へ手痛い一撃をくれたので、流石のアセルステインも亦正氣を失つてその場にどうと倒れた。よもやこんな二重の早業が出来ようとは誰も思つてゐなかつたので、この騎士は割れるやうな拍手喝采を受けたが、この妙技を爲て退けると、また持前の不精に返つたらしく、靜かに場の北端に戻つて、自分の方の大將をブリアン・ド・ボア・ギルベールと死力を盡して闘ふに任せてゐた。今度は最早以前程難戦ではなかつた。寺侍の馬は既に流血甚だしく、勘當騎士の突撃を受けてがくりと參つて了つた。ブリアン・ド・ボア・ギルベールは鎧から足を抜き損ねて、その場に轉げ落ちた。それと見ると勘當騎士は馬から飛び下り、死活の一刀を敵の頭上

に振り翳して降伏を迫つた、とその時、寺侍の相手の場合には何とも思はなかつたジョン親王も、寺侍の危い立場には心を動かされ、即座に采配を投じ、戦闘の終結を宣して、寺侍が降参の屈辱を救つてやつたのである。

尙ほ燃え續けてゐたのはこの激戦の焰の燃えさし許りであつて、試合場に残つてゐた少數の騎士の中の大部分は、暗黙の中に申し合せたやうに、暫く闘ひを控へて、勝敗を首領の争ひで決しようとしてゐた。

戦争中に主人を介抱するのは危険で、又困難な事だと見て取つて差し控へてゐた従者達は、この時どつと試合場に群り入つて、まめくしく負傷者の世話をした。その負傷者等は注意に注意して近くの天幕とか、隣村に取つてある宿とかへ運び去られた。

かうして當時の最も勇ましく戦はれた馬上試合中の一つである、この記念すべきアシビードラ・ズーシユの戦ひは終つた、即死者の數は、甲冑の熱氣で窒息した一人を加へて僅か四人であつたが、重傷者は三十人以上を數へ、その中の四五人は遂に恢復する時がなかつたのである。更に幾人かは一生涯廢疾の身となり、最もよく難を免れた者でも戦闘の印即ち傷痕が死ぬ迄消えなかつたといふ。かうしてこの一戦は、「優に楽しきアシビードラの試合」として、古い記録には必ず記載されてゐるのである。

今や拔群の手柄を示した騎士を指名するのがジョン親王の任務であつたので、親王は觀衆が「黒い不精者」と綽名して呼んだ騎士に、この日の榮譽を荷はせる事に決した。勿論この命令の誤つてゐるこ

とを指摘して、今日の勝利は事實勘當騎士によつて得られたのであつて、彼はこの日の試合中、自分の手で六人の戰士を打ち破り、最後に敵側の首領を落馬させ、打ち倒したと、親王に注意を促す者があつた。併し親王は、勘當騎士とその一隊は、若し「黒装束の騎士」の有力な助勢がなかつたなら、敗北するより外なかつたのだ、だから、褒美はどうしてもこの騎士に授與せねばならないといふ理由を楯に、あくまで自説を固執した。

けれども満場の人々の驚いた事には、斯く推擧された騎士の姿は何處にも見えなかつたのである。彼は闘ひが終ると直ぐに試合場を去つてしまつたのである。そして「黒い不精者」の綽名を生んだ、あの同じ悠々たる足取りと、ぼんやりした、無頓着な態度で、森の樹下路を下つて行く姿を見たといふ觀衆が二三人ゐた。彼を呼び出す爲めに、二度も喇叭を吹き、傳令官も二度觸れて廻つたが何の答もなかつたので、こゝに彼に荷はせる筈の榮譽を受くべき他の者を指名する事が必要になつた。ジョン親王も今はこの上、勘當騎士の權利を拒むべき口實がなかつたので、厭々ながらこの勘當騎士を當日の優勝選士と定めた。

血潮ですべりがちな、破れた甲冑や傷き倒れた馬の屍などで塞がれてゐる戰場を通つて、闘場司は再びこの戦勝者をジョン親王の御座の前に案内した。

「勘當騎士よ」とジョン親王は言つた、「其方はこの稱號でなくては予に知られる事を承知致さぬらしから斯くお呼び申すが——予は二度其方にこの試合の榮譽を授け、其方が武勇に正しく値する『名

譽の花冠』をば、『愛と美との女王』の手より求め受ける権利ある事をお告げする。」騎士は頭を低く下げて肅然と一禮した、が、何の答も返さなかつた。

そして喇叭の音が唳々と鳴り響く間に、傳令官が聲を張り上げて勝者の勇氣と榮光とを讃め稱へてゐる間に——また、貴婦人達が絹の手巾や縫箔した面帕を打ち振つてゐる間に、そして上下を問はず、全觀衆が一齊に囂々たる歡呼の聲を擧げてゐる間に、闘場司は勘當騎士を案内して試合場を横ぎり、ローエナ姫の占めてゐる名譽の玉座の脚下へ伴れて行つた。

この玉座の階の下段にこの戰士は跪かされた。實際戦ひが終つて後の彼の動作はすべて、彼自身の自由意志からと言ふよりは寧ろ周圍の人々の心のまゝにするといふやうに思はれた、そして彼が再び闘場司に案内されて試合場を横切つた時、誰の目にもその歩調は踴めき亂れてゐるやうだつた。ローエナ姫は淑かに凜々しい歩みを運んで、玉座から下りると、手にした花冠を勇士の盔の上に載せようとした、その時、闘場司等は一齊にかう叫んだ、「あんな様子ではいけない——戰士は盔を脱がなければなりません。」騎士は微かに二言三言何事か呟いた、それは盔の洞の中で消えて了つたが、その意味は兜を取つてくれるといふ望みであるらしかつた。

禮式を重んずるからか、それとも好奇心からか、闘場司は騎士の厭がる様子に頓着せず、兜の締緒を斷ち、喉當の結び目を解いて盔を取つた。盔を除くと、短い金髮の亂れた中に、二十五歳の青年の眉目はよいが日に焼けた顔貌が現はれた。その顔色は死人のやうに蒼ざめて、一二個所に血の痕さへあつた。

ローエナ姫は一目見るなり、あつと微かな叫び聲を擧げた、が直ちに滿身の勇氣を揮ひ起して、突然の感情の激動に身を顫はせつゝも、尙ほ強ひて役目を果さうとするものゝやうに、この日の定めぬ褒美であつた目醒めるやうな花冠を勝者の力なく垂れた頭に載せて、朗かな、はつきりした聲音で、かう宣言した、「騎士殿、私は今日の勝者に與ふべき武勇の褒賞として、この花冠を御身にお授けいたします。」こゝで姫は一寸休んで、それからまたしつかりした口調で言ひ足した。「そして騎士道の花冠は、御身の額よりも尊い額に飾られる事は決してありません！」

騎士は頭を垂れて、その身の武勇を賞してくれた可憐の女王の手に接吻した、そしてそれから、尙ほ一層、體を前の方に屈めて、終に姫の足下に突つ伏して了つた。

觀衆は皆驚き慌てた。勘當した我が子の突然現はれたのに茫然としたセドリックは、ローエナ姫と彼との間を引き離さうとするかの如く、やをら跳び出した。併しその時には既に闘場司が二人を引き離してゐた、即ち闘場司はアイブンホーが氣絶した原因を察して、大急ぎでその鎧を解き、そして槍の切尖が胸當を透して、彼の脇腹に傷を負はせてゐたのを發見したのである。

(十三)

「來れ、勇士共！」アトリデスは

かく聲高く叫びぬ、

「拔群の手並を見せよ、

手練はた剛力もて敵に勝ち、

名聲に恥ぢざらんことを求むる人々よ。

二十四の牡牛に値ひするこの牝牛をこそ、

いとも遙かに箭を放つ人に

天は與ふることを命ずるなれ。」

(「イリアッド」)

アイワンホーの名が一度口に出されると直ぐ觀衆の口から口へと傳へられた、而もそれは非常に熱心に傳へられ、非常に好奇心で迎へられたので、その傳播は極めて早かつた。それは間もなくジョン親王の一團へも達した、親王はこの報を聞くと忽ち颯と眉を曇らせた。けれども親王は嘲るやうな態度で左右を顧みながら、「諸卿よ」と言つた。「わけても僧正、御身は何となく心の底から牽きつけられる場合と、一寸見ただけで、反感を起させる場合とがあることに就いて、世の學者達が教へる説をどう思はるゝな？」どうも予は、向うの甲冑に包まれた中の人何人か、少しも推量のつかなかつた時でさへ、兄リチャードの寵臣が現はれたなと感じたのだ。

「フロン・ド・ブーフはアイワンホーの領地を還す覺悟をせねばならぬ」とド・ブラシーは言つた。彼は此度の試合で立派にその職分を果し、楯と冑とを脱ぎ捨て、今再び親王の扈從に仲間入りをしたのである。

「さうです」とワルデマール・フィッツワーズは答へた。「この勇士はどうやら、さきにリチャードさまが彼にお與へになり、その後また殿下がお慈悲によつてフロン・ド・ブーフに下し置かれたあの城と領地とを取り返す望みがございます。」

「フロン・ド・ブーフは」とジョン親王は答へた。「アイワンホー領の一ヶ所ぐちむ吐き出したつて、その三倍もの領地を呑み込まうとする男だ。つまりは、かうだ、諸卿はよもや否認は致すまい——あの異國三界にまで乗り出して、大事の際に、出仕も出來ねば、奉公も致さぬやうな不忠な者どもに代つて、常に予の左右に侍し、何時にても日頃の軍務を果してくれる忠義な家來達に領地を割いて下し遣はすのは予の權利であることを。」

これを聞いた人々は、自分の身に及ぼす深い利害があるので、親王の我物顔の權勢を、全く疑ふ餘地のない正當なものだと異口同音に述べ立てざるを得なかつた。「御宏量な親王さま！ かうして忠義な家來共に報いて下さらうとは、さても氣高い我君様！」

このやうな言葉は、若しジョン親王の家來で、まだ實際にさういふものを受けてゐない者があつたとしたら、リチャード王の家來や寵臣達を犠牲にしても、同じ恩典に與からうといふ、さういふ輩の口か

ら吐き出されたのである。エイマ僧正も亦人々の提言に賛成したが、但しかういふ趣旨の事を述べた——「聖きエルサレムは實際は外國と言ひ難い。あれは全基督教徒の母だ。併し自分は（と僧正はきつぱり言つて退けた）、アイヴンホーの騎士がこの事をどれ程有利な口實に使へるかを知らない、と云ふ譯は、リチャード王麾下の十字軍士が、アスカロン（昔、パレスティナの西南にあつてイスラエル人の敵であつたフィリスティン人の五大都市の一）から先へ進まなかつた事を自分が確めてゐるからだ、このアスカロンの都は、誰でも知つてゐる通り、フィリスティン人の街で、聖都の榮光を一つだつて受ける價值がないのだ。」

この時、好奇心に驅られてアイヴンホーの倒れた場所へ駆けつけて行つたワルデマールが、歸つて來て言つた、「あの勇士は殿下に餘り御心配をお掛け申しさうにもございません、又フロン・ド・ブーフにもその所領を今のまゝ所有させておくでございませう——彼は中々の重傷でございます。」

「彼の者がどうならうと、彼はとにかく今日の勝利者だ、」とジョン親王が言つた、「たとへ彼の者が予の十倍の敵、若しくは予が兄の腹心の味方であらうと、——孰れにしてもまあ同じ事だが——彼の傷は見て遣らねばならぬ——予の侍醫に介抱させよう。」

かう言つた時、親王は唇を歪めて物凄しい微笑を洩らした。ワルデマール・フィッターズは周章て、アイヴンホーはもう試合場から運び去られて、その友達の保護を受けてゐると答へた。

「私は『愛と美の女王』の悲歎を見て、何となく胸が苦しくなりました、」と彼は言つた、「折角の一日の主權もこの出來事の爲めに悲愁に變つて了つたやうでございませう。私は、女がその戀人の爲めに

嘆き悲しむのを見て心を動かされるやうな男ではございませぬ、が、このローエナ姫に許りは參りませんでした、姫は手を組み合せ、涙一滴落さず、目前の命絶えた骸をちつと見詰めながら、たゞちよつとその眼瞼を震はしたきり、それでやつと姫の悲しみが分る位、姫は實に凛々しい態度で自分の悲しみを抑へられたのです。」

「そのローエナ姫とは一體何者だ、」とジョン親王は言つた、「その名は随分度々予が耳に入つたが。」

「大國を領してゐるサクソンの世嗣姫でございます、」とエイマ僧正は答へた、「言つてみますればまづ、愛らしの薔薇、價高き寶玉、千人に勝る美女、一束の没藥、一房のヘンナの花（舊約聖書「ソモモン節十四節に「わが愛する者は我にこりては我が胸の間におきたる没藥の袋のごとし、（一四）わが愛する者は、われにこりてはエンゲデの園にあるコペルの英華のごとし」とあるより來る）と云ふ所でございませう。」

「予は姫の悲嘆を慰めてやらう。そしてノルマン人と結婚させて姫の血統を直してやらう。姫はまだ未成年者らしい、して見れば結婚は王の意に従はねばならぬ。（封建時代には、一國の君王は、世嗣が未成年の女たそれを、強要する）——どうだな、ド・ブラシー、そちは『征服者』キリアム一世の家來達に倣つて、サクソン姫と結婚して、立派な土地と暮しとを手に入れては？」

「殿下、若しその土地が私奴の氣に入りますれば、花嫁を貰つて面白からぬ道理はございませぬ。して又、殿下の僕であり家臣である私の爲めに、いろ／＼と有難き思召しを賜はりまして、厚くお禮を申し上げます。就いては必ず立派な働きをして御意に報いたく存じます。」

「予は、その言葉を忘れまい、」とジョン親王は言つた、「では即刻それを實行するため、直ぐさま、予

が家令に命じて、ローエナ姫とその仲間——即ち姫の後見役なる無作法者と、黒装束の騎士が試合で打ち倒したサクソンの牡牛奴とに今宵の盛宴に列なるやうに言ひつけさせよう。——ド・ビゴ、」と家令に向つて言ひ足した、「あのサクソン共の誇りを傷つけないやうに、そして再び拒絶する事の出来ないやうに、極く丁寧に、予がこの二度目の招待を申し傳へい——本當に、彼等に禮儀は豚の前に眞珠を投げるも同然だが、まあこれも方便だ。」

ジョン親王はこれ迄言つて退場の合圖を與へようとした、その時、一通の短い手紙が親王の手に差し出された。

「何處からだ？」とジョン親王は手紙を差し出した者の方を見遣りながら、言つた。

「我が君さま、外國からといふだけで、外國の何處からか私奴には一向に分りません、」とその従者は答へた。「一人のフランス人がその手紙を此處へ持つて参りました、その者の申しますには、それを殿下の御手に差し上げます爲め、全一晝夜、馬を驅つたといふことでございます。」

親王は入念に表書を見て、それから封緘を調べた、封蠟はその手紙を包む眞綿やうの絹の封じ目に附けられ、三個の百合花形(これは百合の花の形をした紋章で、長くフランス王家の標章であつた)が押しあつた。

ジョン親王はよそ目にもそはくしながら手紙の封を切つた、そのそはくした様子は内容なかを熟讀し終つた時益々目に見えて烈しくなつた。文面にはかう書いてあつた——
『御警戒のれ、悪魔は鎖を解かれたり！』

(これは一九三三年七月佛王フィリップ二世からジョン親王に贈つた書信である。其時フィリップ王はジョン親王が其王位を横取りしようとしてゐる兄リチャード一世、而も十字の歸途敵國オーストリアに虜になつてゐたのが解放せられたと聞いて、今それをジョン親王に注意して來たのである)

親王は死人のやうに眞蒼になつて、最初は地に目を落し、それから天を仰いだ、恰も死刑の宣告がその身に下つたといふ知らせを受けた人のやうに。やがて最初の驚愕から我に返ると、彼はワルデマール・フィッツァーズとド・ブラシーとを傍わきに連れて行つて、順次に二人の手へ手紙を渡した。「中に、」と彼は震へ聲で言ひ添へた、「兄のリチャードが解放せられたと書いてある。」

「これは虚報か、偽造文かであらうも知れませんが、」とド・ブラシーは言つた。

「いや、フランス王の直筆でフランス王自身の封印だ、」とジョン親王は答へた。

「では今こそ、」とフィッツァーズは言つた、「我黨がヨークなり、何處か他の中心地なりで、旗揚げすべき時でございます。二三日過ぎては、もう遅すぎるでございます。殿下にはこの只今の茶番じまみみた慰み事を早速お打ち切りにならねばなりません。」

「郷士や平民共を、競技に加はらせないで、不満を懷かせて歸へすのは宜しくございませぬ、」とド・ブラシーは言つた。

「今日は未だ餘り時間が経つてゐません——射手等に二三番標ま的を射させ、賞品を授けるが宜しうございませう。どうでこのサクソン百姓の群だけの事なら、それで親王の御約束を十分に果した事に相成りませう。」

「忝けないぞ、ワルデマール、卿のお蔭で予は又昨日この身を侮辱致したあの不遜な百姓奴に拂ふべき借りのある事を思ひ出した。予が盛宴も亦目論見通り今宵始める事に致さう。萬が一これが予の権力を振へる最後ならば、今こそ復讐や快樂に上乘の時であらう——新しい苦勞が明日の新しい日と共に来ようとも。」

やがて喇叭の音ははや歸り始めた見物の人々を呼び戻した。そしてジョン親王は俄かに捨て置き難い公務が出来て、明日の催しの計畫を中止しなければならなくなつたけれども、かう多くの郷士達を腕ためしもさせないで歸すのは本意でないから、この場を去る前に、今直ぐ明日舉行すべき管の弓術試合を行ひたいとの御意であると宣言せられた。優勝の弓術家には褒賞が授與される筈で、それは銀を被せた角笛と、森の競技の守護神、聖ヒューバートの浮彫で立派に飾つた絹の飾り帯とであつた。

最初は三十名以上の郷士が試合の志望者として現はれた、その中の幾人かはニードウッドやチャーンウッドの御料林の監守人や、その下役などであつた。けれども、この射手等は自分の戦ふ相手が誰と解つた時、殆んど間違ひなく敗北の不名譽に會ふのを嫌つて、二十名以上の者が途中で棄權して了つた。當時凡そ聞えた名手といふ名手の腕前がその界限何里といふ間に響いてゐるのはニューマーケット（ケンツデから十三哩隔つた町でゼイムス一世の頃から競馬場として有名である）で鍛へられた馬の長所が、この有名な競馬場に始終出入する者共によく知られてゐると更に變りがなかつたのである。

野に名聲を争ふ者の數は減つたが、それでも八名あつた。ジョン親王はこの選つた郷士の人體をもつ

と近寄つて檢分しようとして座から立ち出た、その郷士の中幾人かは、御料林の監守服を着てゐた。この檢分で好奇心が満たされると、今度は自分の鬱憤の對象を探し始めた、そしてその者が昨日と同じ場所に、昨日見せてゐたと同じ落着き拂つた顔付で立つてゐるのを見出した。

「おい下郎、」とジョン親王は言つた、「予はそちの不遜極まる囂語を聞いて、定めしそちは大弓（長さ凡の本當の達人ではあるまいと思つたが、やつぱりそちは向うに立つてゐるやうな名手の間に立交つて手並を試す勇氣はあるまい。」

「かう申しては何でございますが、」と郷士は答へた。「手前は敗北や不面目を恐れる外に、弓を射るのを控へる別の理由がございますので。」

「してその他の理由とは何だ？」と親王は恐らく自分自身でも説明しかねる何かの動機から、この人物に就いてひどく好奇心を感じて、言つた。

「それは外でもございませぬ、」と山男が答へた、「手前とあの郷士達が射つけてゐる的が果して同じ大きさの的かどうか存じませぬし、それに又心にもなく御不興を蒙つた者が三番目の賞を贏ち得ましたなら、殿下にはどんなお氣持にならせられるかも存じませぬので。」

ジョン親王は颯と氣色を變へてかう訊ねた、「そちの名は何といふのだ？ 郷士！」

「ロックスリイと申します」と郷士は答へた。

「ではロックスリイ」ジョン親王は言つた、「そちはあの郷士共が手並を見せた時、きつと代つて射るの

だぞ。若しそちが褒美を取つたなら、予はそれに二十金添へて遣はさう、が萬一取れなかつた時は、おしやべりの無禮な法螺吹きの際でそちのリンカン織の緑衣を剥ぎ取り、弓弦を以て試合場から敲き出してやるぞ。」

「して若し手前が左様な賭で射る事をお断りしましたら何と致されますか？」と郷士は答へた。「現在あんなに多くの軍卒共を後にお控へあそばす殿下の御權勢なら、實に造作なく手前の衣物を剥ぎ取り、打擲する事が出来になります、が權柄づくで手前に頭を下げさせたり、弓を引かせたりすることは出来ません。」

「若しそちが予の公明正大な提言を受けないなら、」親王が言つた。「この試合場の奉行にそちの弓弦を断ち切り、そちの弓矢を折り、卑怯未練な臆病者として、予が面前より追放させるまでだ。」

「親王殿下、」郷士は言つた、「レスタヤスタッドフィールドシャーの名手等と身を賭して戦へ、若し射負ければ不名譽な罰を負はすと手前にお強ひ遊ばすのは、決して尋常の勝負とは申されませんが、まあ、殿下の御意に従つておきます。」

「此奴逃げないやうによく見張つて居れ、兵卒共、」と親王は言ひつけた、「此奴は段々元氣がなくなつた、試合を免れようとする懸念がある。——そして射手諸君よ、君等は順に大膽に射るがいゝ、愈勝負が極つた時は、向うの天幕に元氣附けとして一頭の鹿と一樽の酒が備へてある。」

一個の標的がこの試合場に通する南の並樹路の突當りに掛けられた。競争する射手達はその南入口

の際に代るゝ立つて矢を番へたが、その位置と的との距離は所謂遠距離射撃と稱する射程距離に十分であつた。射手は、前以て抽籤で出る順序を定めて置いて、各々三本の箭を續けて射る事になつてゐた。この競技は競技奉行と呼ぶ一下役人によつて取り締られてゐた、恐らく闘場司が身を貶して郷士の競技を監督しようものなら、その高い位の品格を落すとも思はれたのであらう。

射手達は一人づゝ進み出て、いかにも郷士らしく勇ましく矢を射放つた。續けざまに、射放たれた二十四本の矢の中、十本は的に命中し、他はその直き近くに落ちた、それも的の距離を考へると、中の妙手と頷かれた。標的に命中した十本の箭の中、中の環の中に入った二本は、ヒューバートと云ふマルヴォアザンに仕へる山番の射たものであつた、従つてこの男が優勝を宣せられた。

「さあロックスリイ、」とジョン親王は毒々しい微笑を浮べて、前の大膽な郷士に言つた。「そちはヒューバートと勝負を試みるか、それとも競技奉行に弓、肩帶、矢筒を引き渡すか、どうだな？」

「これよりよい事はまたとございませんから、甘んじて運試しを致しませう。但し手前が向うのヒューバート殿の射的に二本箭を射ました時は、ヒューバート殿は屹度手前の指定いたす的に一矢射るといふ事に致しまして。」

「それは全く正當の事だ、」と親王は答へた、「聽き届けて遣はさう。——ヒューバート、其方が若しこの法螺吹きを打ち負かすなら、角笛に銀貨を一杯詰めて取らすぞ。」

「誰でも、自分の力の及ぶ限りを盡すだけでございます」とヒューバートは答へた、「併し祖父はへい

ステイングスの戦で中々の強弩を曳きました、手前はその祖父の遺名を辱しめないと信じて居ります。」
 以前の標的は除けられて、その後へ同じ大きさの新しい標的が掛けられた。最初の試合の勝利者として、第一番に射る権利を得た彼ヒューバートは、矢を弦に番へて、引きしぼつた弓を手に持った儘、長い間、目で距離を測りながら念入りに狙ひを定めてゐたが、それから遂に彼は一步前に踏み出した、そして弓束が顔と殆んど平行になる迄、左腕を十分に伸ばして弓を擧げ、弓弦を耳の處迄引き絞つた。矢は空を切つてひよ、と唸りを立て、標的の環の中に當つた、が、きつかり眞中ではなかつた。
 「貴方は風を御考慮なさらなかつた、」と彼の敵手は弓を引き絞りながら言つた、「でなかつたら、もつとよく當るのに。」

さう言ひながら、そして些とも狙ひを定める氣配も見せず、ロックスリイは定めの場合に進み出て、ろく／＼標的も見ないといつたやうな無頓着な態度で矢を放つた。彼は殆んど箭が弦を離れるその瞬間まで喋つてゐたが、而も矢はヒューバートよりも黒星に二吋近くの所へ的中したのであつた。

「こりやどうだ！」親王はヒューバートに言つた、「萬一そちがああ卑しい奴めに勝たせたら、そちは絞首臺に上せられても不當とは思ふまいぞ！」

ヒューバートは如何なる場合にも同じ言葉を繰り返すだけであつた。

「殿下がたとひ私を絞首になさらうとも、人間はたゞ自分の力の及ぶ限りを致すまででございます。けれども、私の祖父は強弩を引きました——」

「祖父やその子孫の事がなんだといふんだ！」とジョン親王は遮つた、「射よ、そちの全力を盡して射よ、射ぬとそちの負けになるぞ。」

から勵まされて、ヒューバートは再び立ち上り、敵手から受けた注意を疎かにせず、今吹き出したばかりの非常に微かな風をよく見計つて、ヒューと見事に切つて放つた。狙ひは過たず標的の眞中にぶつと突刺つた。

「ヒューバート！ ヒューバート！」と、群集は見知らぬ人よりも知つてゐる人の方に一層歡呼した、

「黒星だ！ 黒星だ！ ヒューバート萬歳！」

「そちにはあれより甘くは出来まい、ロックスリイ、」と親王は嘲りの微笑を含んで言つた。

「けれども、手前は彼の箭に刻み目をつけて遣りませう、」とロックスリイは答へた。

そして前よりは少し念を入れて矢を放てば、矢は見事敵手の矢に當つて、それを粉微塵に碎いた。周囲の人々はその不思議な手練にびつくりしてしまつて、例のやうに騒ぎ立てる事さへ出来なかつた。「こいつは鬼神に違ひない、血と肉の人間ぢやない、」と郷士達は囁き合つた、「あんな弓術は、インゲランドに弓矢あつて以來、未だ嘗て見られぬことだ。」

「さて今度は、」とロックスリイは親王に向ひ、「殿下のお許しを願ひまして、北國で用ゐるやうな標的を立てまして、それに射的を試み、自分の一番愛する美人から一笑を贏ち得ようとする勇敢な郷士達は、誰でも歡迎致したいと存じます。」

かう言つて、彼は試合場を去りかけようとして言ひ足した。「殿下、どうぞ殿下の衛兵をお付け下さいまし、——手前は隣の柳藪から鞭を一本切りに參るだけでございます。」

ジョン親王は従者共に萬一逃亡するといけないから隨いて行けといふ合圖をした、併し突然群集の中から「恥だ！ 恥だ！」といふ叫び聲が起つたので、流石のジョン親王もその度量のない所存を變へぬ譯には行かなかつた。

ロックスリイは長さ六尺程の、眞直ぐな、男の拇指よりは少し太い位りの柳の棒を持つて直きに戻つて來た。彼はひどく落着き拂つた態度で、立派な山男を捕まへて、これ迄用ゐたやうな大きい標的を射させるのは、その技倆を侮辱したものだと言ひながら、その柳の棒の皮を剥き始めた。「自身としては、又自分が育つた國では、あんな大きなものを標的にするよりは、六十人の騎士が取り圍んだといふアーサー王の圓卓を標的にした方がよいくらゐるだ。七歳の小兒でも」と彼は言つた。「向うの標的なら鐵なしの矢でよく射中てるかも知れない。併し」と彼は試合場の向うの端へ悠々と歩いて行つて、手にした柳の棒を地に眞直ぐに突き刺しながら、言ひ足した、「この棒を百碼の處で射中てる者なら、手前はその者を王の——と申しましたも、若しそれが剛勇なりチャード王御自身ならでございますが、——御前で弓矢を執るに不足のない射手と呼びます。」

「某の祖父は」と、ヒューバートは言つた、「ヘイスティングスの戦ひで随分強弩を引きました、が、でも一生にあんな標的を射たことはございません、某も亦今後とも同然でございませう。若しあの郷土

にあの柳の棒が裂けましたら、某は潔く白旗を掲げます——といふよりも、彼奴の胴衣に潜んでゐる鬼神に降參致します、が、神技でなくて、人間技ならどんな手練にも降參はいたしません。誰でも自分の力の及ぶだけしか出来ないものでございます。そして某は當らぬと極まつてゐるものを射たくはございません。よく見る事も出来ない、ちら／＼する白い線條を射ますのは、丁度牧師さんの小さいナイフの刃か、一本の麥藁か、太陽の光線かを射るのも同然でございます。」

「臆病犬め！」とジョン親王は呟鳴りつけた。

「こりやロックスリイ、そちが射て見い、見事このやうな標的を射中てたなら、そちをこのやうな事を初めてした者と褒めて遣はさう。だが、それがどうあらうと、僅か許り優れた腕前を見せたとして、予に勝ち誇らせは致さぬぞ。」

「手前の及ぶだけやつてみませう、ヒューバート殿の仰せの通りに」とロックスリイは答へた、「何人もそれ以上出來は致しません。」

さう言ひながら、彼は再び弓に矢を番へた、併し今度は弓を丁寧に檢べて、弦を變へた、と云ふのは弦が前の二度の使用で少し擦り減つたので、最早完全でないと思つたからである。それから彼はやや慎重に狙ひを定めた、そして群集は息を殺して、結果如何と待ち設けた。射手は觀衆の期待に背かなかつた、矢は狙ひ定めた柳の棒を劈いた。歡呼の叫びがどつと起つた。そしてジョン親王さへ、ロックスリイの手練を讚嘆するの餘り、彼に對する憎しみを暫く打ち忘れたほどであつた。「角笛諸共、立派

に取つたこの二十金は、そなたのものだ、若しそなたが予の衛士として予に仕へ、予が身邊に居るならば、この二十金を五十金にして遣はさう。これ迄かく強い腕で弓を引いた者も、かく正確な眼で箭を狙つた者もない。」

「その義ばかりはお許し下さい、殿下、」とロックスリイは答へた、「手前は若し仕官致しますなら、殿下の兄君リチャード王様にこそと、兼々心願致して居ります。この二十金はヒューバート殿に残して置きませう、彼は今日その祖父がヘイスティングスの戦ひで射たと劣らぬ勇ましい弓を引きました。若しもヒューバート殿が謙讓の心からこの試合を辭退せられなかつたら、恐らく手前同様、あの棒を射中てられたでございませう。」

ヒューバートは頭を振りながらこの見知らぬ人の恩恵を澁々受け取つた、そしてロックスリイはこれ以上人目につくことをひどく嫌つて、群集の中に紛れ込み、二度とその姿を見せなかつた。

この勝利を占めた射手は、若しジョン親王の心にその瞬間、他の氣がゝりな、もつと重要な考へ事が押し寄せて來てゐなかつたら、恐らくかう易々とは親王の目を逃れることは出来なかつたであらう。親王は退場の合圖を與へると同時に、侍従を召して、即刻アシビーに馬を飛ばし、猶太人アイザックを探すようにと命じた。そして「あの犬に日没前に二千クラウンを予が手許迄届けよと申せ、」と親王は言つた、「擔保は向うで知つてゐる、が、約束履行の證にこの指輪を見せるがいゝ。殘金は六日以内にヨークで受取らねばならぬと言へ。若し予が命令を忽にする時は、あの不信神な悪者の素頭を刎ねて了はう。途中で見通がさぬやうに氣をつけい、あの割禮(猶太教の儀式。割禮を受け)を受けた奴隷は盗み取つた美服を試合の折、見物の中で見せびらかし居つたからな。」

さう言つて親王は再び馬に跨り、アシビーへ歸つた、そこで群集も皆散々になつて歸路に就いた。

(十四)

猛く凛々しく装へる、

古武士の競技の晴れわざを、

誇らしく現はせし時、

冠つけたる長、輕羅纏へる貴女、

クラリオンの音に集りぬ、

榮え輝く城の、圓天井高き廣間に。

(ワートン)

その夜ジョン親王は、アシビーの城内で盛大な宴會を催した。その城は今、莊嚴な廢墟となつて尙ほ旅人の心を惹いてゐるのと同じ建物ではない、現在残つてゐるのはジョン親王時代よりもずつと後に、イングランドの大臣、ヘイスティングス卿が築いたものである。卿はリチャード三世の暴虐の最初の

犠牲者となつた一人で、寧ろその歴史的名聲よりもシェイクスピア作中の人物の一人としてよく知られてゐる。アシユビー城とその城下は、當時キンチェスター侯、ロージャー・ド・クインジイに屬してゐたが、この物語に描かれた時代には侯は聖地に出征して居らなかつた。ジョン親王はその留守の間に、この城を占領して侯の領地を恣まに處分したのである。そして今夜は欸待と豪奢の限りを盡し人々の眼を眩まさうとして、宴會を出来るだけ華奢にする爲めに、盛んな準備を命じたのである。

これを始め、その他多くの場合に思ひ切り王家の權力を揮つた親王の大膳職等は、國中から主君の食卓に相應しいと思はれるものを、集め得られるだけ残らず掻き集めた。賓客も亦夥しく招待された、この際人氣を取つて置かねばと思つたジョン親王は、近隣のノルマン貴族や紳士連をはじめ、少數の著名なサクソン族やデーン族の人々をも招待した。夥しいアングロ・サクソン族は、如何に日頃は蔑め退けられてゐても、今にも内亂が勃發した曉には、必ずや侮り難い勢力となるに相違ない。だから彼等の首領の歡心を買つて置くのは明かに政策上必要の事であつた。

それでこのいつもとは違つた賓客を今迄に例のない禮を以て待遇さうと云ふことは、暫くの間、親王が胸中に蓄へてゐた目論見であつた。併しこの親王程自分の平常の習慣や感情を自分の利害から打算して、變へもし、抑へもしたものは他になかつたけれども、絶えず現はれる自分の輕率や短慮の爲めに折角前に習慣や感情を隠して得た總てを臺なしにしたのは、この親王の不幸であつた。

この氣紛れな氣質に就いては、彼が父王ヘンリ二世からアイルランドに遣はされた時彼の地で著し

い一例を残したのである。その使節の目的はこの重要な新領土民の住民のインングランド王に對する讚仰の念を買ふ爲めであつた。この折アイルランドの諸侯達は先を争つてこの若い皇子に臣服の禮と和親の接吻を捧げようとした。所が、彼等の敬禮を慇懃に受けるどころか、ジョン親王とその氣短かな侍従等は、そのアイルランドの諸侯の長い髻を引張つてみたくて堪らず、それを抑へ切ることが出来なかつた(親王が十八歳の時のことで、この逸話は歴史的事實である)、誰でも豫想出来ることだが、その侮辱された貴族の無念憤懣は一通りでなかつた、そしてインングランドのアイルランド統治に致命的な禍根を残したのである。ジョン親王の性格のかういふ矛盾を念頭に置くのは、讀者諸君が今宵の彼の行動を了解するのに必要な事である。

ジョン親王は冷靜な時に作り上げた決心を實行して、その夕はセドリックとアセルステインとを目立つて慇懃に迎へ、ローエナ姫が不快の爲め親王の鄭重な招待にも應ぜられぬといふセドリックの口上を聞いても、失望の色を浮べこそすれ、憤懣の氣配は少しも見せなかつた。セドリックとアセルステインとは兩人共昔のサクソン服を着てゐた。それはもと／＼見榮の悪いといふものでもなく、また高價な織物で作つたものでもあつたが、何分その形なり色、模様、縞柄なりが、他の賓客のそれとは實にかけ離れてゐたので、ジョン親王は當時の流行から見て極めて滑稽に感じ噴飯したくてならなかつたのを凝と耐へたといふので、ワルデマール・フィッツァーズにひどく讚め稱へられたのである。併し、眞面目な判断の眼から見ると、サクソン人の短いびつたり體に着いた上衣や、長い外套は、ノルマン人の服装より遙かに優雅で、また便利な服であつた。ノルマン人の服装といへば、長い胴肩の、襯衣

か御者服かと思はれる程だぶくしたもので、その上に重ねた外衣は寸が詰つてゐて、防寒にも防雨にも適せず、その唯一の目的は、裁縫師が工夫のありつたけを凝らして飾つた毛皮や、刺繡や、寶石などを見せびらかすことにあつたらしい。これが初めて取り入れられたのはシャーレマン皇帝(フランク王マ皇帝、七四二—八一四)の御代であつた。皇帝はこの衣裳の流行から生ずる数々の不便を痛切に感ぜられたらしく、或る時かう仰せられた——「一體、この詰めた外套は何の役に立つのだ。寢床ねどこに在れば覆ひともならず、馬上にあれば雨風を防ぐ用ともならず、又腰かけてゐる時は、脚が濕氣や寒氣に冒されぬやう護つてもくれぬ。」

かく、王意に叶はなかつたにも拘らず、この短い外衣は、この物語の時代に至る迄流行を続け、わけてもアンジュー家の王族達の間にはかなり流行してゐた。で、この外衣はジョン親王の廷臣間には廣く用ゐられ、それだけにサクソン人の上衣の長いマントは、一しほの嘲笑を受けたのであつた。

賓客達は山海の珍味を山と積んだ食卓についた。親王の巡遊にお供した夥多あまたの料理人達は、普通の料理よりその型を變へるのにありつたけの腕前を振つて、原料と全然似ても似つかぬものにする事に今時の料理の名人にも殆んど劣らぬ位の成功をした。この國産の料理の外に、外國から取り寄せたさまざまの美味佳肴や、最も位の高い貴族の食卓にのみ用ゐられる、滋味豊かな珍菓がどつきりあつた。尙ほ、その上に内外の美酒がこの盛宴を賑はした。

併し、豪奢でこそあれ、ノルマン貴族は大體から言つて、牛飲馬食の徒ではなかつた。食卓の快樂

に耽りつゝも、彼等は美味を狙つて、過食を却けた、そして貪食亂酔は劣敗者たるサクソン人に特有の惡徳としてこれを卑しみ勝ちであつた。成程ジョン親王及び親王の短所を眞似て、親王の氣に入らうとした者共は、兎角食膳酒盃の樂しみに過度に耽り勝ちであつた、そして實際親王が桃と新酒とを遣したのが因で致したといふ事は、一般によく知れ渡つてゐる事柄である。けれども彼の行爲は、同國人の一般的風習から云へば例外であつたのである。

ノルマンの騎士や貴族達は、時々こつそり目と目で話を交はす外には、如何にも取り澄ました顔で、ノルマンの宴會の作法や習慣に不慣れのアセルステインやセドリックの武骨な舉動を見成つてゐた。そしてかういふ事には慣れないサクソン人共は、自分達の振舞がかくも冷罵的な注目の對象となつてゐながら、知らず識らずに、社交上の禮儀のために設けられた勝手な規則を幾つも破つたのである。誰もよく知る通り、人は流行の禮法の極めて瑣末の點を忽ゆるがせにする時には大に氣にするが、眞の善い行儀作法なり善良な道徳なりを實際犯す時には却つて平氣であるものである。だからセドリックは、洗つた手を空に物優やさしく振つて乾かさずに、手拭で拭いた爲めに多くの嘲笑を招いたのであるが、それは友のアセルステインが最も美味い外國の材料で作つた當時カラム・パイと呼んでゐた大きな肉饅頭の一つを全部自分獨りの分と思つて丸呑みにして了つた時よりもひどい嘲笑であつた。けれどもコニングスボローの豪士(ノルマン人の言(葉で言へば郷土))が自分の今ばつくり喰つたものが何だかちつとも知らぬ事や、又カラム・パイの中味が實際ベッカフィーコー(無花果を食ふ一種の小鳥、伊太利で食用す)やナイチンゲールであつたのに天鵝ひばりや鳩と思

つてゐた事が、眞面目に訊き質されて發覺した時、彼の無知が満座の嘲笑を買つた、その嘲笑は寧ろ彼が幾人分もの料理を一人で大食した時にこそ相應しいものであつたのに。

長い食事も遂に終りを告げた、そして盃が自由に廻されてゐる間に、人々は今日の試合の手柄話、弓術試合に出た無名の勝利者や、折角得た名譽を我と捨てた黒裝束の騎士の事、——それから高い犠牲を拂つてこの日の榮譽を購つた、雄々しいアイヴンホーの事などを語り合つた。この話題は如何にも武弁らしく快活に交された、そして冗談や笑ひ聲が部屋中に湧き起つた。けれどもさうした話に花が咲いてゐる間にも、ジョン親王の額のみは曇つてゐた、何か堪へ難い心配事が心を掻き亂してゐるらしく自分の周りで次から次へと起つたり消えたりする事に興味を感じたやうに見えたのは、ただ時折従者から注意された時だけであつた。さういふ場合に彼は立ち上つて、我と我が心を引き立てるかの如く、酒盃を傾け、そしてそれから話の仲間入りをして出し抜けた事を言つたり、出たら目を喋つたりするのであつた。

「予は今回の試合の勇士アイヴンホーのキルフレッドの健康を祝して、この杯を擧げよう。彼の勇士が負傷の爲めこの宴會に列席し得なかつたのは如何にも遺憾千萬だ。一同の方々も、乾杯せられい、わけてもあんな末頼もしい御子息を持たれたロザーウッドのセドリック殿は格別。」

「いや、殿下。」とセドリックは立ち上つて、未だ口をつけぬ酒盃を卓子の上に置きながら、答へた。「私は父の命を輕んじ、祖先からの家風を棄てるやうな不所存者には、親子と呼ばれたくありません。」

「だが、あんな雄々しい騎士が不所存者とか不孝者とかであらうとは思はれぬ！」と親王は如何にも驚いた風を装つて、叫んだ。

「けれども殿下、あのキルフレッドばかりはさうなのでございます。あれは父の家を捨て、御兄君の宮廷の派手好きな貴族達と交はり、そして其處で、今日殿下が大層な御褒美を下さいましたあの馬術などを修めましたのでございます。あれは、私の望や命令に背いて家を去りました。アルフレッド様の御代でしたなら、それは不孝と呼ばれたでございませう——さうです、そして嚴罰に處せられる罪でございませう。」

「おゝ！」とジョン親王は、さも同情に堪へないやうな深い溜息を洩らして、「卿の御子息は予の不仕合せな兄の家來であつた以上、何處で誰から親不孝の道を學んだか訊ねるにも及ばない。」

かうジョン親王は言つた。——ヘンリ二世の數ある皇子のうち、どれもこれもこの親不孝の罪を免れるものはなかつたけれども、中でもジョン親王自身こそ父王に對する叛逆と忘恩とで最も有名になつたといふ事を勝手にも忘れ果て、

彼はやゝ黙つてゐた後、又言葉をつづけた、「たしか予の兄は寵臣キルフレッドにあの肥沃なアイヴンホーの領地を與へるつもりだつたと思ふが。」

「下し置かれました。併し私どもの祖先が自由獨立の權利を以て所有致して居りましたその領土を、我が子が身を屈し臣下となつて所有することは、私の非常に厭ふところでございます。」

「然らばセドリック殿、その領土をイングランド王の土地として貰つても威厳を損ねぬ者に與へる事には、卿も賛成であらうな。——レジナル・フロン・ド・ブーフ卿」とその領主の方を向いて言つた。「そなたなら屹度キルフレッド卿が再びあの領地へ歸つて來ても、この上彼が父を怒らせぬやうにする爲めに、あのアイヴンホーの優れた領土を預かるだらうな。」

「聖アントニイ様も御照覽あれ！」と不興顔の巨人は答へた、「殿下の下し置かれた御領地をセドリックにでも、キルフレッドにでも、乃至はこれ迄イングランドの血の流れた者の中の最も勝れた者にでも、振ぢ取るやうな事をさせましたなら、殿下は私をサクソン人と思し召されても苦しいございません。」

「若し足下をサクソンと呼ぶ者があれば、」とセドリックは、ノルマン人が常々イングランド人に對する平生の賤しみを表はす口吻に嚇となつて答へた。「それこそ足下に取つては身に餘る光榮なのだ。」

フロン・ド・ブーフはこれに答へようとした、がジョン親王の短慮と輕率とがその機先を制した。

「成程、諸卿よ、セドリック殿の言はるゝ通りだ。サクソンはその外套の長さでもさうだが、その糸圖の長さでも我等ノルマンよりも上席を主張しても宜い譯だ。」

「彼等は實際戰場では我々の先に立ちます——犬の前の鹿のやうに、」とマルヴォアザンが言つた。

「そして當然彼等は我々の先に立つてもいゝのだ——彼等の行儀作法の勝れて、禮儀正しい事をお忘れなさるな、」とエイマ僧正が口を出した。

「それから彼奴等の格別な質素と、節約も、」とド・ブラシーが、サクソンの花嫁を貰はうとする計畫

も打ち忘れて合槌を打つた。

「勇氣や行爲に於てもさうだ、」とブリアン・ド・ボア・ギルベールも一緒になつて言つた、「ヘイスティングスやその他の戰場ではその爲めに名聲を博した。」

何喰はぬ顔付で笑ひを湛へながら、廷臣達が代るゝ親王の範に倣つて、セドリックに嘲弄の矢を放つてゐる間に、このサクソンの顔は激しい怒りで眞赤になり、まるでこんなに多くの侮辱を矢繼早に浴びせられたので一々返答するに窮したかのやうに、又數頭の犬に四方八方から吠えつかれて、どれから先に應酬すべきかに迷つてゐる牛のやうに、焰の如く輝いた兩眼で次から次へと睨み廻してゐた。

が終に彼は激怒で半ば噓んだ聲で、自分の受けた攻撃の火元としてまづジョン親王に向つてかう言つた。「我が種族の爲した愚行や惡徳がなんであらうと、サクソン人が自分の廣間で而も自分の饗した酒盃の廻る間に、罪のないお客を丁度殿下の面前で今日私が受けたやうに遇したり、遇させたりいたしましたなら、そんなサクソン人は大痴者と云はれるでございませう。そしてヘイスティングスの戦ひで私共の祖先が如何に武運が拙なかつたにもせよ、少くともこの數時間前一サクソン人の槍にかゝつて一度ならず二度までも鞍や鐙を踏み外づした者共は、」と、こゝでフロン・ド・ブーフと寺侍との方をじろりと見遣りながら、「餘り口幅つたい事を申さぬが花でせう。」

「いやはや辛辣な戲言だ！」とジョン親王は言つた、「どうだなそれは、諸卿？——予がサクソンの臣共は、この亂れた世に、意氣が揚り勇氣が高まり、機智は鋭くなり、態度は大膽になる——諸卿よ、

なんとなさるな？——この良夜を幸ひ、予は早速船をしたて、時を後れずノルマンディーに歸るのが上乘の策だと思ふ。」

「サクソン人を恐れてごぞいますか？」と、ド・ブラシーは笑ひながら言つた、「我々がこの豚共を追ひ詰めますには獵槍れつじやうの外、何にも武器を要しますまい。」

「各々方、最早冷嘲ひやかしは休戦となさい、」とフィッツァーズは言つた——それから親王の方を向いて、「殿下、初めての人の耳には屹度酷にのみ聞えるに違ひありませんから、決してセドリック殿を侮辱する積りで冗談を言つたのでないといふ事を合點させるが宜しいかと存ぜられます、」と言つた。

「侮辱だ？」とジョン親王は、又元の慇懃な態度に戻つて言つた、「予はよもや予自身が左様な事を申す積りだとも、予が面前で左様な事を言はせて置けるとも思はれますまいと信ずる。さあ！セドリック殿は御子息の健康の爲めに乾杯致すことを御辭退なされた、では予がセドリック殿御自身のために祝盃を擧げよう。」

盃は廷臣達の如何にも空とぼけた喝采の内に廻された、けれどもそれは、目論んだだけの感銘をセドリックの心に與へる事は出来なかつた。彼は天性悟りの早い方ではなかつた、が併しこの追従つみしやうだらだらのお愛想が先の侮辱の感じを消すだらうと思つた者は餘りに相手の理解力を見くびりすぎてゐたのである。けれども彼は黙つてゐた、と親王の祝盃は、「コニングスボローのアセルステイン卿の爲めに、」と叫ばれて、再び廻された。

この騎士は頭を下げて一禮した、そしてそれに答へて大盃を飲み干して敬意を表した。

「そこで、諸卿よ、」とそろ／＼飲んだ酒の酔ひが廻つて來たジョン親王は言つた、「予等はもうサクソンのお客たちにするだけの義理を立てたのだから、今度はその方々に予等が禮儀のお返しを願はう。」

——郷士殿、」とセドリックに向つて言葉を續けた、「御身はノルマン人の名を呼ぶも口の汚れと仰しやるが、どうかその名を呼んでも一番卿の口の汚れとならないノルマン人の名を、一人言つて貰ひたい。さうして、その名を呼んだが爲めに、残るかも知れない後口あとくちの苦味は、一杯の酒を以て、悉く洗ひ落していただきたいものだ。」

フィッツァーズはジョン親王がかう言つてゐる間に立ち上つて、セドリックの後にそつと歩み寄り、ジョン親王を名指す事によつて、二種族間の不和を無くするこの好機を逸のがさぬようにと彼の耳元に囁いた。セドリックはこの政策的な追従の言葉には答へもせず、立ち上つて、盃に縁ふちまで酒を注ぎながら、ジョン親王に向つて言つた——「殿下にはこの度の宴會でその名を長く記憶するに足るノルマン人を名指せよと仰せられます。これは恐らくは容易ならぬ事でごぞいます、と申す譯は外でもごぞいます——戦ん、それは詰り奴隷に向つて主人の讚美を歌へと申さるゝと更に變りはないからでございます——戦敗者に向つて、その塗炭とたんの苦しみを味つてゐる最中に、勝利者の讚美を歌へと仰せられると更に變りはないからでございます。が兎も角ノルマン人の名を擧げませう——武力に於ても、位置に於ても隨一の方を——ノルマン種族中最も勝れ、最も氣高い方かたの名を。そしてこの方の自分の力で贏ち得られ

た名聲に對して乾盃を否む者は、不忠不義な者と呼んでも憚りません、さうしてその者等を一生さうだと言ひ張りませう。——私はリチャード獅子心王の健康を祝して、この盃を挙げます！」

自分の名がこのサクソンの言葉を括ることであらうと心秘かに期待してゐたジョン親王は、實に意外にも自分の迫害した兄王の名を挙げられて一方ならず驚いた。親王は機械的に酒盃を唇の所まで挙げ、それから直ぐに下ろして、この思ひがけない發議に他の者の態度はどうかと見廻すと、その多くは賛成したものか否かと決し兼ねてゐる様子であつた。中にも、古老の經驗を積んだ廷臣達は、親王自身の例にすつかり倣つて、唇迄酒盃を挙げ、又それを自分の前に下ろした。又中にはもつと寛い心を以て、「リチャード王萬歳！」速かに御歸還あらん事を！」と叫ぶ者も多勢あつた。そして少數の者は、フロン・ド・ブーフや寺侍などもその内だが、氣むづかしい顔をして盃を前に置いたまゝ觸れようともしなかつた。併し誰も現在の王の健康を祝する乾盃を直接否認しようとはしなかつた。

セドリックは一寸の間得意の感を懷きながらアセルステインの方を振り返つて言つた、「お立ちなされ、アセルステイン殿！ ジョン親王の御宴の手厚い御待遇に御答禮申し上げたから、此處にゐることももう澤山だ。これ以上我が粗野なサクソンの作法を知りたい方々には今度我が父祖の家に来て戴くより外ありません。私達は王家の御宴も、ノルマンの款待も飽きる程拜見させて戴いたから。」

かう言ひながら、彼は立ち上つて宴席を去つた、アセルステインを始め、サクソンの血統に繋がつてゐて、ジョン親王やその廷臣の冷罵に侮辱を感じてゐた他の數人の客も彼の後に隨いて退席した。

ジョン親王はその後を見送りながら言つた——

「サクソンの野人共め、勝ち誇り、大手を振つて歸り居るわ！」

エイマ僧正は言つた、「愚僧共も十分頂戴致しましたし、喋りも致しました、——もう酒饌の傍を離れてもいい、時刻ですな。」

「僧正は今晚懺悔を聽いておやりになる美しい人でもゐて、さう歸りを急がれるのかな、」とド・ブラシーが言つた。

「いやさうではございません、騎士殿。だが愚僧は今晩家路を數哩も歩かねばならんのぢや。」

「皆な散々になりかけてゐる、」とジョン親王はフィッツアーズの耳に囁いた、「彼等はおぢけづいて先を見越したのだ、そして予に離反するものがあれば、その第一番目はあの臆病坊主だ。」

「御心配遊ばすな、殿下。」ワルデマールが言つた、「手前、彼を説き伏せて、味方の者共がヨークに集合する折必ず一味に加はらせて御覽に入れます。——僧正殿、」と彼は僧正に呼びかけた、「貴僧が馬に乗られない中に、一寸内々お耳に入れねばならぬ事がある。」

今や、ジョン親王の徒黨に直接與してゐる者や、親王の供の者やを除くと、多くの客人達は見る間に退散して了つた。

「では、これがそちの助言の結果なのか、」と親王はフィッツアーズに怒りの顔を向けて言つた、「予は予自身の宴席で酔拂ひのサクソンの野人めに侮辱せられ、あまつさへ、たゞ予が兄の名を聞いただけく

らるで、客は予が癩病患者でもあるかのやうに予から離反して行くとは！」

「御辛抱遊ばしませ、殿下、」と顧問官は答へた、「手前殿下のお咎めに逆襲申上げること出来ず、又思慮のない御輕率の爲めに手前の計畫も臺なしになり、殿下御自身のもつと優れた御判断も無駄となつたのでございますが、その御輕率をお責めする事も出来ず。然し今は罪をなすり合つてゐる場合ではございません。ド・ブラシイと手前と早速あの足を引きずつて行く卑怯者共の中へ参りまして、今は彼等も退くに退かれなくなつてゐるといふことを納得させて遣りませう。」

「それは無駄であらう、」とジョン親王は、部屋の中を亂れた足取りで歩きながら、先に飲んだ酒も幾らか手傳つてひどく苛々しながら言ひ續けた——「それは無駄であらう——彼奴等は壁上の筆蹟(ロバの王ベルシャツザーの没落を豫言する不思議な筆蹟、舊約聖書、ダニエル書、五章五節及二十五節より二十八節に至る四節参照)を見た、——彼奴等は砂の上の獅子の足跡を見た——獅子の近づく聲が森を震撼するのを聞いた——今は何をしても彼奴等の勇氣を奮ひ起されまい。」

フィツアーズはド・ブラシイに向つて言つた、「殿下御自身の勇氣を何とかして恢復出来ればいゝがな！ 御兄君の名こそ親王には瘡も同然だ。善にも惡にも、剛毅と忍耐とを缺いてゐられる親王の忠諫の臣こそ不幸千萬なことだ！」

(十五)

それでも彼奴めはわしのことを、——ハッ、ハッ、ハッ、ハッ——

彼奴の意のまゝの道具、僕だと思ひをるわ。

まゝよ、思はせておくさ、いろんな

こみ入つた心配事の中から、

彼奴の目論見と卑しい壓迫とが出来るに違ひない、

わしはもつと高い處に行く道を自分で造らう、

して一體誰がこれを悪いと言はう？

(ベイジルの悲劇)

破れた網目を繕ふ爲めには、蜘蛛は非常な苦しみを嘗めるであらう。けれども、四散したジョン親王の徒黨を驅り集める爲めにワルデマール・フィツアーズが味つたやうな苦心は、未だ嘗て如何なる蜘蛛も嘗めた事がなかつた。その徒黨の中には、好んで味方に參じたものは殆んどなく、親王の人物に心服して集つたものは一人もなかつた。で、フィツアーズは彼等の心に新しい利益の希望を浮べさせ、彼等が現在享けてゐる利益の事を思ひ出させる事が必要であつた。血氣な若い貴族達には、天下御免の放逸、爲たい放題の歡樂の情景を展げて見せ、野心のある者には權勢の豫想を、又貪慾な者には財寶を増し、領地を擴げる希望を懷かせた。傭兵の首領共には黄金を散じた、これは彼等の心を最もよく説き伏せるもので、これがなかつたら恐らくその他のどんなものも悉く空に終つたであらう。書き物

契約の類はこの敏活な親王の代理によつて黄金こがねよりも尙ほ一層惜しげなく撒き與へられた。要するに氣迷ふ者の心を落着け、勇氣の挫けた者の心を勵まし得ることなら何一つ爲すには置かなかつたのである。リチャード王の歸國に就いては到底有りさうな筈のない事だと説いた、それでも尙ほ、相手の疑はしげな顔付や、しつかりせぬ返事から、一味の者等の心に最も多くかゝる懸念は、これだと思つて取つた時、彼は大膽にもそのリチャード王歸國の件を、假りに眞實の事であるとしても、自分等の政治的畫策が變るべき筈のものではないと論じ立てたのである。

「萬が一リチャード王が御歸國あらせられるならば、」とフィッツフーズは言つた、「それは聖地にお供して行かなかつた者共を犠牲にして、王の貧窮な、疲弊した十字軍士を富ます爲めに御歸國になるのだ。御不在中、國の掟、或は王の權利に違反し或はそれを侵害したと解せられるやうな事をした者があれば、さういふ者共を恐ろしい罪に問ふ爲めに御歸國なさるのだ。寺侍テンプルや救護僧兵達ホスピタルが聖地で戰爭中佛蘭西のフィリップ王の方にお味方申したその讐あだを報いに御歸國なさるのだ。要するに、弟君ジョン親王の徒黨を残らず謀反人として罰する爲め御歸國なさるのだ。各々方はあの方のお力を恐れなさるのか？」とその親王の狡猾な股肱の臣は尙ほも續けて言つた、「我々はあの方を剛勇無雙の武士と認めてゐる、が併し今はアーサー王の時代ではない、一人の勇士が多勢の敵と戦ふ事の出来た時代ではない。萬一リチャード王が實際御戻りあるなら、それは御獨りでに相違ない、——供もつれず——味方もなくさ。王の勇ましい兵士等の骨は白骨となつてパレスタインの砂地を白くした。歸國した少數の侍臣はかの

アイワンホーのキルフレッドのやうに、乞食同然の廢殘の身となつて此處に彷徨さまよつてゐる——そして君達はリチャード王の御正統に就いて何と仰せらるゝな？」と、この點に關し疑念を抱く者等に答へて語を進めた。「リチャード王の嫡子の權は、征服者キリアム一世の御長男、ノルマンディーのロバート公程きつぱり確かなものであらうか。而も公の第二第三の弟君に在おほすキリアム・ザ・レッド及びヘンリーさまは相繼いでロバート公を差し置いて輿論の選ぶ所となつた。ロバートさまは苟くもリチャード王の辯護の引合ひに出されるだけの價值長所なら悉く持つて居られた。公は大膽な騎士であつた、味方や教會には寛大な立派な將士であつた、揚句の果てに公は聖墓の十字軍士でもあり征服者でもあつた。それなのにそのロバート公は國民、而も公に治めて貰ひたくないといふ國民の意志に背かれたばかりにカーディフの城で盲目の、慘みめな囚人めしととなつて歿なられた。至上の權を握るに最も適あはしいお方を——即ち、」と言ひ直して、「そのお方を選べば貴族の利益が最も助長されるやうなお方を、王家から選ぶといふ事は、我々の當然の權利なのだ。人物の器量では、」と更に付け加へて、「或はジョン親王は兄君リチャード王より劣つて居られるかも知れぬ。が併し後者が手に復讐の刃を持つて歸國せられるのに、前者が賞與、赦免、特權、財寶、及び爵祿をお出しなさるといふ事を考慮する時、常識から言つても貴族が擁立せねばならぬ王は孰れであるかは疑ふ餘地もあるまい。」

これらの事を始め、或は相手の特殊な事情に應じて彼が試みたいいろ／＼の議論、その他多くの論法は、ジョン親王の徒黨の貴族に豫期した通りに、重要視された。大概の者は、ジョン親王の頭かぶに、王冠

を載せる大體の準備を整へる爲め、ヨークに開かれる筈の會合に参加する事を承諾した。夜も大分更けて、フィッツァーズはさまざまの斡旋に身神疲れ切つてゐたが、その結果に満足しながら、アシユビーの城に歸つて來た。その時彼は、ばつたり、ド・ブラシーに逢つた。見れば、ド・ブラシーは宴會の服を緑色の胴着に着更へ、同じ地質、同じ地色の脚絆を穿き、革の帽子、短劍、肩に角笛をぶら下げ、片手に長い弓、帯に一束の矢といふ扮装であつた。これが若し外側に近い部屋でこの姿に出逢つたのなら、フィッツァーズは必ず衛兵の一人と見違へて、氣附かずに通り過した事であらう、がそれは奥の間だつたので、氣を附けた上にも氣を附けて見て、始めてイングランドの郷士の服裝をしたノルマンの騎士であることが分つたのであつた。

「これはまた何の假面狂言だ？ ド・ブラシー殿、」とフィッツァーズはやゝ腹立たしげに言つた。「我が君ジョン親王の御運命が今すんでに極まらうといふ大事な場合に、眞逆クリスマススの假裝や假面でもありませんまい？ 何故貴方は私と一緒にあの不人情な臆病者共の中へ參られぬのだ、あの臆病者といへばリチャード王の名を聞いただけでももう縮み上つてしまふと云ふ手合、まるで噂に聞くサラセンの泣く子が王の名を聞いて黙ると同じだ。」

「私は私の仕事を勤めてゐたのだ、」とド・ブラシーは冷靜に答へた。「丁度貴方が貴方の仕事をして居られたと同じやうに。」

「私が私の仕事をしてゐた！」とワルデマールは鸚鵡返しに言つた、「私は我々の恩人、ジョン親王の

仕事をしてゐたのですぞ。」

「ワルデマール殿、貴方はそのジョン親王の仕事をなさるのに、卿御自身の個人的利益を増進する以外に、何か他の理由がおありになるやうなお口振りだが、フィッツァーズ殿、私も卿とは互に知り合つた仲だ、——野心は卿の求むるもの、快樂は私の求めるもの、それは皆んな我々の年齢の差違に相應するのだ。ジョン親王の事も卿は私の考へる通りに考へて居られる。親王は果斷な國王となるには餘りに弱過ぎ、寛大な國王となるには餘りに暴虐過ぎ、人望ある國王となるには餘りに傲慢不遜だ、又一番つまらない國王にだつて長くなつてゐるには餘りに氣紛れで小膽であるのだ。併し親王は、フィッツァーズとド・ブラシーとが出世し、繁榮する望みをつなぐ國王だ、さればこそ、卿は政策を以て親王を助け、私は私の自由隊の槍騎兵を以て、助けるのだ。」

「頼もしい加勢だ、」とフィッツァーズは堪り兼ねて言つた、「全くこの危急の場合に道化の眞似をするなどとは。——一體こんな火急な折にさういふ馬鹿げた服裝をして何をなさるお積りだ？」

「妻を手に入れる爲めだ、」とド・ブラシーは冷然として答へた、「ベンジャミンの一族のやり方(舊約聖師記廿一章にあり)に倣つて、妻を手に入れる爲めだ。」

「ベンジャミンの一族？ 私には貴方の仰しやる事がとんと解らぬ。」

「昨晚、エイマ僧正が例の吟遊樂人の唄つた物語に答へて一つの話の話を聞かせてくれた時、貴方は居られなかつたかな？——僧正はずつと昔パレスタインで、ベンジャミンの一族と生き残つたイスラエル人

との間に恐ろしい不和がどうして起つたか、そしてどうして彼等がその一族の武士を殆んど一人餘さず、ずた切りに切つたか、そしてどうして彼等が、聖母マリアさまに掛けて残つた者共に同じ血統の間で結婚する事を許さぬと誓つたか、そしてどうしてその者共が彼等の誓ひを呪ひ悲しむやうになり、法王けいしや下げに人を遣つてどうすればそれを解かれるかと相談したか、そしてどうして、法王の意見に依つて、ベンジャミンの一族の若者が或る素晴らしい試合場から、其處に居合せた女達を一人残らず連れ去つて、さうしてその花嫁の、又その花嫁の家族の承諾もなしに妻にしたかといふ事をお話しなされた。」

「私もその物語は以前聞いた事がある。」とフィッツアーズは言つた、「尤も僧正か貴方かどちらかど不思議に日と事柄とを大分ちぐはぐにしてはゐられるが。」

「實はそのベンジャミンの一族のやり方に倣つて妻を手に入れようと思ふのだ。」つまりこの身装で、今晚この城を去つたサクソンの牛共の群に追ひついて、非常に美しいローエナ姫を彼奴等から、かつ攫つて来ようと云ふ心算なのだ。」

「貴方は氣が狂はれたか、ド・ブラシー殿。まあお考へなさい、あの人々はサクソンでこそあれ、金もあれば力もある連中だ、而もサクソン系の者で富や位を授つてゐる者はごく稀なだけに、同國人からは一しほ尊敬を拂はれてゐるものだ。」

「して何人のもでもないとおれば、征服の業は成るであらう。」

「少くとも今はその時ではない。かう危機が近づいては萬民の人望が第一だ、ジョン親王は彼等の愛す

る者を害ふ者は誰であらうと相當の罰に處さないではお置きなされるまい。」

「親王がさうなさるおつもりなら、さうなさるがいゝ、私の如き壯んな槍の使ひ手の加擔と、サクソンの野人のやうな勇氣のない烏合の衆の加擔とどんなに違ふか、直ぐお分りになるだらうから。だが私が直き正體を見破られるとは思はなぬ。私はこの扮装をする角笛を吹くあの勇ましい山番には見えませんか？ 亂暴狼藉の咎めはヨークシャーの森の浪士共に抹りつけてやらう。私はあのセドリックの行動に確かな間諜を幾人も附けて置いた。——今晚彼奴等は聖ウィットトル、いやウィットホールド、いや彼奴等があゝのバートン・オン・トレントにゐるサクソン聖者の田舎者を何と呼ぼうと關はぬ、兎に角その聖者の田舎者の寺に泊る筈だ。明日の道中で彼奴等は我々の勢力範圍内に入つて来る、そして鷹のやうに、我々は彼奴等を一遍にかつ攫つて了ふのだ。直ぐその後で私は私の正體で現はれて、慇懃な騎士の役を務め、不幸な、惱める美人を亂暴者の手から救ひ、フロン・ド・ブーフの城か、乃至は、若し必要とあらば、ノルマンディーへ連れて行つて、モーリス・ド・ブラシーの花嫁となり、主婦となる迄、二度と姫の身内の者のところへは出しは致すまい。」

「飛んだ御賢明な御計略だ、して全部貴方お一人の企てではあるまい。——さあ、隠し立てなされるな、ド・ブラシー殿、誰がその企ての手傳を致されたな？ そして實行の折應援するのはどなただ？ 貴方の一隊はヨークのやうな遠方へ行つてゐるのだから、誰か援けるものがあるに相違ない。」

「いや是非知りたいとあらば申し上げぬでもない、ベンジャミンの人々の冒険が教へてくれたこの計畫

を考へ出したのは、寺侍ブリアン・ド・ボア・ギルベール殿なんです。ボア・ギルベール殿は襲撃の折應援して下さる筈だ、彼と彼の家來共は浪士の装をせられる、そして私は衣類を着換へてから勇ましい腕を奮つて、彼等から姫を助け出すのだ。」

「全くその御計畫、御兩人額を鳩めてお考へなされただけの事がある！ して卿の御慎重な事は、姫を卿の立派な共謀者の手に委すといふ御計畫中に、實によく現はされてゐる。私の思ふに、卿は姫をサクソンの同士の手から取る事には成功なさるかも知れない。が、どうして卿が姫をその後ボア・ギルベールの握る手から救ひ出されるか、その方がずつとく如何はしく思へる——彼は鷓鴣に擬みかかつてしつかりとその餌食を離さぬやうによく慣らされた鷹だ。」

「彼は寺侍だ、だからこの世嗣の姫と結婚しようといふ私の計畫に反対する筈がない——してド・ブラシーの未來の花嫁に對して何か恥づべき事を企てるなんて——まさか！ 私にそんな危害を加へようとはすまい、彼も自分一人に寺侍團全部を背負つて立つ程の者であるからな。」

「それでは私が何を申上げても今度の馬鹿げたことを思ひ止まりなさらぬとあれば致し方もない（私は貴方の性癖の頑固な事をよく存じてゐるからな）、まあ、精々餘り時間を無駄に潰さないやうになさるがい——して卿の痴事に餘り長くかゝはらぬことは勿論、時機を失してドヂをふまないやうにしつかりなさるがい。」

「なにほんの二三時間の仕事なのだ、追つ附け私は勇敢な部下を引き連れてヨークに行かう、貴方が如

何なる大膽な計畫を敏速にはなさつても早速支持することが出来るやうな部下を引き連れましてな。

——それはさうと仲間の者共がもう外庭に集つてゐるやうだ、軍馬も足踏みしたり嘶いたりしてゐる。

——では失禮します。——私は眞の騎士のやうに、美人の微笑を贏ち得て來よう。」

「眞の騎士のやうに？」とフィッツァーズは後姿を見送りながら、ド・ブラシーの言葉を繰り返した。「いや、寧ろそかう云ふのが當然だ——馬鹿者のやうに、或は、最も眞面目な最も大事な仕事を擲放しにして置いて、自分の傍をふはくと飛んで行く薊の穂を追ふ子供のやうに。——併し考へると、わしはあんな道具を使つて働かねばならんだ、そしてそれは一體誰の爲めにだらう？——ジョン親王の爲めにだ、あの放蕩者で愚者で、そして既に叛逆の子で、道ならぬ弟である事は確かであるが、又それと同じく恩知らずの君らしいそのジョン親王の爲めにだ。——が待てよ、親王は——親王も亦わしが使ふ道具の一つに過ぎぬわい。そして親王が如何に傲慢であらうが、萬一御自分の利益とわしの利益とを別にしようなどと云ふ氣を起したなら、この道具の一つだといふ事を直ぐにも思ひ知らせてくれるのだ。」

この政治家の物思ひは此處で奥の一間から聞えて來る、「ワルデマール・フィッツァーズ卿！」と呼ぶ親王の聲に遮られた、そして、帽子を脱いで、この未來の大臣（かゝる高い望みをこの狡猾なノルマンは懷いてゐたのである）は、未來の國王の命令を受くべく急いでこの場を去つた。

人跡絶えし荒野の奥に、

聖き隠者は若きより老へと過ぎ行きぬ。

苔を床、窟を貧しき庵にて、

食ふは木の實、飲むは泉の清き水、

人の世離れ、神とその日を打ち過し、

祈りは彼のすべての仕事——禮讃は

彼のすべての喜びなりき、

(バーネル)

讀者諸君は總試合の勝負が、無名の騎士——而もその日の初めの頃自分から手出しをせず、無頓着な行動をしたので、觀衆から「黒い不精者」と綽名されたその無名の騎士——の働きで決せられたといふ事をまだお忘れにはならない筈だ。この騎士は勝利を得ると俄かに試合場から姿を隠して、その武勇に對する賞品を受けよと促された時には、もう行方が知れなかつた。彼は傳令官や喇叭の音が彼を呼んでゐる間に、進路を北へ北へと取り、なるべく人通りの多い道を避けて、森林の中の一歩の近路を選んで歩いてゐたのである。

彼はその夜を普通の道筋から少し離れたところにある、とある小さな宿で明かした、が其處で、彼

はその當日の試合のその後の様子を一人の彷徨の吟遊樂人から聞くことが出来た。

翌日、騎士は長途の旅をする積りで、朝早く其處を出立した、馬は前の日の朝の間十分休ましてあつたので、途中餘り休まず必要もなく長の道中をする事が出来た。けれども、うね／＼した間道ばかり選つて歩いた爲め、全く見當がつかなくなつてしまつて、黄昏が迫る頃になつても、未だやつと、ヨークシャーの西、區の境迄しか着くことが出来なかつた。そして此處迄來た時には、馬も人も一休みしなかつたし、その上、夜が刻々と近づいて來るので、一夜を明かす場所を捜すことも必要になつて來た。

が生憎この旅人の着いた處は、宿を得るにも食物を得るにも都合がよくないやうに見えた、世の遍歴武者は、かゝる場合には、馬に草を食ませ、自分は櫛の樹を屋根として、愛人に想ひを馳せつゝ、身を横へるのであるが、彼も亦かうした遍歴武者の常の手段を取らねばならなさうであつた。併し黒裝束の騎士は想ひを馳すべき愛人も持たねば、又あつたとしても、戦ひに無頓着らしく見えたと同様、戀にも亦無頓着であつた彼には、戀の爲めに疲れと飢ゑとを忘れたり、又戀に臥床と夕餉の充實した慰めの代役を勤めさせたりする程、愛人の美と無情とに熱い思ひを寄せる事は出来なかつた。それで彼は邊りを見廻して、自分が今十重二十重に深い森に包まれてゐるのを見て、ひどく楽しからず感じたのである。森の中には無論廣場もかなりあつたし、小路も幾筋もあつたが、併しその細道は、この森の中で草を食む數多の家畜の群か、追はれる獸、捕へる獵人か、作つたと思へないやうなもの

であつた。

騎士が主として進路を定める上の頼りとした太陽も、はや左手に見えるダービィシャーの丘の蔭に没して了つた。そしてどんなに骨折つて旅を續けて見ても、自分の道筋を進めば進むだけ本道から外れて行きさうに思はれるのであつた。せめて家畜の番人小屋か、獵場の番人小屋かのある所に出られないものでもない。最もよく踏み均された道を選ぼうとしてもやはり駄目であつた。とうとう幾度か思ひ切つて一つに極めようとしたが、それも全く出来なくなつた。揚句の果、騎士は思案に暮れて遂に馬が進むがまゝに任せる事に決心した、これまで度々こんな場合に遭つて、彼はかうした獸がかうした急場に臨んで、自分と騎手とを救ひ出す驚くべき才能を持つてゐることを、よく知つてゐたからである。

この駿馬も、鎖帷子に身を裹んだ騎手を乗せて一日長い旅をしたので、痛ましい程疲れてはゐたが、手綱を緩められて、自分の歩むが儘に任せられたと知るや直ちに新しい力と元氣とを奮ひ起したやうに見えた。そして以前には拍車を當てゝも殆んど呻きしか出さなかつたその馬が、今度は自分を信任せられたのを誇るかのやうに、耳を立てゝ、自ら進んで、前よりも活潑な足取りで歩み出した。この馬が採つた道は日中騎士が執つた路筋とは却つて反對なものだつた、併し馬は自分の選んだ路に自信ありげな様子なので、騎手は馬の進むに任せた。

行つて見ると、果して馬の進路は正しかつた、といふのは、小徑は間もなくやゝ廣い踏み均された道

らしくなつて来たからである。そして騎士は遙かにひびく小さな鐘の音を聞いた、御堂か又は庵かの近くに來たのだと、彼はかう氣ついたのであつた。

で、彼は間もなくからつとした芝生の平地に着いた。その平地の向う側には一つの巖が、なだらかに傾斜した原つばから、にゆつと突き出て、この旅人に灰色の風雨に打たれた面を向けてゐた。その巖の側面には處々蔦が絡みつきその他の處には解や柀の藪がそのそびえ立つ巖の絶壁に根を張つて、崖の上に枝を垂れてゐた。そのさまは丁度戰士の飾羽毛が鋼の冑の上に翹るのに似て、見るから恐ろしい處に趣きを添へてゐた。その巖の根方に寄り掛つたやうに、一軒の粗末な小屋が建てゝあつた。その小屋は主にこの邊りの森に倒れてゐた樹の幹で組み立てられ、その隙間は粘土を交ぜた泥炭苔で塞いで、雨風を凌ぐやうにしてあつた。枝を切り拂つて、頂近くに十字なりに棒の切れを結びつけた椽の若樹の幹が、十字架の簡單な標徴として、扉の傍に眞直ぐに立てゝあつた。右手のやゝ距つた處には、非常に清淨な水が岩間から湧き出て、田舎めいた水盤に作へ上げた石の洞の中へ落ちてゐた。そして其處からこぼれ出した流れは、水の鑿で永く掘り窪められた溝を通つて、細やかな音を立てながら、斜面を下り、それからこの狭い平地を通つて、隣りの森の中へと、姿を消して了ふのであつた。

この泉の傍に、屋根の幾分落ち込んだ、非常に小さい荒廢した禮拜堂があつた。この建物は、未だ破損しなかつた頃でも、奥行十六呎、間口十二呎を超えてはゐなかつた、そしてそれに比例して低い屋根は、この堂の四隅から出て、各々短い重い柱の上に支へられた、四個の同中心の迫持の上に載つ

てゐた。この迫持の中二つは、屋根がその間に落ち込んでゐたけれども、稜のところは残つてゐた。併し、他の二つの迫持の上は屋根がそつくり元のまゝであつた。この古い御堂の入口は、古い／＼サクソン建築によく現はれて来る、あの鮫の齒に似た雁木形のくり形の幾層かで飾つた餘程低い圓形の迫持の下についてゐた。その入口の上には鐘樓があつて四本の小さな柱の上に建て、あつた。そしてその中には、雨風に打たれた、緑色の鐘が吊してあつた。黒装束の騎士が今しがたふと耳にしたのは、この鐘から起つた弱い響であつたのである。

「このおだやかな閑寂な光景が、すつかり黄昏の光を浴びながら、この旅人の眼の前に展開して、如何にも彼の爲めに一夜の宿を與へてくれさうな心持を起させた、と云ふのは行き暮れたり、踏み迷つたりする旅人を款待するのは、森に棲む隠者達の特別なお務めだつたからである。」

で、騎士は今此處に述べた細々した事を仔細に考へる暇もなく、聖ジュリアン(旅人の守護人)に結構な宿を授けられた事を謝しながら、馬から飛び下りて、注意を促し、案内を乞ふ爲めに、手にした槍の石突で、庵の戸を叩いた。

ところが、中からは急に返事がなかつた、そしてやつとあつたと思ふと、それは又頗る不吉な答であつた。

「どなたであらうと、お行きなさい、」と言ふ太い嘎れ聲が庵の中から與へられた返事であつたのだ、「神及び聖ダンスタン様の僕が、夕の勤めを致して居る邪魔をしてはなりません。」

「教父殿、」と騎士は答へた、「この森に行き暮れた憐れな旅人でございます、どうぞ、御慈悲と御款待とを施して戴きたうございます。」

「旅の衆、」と庵の主は言つた、「聖母マリア様や聖ダンスタン様のお思召しで、愚僧は左様な善根を施す方ではなく、却つて施される方に定められた者だ。此處には一疋の犬にさへ分けてやる食物もない、また優しく育てられた馬なら、馬でも愚僧の寢床を賤しめる事であらう——こんなわけだ、お行きなさい、道中の御安泰をお祈り申す。」

「でももう段々聞くなつて、こんな森の中をどうして參られませう？ お願ひだ、和尚様、御身も基督教徒なら、せめて戸を開けて、道なりとお教へ下さらんか。」

「いやこちらこそお願ひだ、御教への御兄弟、」隠者は答へた、「この上愚僧の邪魔をして下さるな。愚僧はもう主の祈り一段と、聖母の祈り二段と、それから使徒信條の誦唱と、邪魔をされて了つた、愚僧は憐れな罪人ではあれど、愚僧の立てた誓ひに従つて、この祈りを月の出る前に上げて了はねばならんのだ。」

「道を——道を——」と騎士は呶鳴つた、「これ以上何一つして下さらぬといふのなら、せめて道をお教へ下さい。」

「道なら何でもない。その道は森から沼地へゆき、其處から淺瀬の所へ行つてゐる、淺瀬も雨が上つてゐるから、今なら渡れよう。その淺瀬を渡り切ると、左岸を登る際、お氣を附けなさい、少々崖に

なつてゐるでな。それからその河の上に突き出てゐる道は、近頃、實は聞いて知つた事だが（何しろ愚僧は滅多に禮拜堂のお勤めを怠らぬのでな、）數ヶ所崩れたさうだ。それからずつと眞直ぐにお進みなさると——」

「壊れた道——崖——淺瀬に、沼地！」と騎士は僧の言葉を遮つて言つた。——「隠者殿、若し貴僧がこれ迄鬘を生やし、珠數をつまぐつた方々の中で最も聖い方であつたら、私に今晚この道を行けとは先づお勧めなさるまい。なんと御僧、御僧は國の施して生きてゐられる方だ——施しを受けるなんて御身には勿體なさ過ぎる、と私には思はれるが——それなら御身には、旅人が難澁してゐる時に宿を斷る資格は更にありますまい。扉を早くお開け下さい。さもなければ十字架に掛けても屹度、扉を打壊しても入りますぞ。」

「旅の衆、さう執拗く仰しやるな。餘り執拗くなさると愚僧は自分の身を護る爲め、止むを得ず、俗界で用ゐる武器を使はにやならぬやうになる、若しさうでもなつたら、お手前にとつては尙ほ一層悪くならう。」

この時先刻からこの旅人の耳に入つてゐた遠く吠え唸る聲が、恐ろしく高く猛烈になつて來た。で騎士は、隠者が無理にも入ると云つた騎士の嚇かし文句に吃驚して、この騒々しく吠え立てる犬共を、隠まつてゐた何處か屋内の奥の方から呼び出して自分を護らせるのであらうと思つた。で隠者が己れの不親切極まる所存を果すためにしたこの用意に、ひどく激昂して、騎士は扉を力任せに烈しく蹴つ

たので、錠前も柱もがたびしと音を立て、烈しく震動した。

隠者は、又もこんなに扉を足蹴にされては堪らないと思つて、今度は聲を張り上げて叫んだ。「お待ち下さい、お待ち下さい、——力業はお止し下さい、旅の衆、唯今すぐ扉を開けますから——尤も開けたとお氣に召すやうな事はできませんが。」

扉はやがて開かれた。そして麻布の衣と頭巾を着け、藺草の繩の帶を締めた、大きい、頑丈な骨組の隠者がぬつと騎士の前に現はれた。彼は片手に燃える松明を持ち、片手に太く、重く、棍棒と云つた方がよい位ゐの、野生林檎の木の棒を持つてゐた。半ばグレイハウンド半ばマステイフの大きな尨毛の犬が二匹、扉が開かれたら早速旅人に跳び掛つてやらうと待ち構へてゐた。併し松明が、外に立つてゐる騎士の高い前立と黄金の拍車とを照らした時、隠者は、恐らく最初の考へを變へたのであらう、犬の怒りを制止して、そして、言葉が無骨なやうな慇懃なやうな調子に改めて、騎士を庵の中に招じた。そして隠者は、日没後に戸を開けることをいやがる辯解として、日没後になると聖母マリア様にも、聖ダンスタン様にも、或は又そのお二人に仕へてこの世を送る出家の人々にも、少しも敬意を拂はうとせぬ盜賊や浪士が澤山その邊をうろくしてゐるからだと言つた。

「貴僧の庵の貧しさは、」騎士は邊りを見廻したが、木の葉の寢臺、櫛の木に不細工に彫られた十字架、彌撒經、それから荒けづりの卓子と二脚の床几、その他一二の見苦しい家具類の他何も見えぬので言つた——「貴僧の庵の貧しさは、これだけでも立派な泥棒除けのやうだ、牡鹿でも引きずり倒しさを

うな、また大概な男には負けさうもない、大きい強い忠實なあの二匹の犬の助けが泥棒除けになるのは言ふまでもないが。」

「この森の親切な番人が、時勢の直る迄、愚僧の獨住を護る爲め、この犬を使つてもいゝと許してくれたのだ。」

かう言つて、彼は燭臺代りの鐵の振れた棒に松明を差し、そして燃え残りの火に枯木を加へて燃し、その前に櫛の三脚臺を置くと、その卓子の片側に床几を置いて坐り、騎士にも向う側へ坐るようにと無言で合圖した。

二人は腰を下ろした、そして互に大層眞面目な顔をして、凝と見交はした——どちらも心の内に、自分の向ひに坐つてゐるもの程強さうな、勇健さうな人物を餘り見た事がないと思ひながら。

「隠者殿、」騎士は、長い間、主を見てゐたが、その後でかう言つた、「若しも貴僧の敬虔な御瞑想のお邪魔にならぬなら、私承り申したい事が三つあります、第一に、馬を何處へ繫いだなら宜しいか。

——第二に、夕餉として何を戴かせませうか。——第三に、私は今晚何處に寝かせて頂かせませうか。」

「愚僧は指を以てお答へ申しませう、合圖で間に合ふのに言葉を以て話す事は、愚僧が掟に反きますのでな。」かう言ふと、彼はこの部屋の一つの隅を次ぎ／＼に指した。「既は彼處だ——寢床は彼處だ。そして、」と隣りの棚から二掴み程の煎り豌豆の入つた木盤を手を伸ばして下ろし、それを卓子の上に置き、さうして、「お夕飯は此處にあります」と附け加へた。

騎士は肩を擡つた、そして庵を出ると、馬を連れて来て（それまで樹に繫いで置いたのである）、大そう念入りにその鞍を解いて、乗馬の疲れた背に自分の外套を掛けてやつた。

隠者はこの旅人が馬の世話をする時に示した心遣ひや、扱ひぶりに同情の念を確かに動かした。と云ふのは、彼が森の番人の乗馬の爲めに残してあつた稜の事を何か吐きながら、奥から一束の芻草を引張り出して、それを騎士の駿馬の前に擴げたり、又直ぐその後で騎士の寢床に充てた隅に枯羊齒を幾らか振り撒いて、床を作つたりしてやつたからである。騎士は隠者の厚意を謝した。そして互の義理を濟ますと、二人は又卓子の脇の席に戻つた、その卓子の上には彼等の間に豌豆の木盤が置いてあつた。隠者は元は羅甸語であつたが、今は其處此處の長い巻舌の語尾以外には元の言葉の跡形も殆んど残つてゐないその長々しい食前の祈禱を唱へてから先づ食べる模範を客に示した——鋭さと皓さとは野猪の齒にも劣らぬ程の齒を備へた恐ろしく大きい口の中へ、彼は三四粒程の乾豌豆を慎み深くつまみ入れた、それは丁度大層大きくて、磨き力のある磨臼に僅かばかりの穀物を入れたやうに見えるたのであるが。

騎士は、かくも殊勝な範に倣ふ爲めに、胄、胴當を始め、鎧の大部分を脱ぎ捨て、金髪の方々と捲毛になつた頭、上品な顔立、著しく爛々と光る碧眼、恰好のよい口、その上唇を蔽ふ髪よりも黒い口髭など、何處迄も、彼の強さうな姿によく釣り合つた、大膽不敵な冒険心の強い男の風貌を隠者の前に曝け出した。

隠者も、客人の度胸に負けまいとするものゝ如く、頭巾を後へはねのけて、男盛りの者の持つ圓い頭を出した。硬い黒い捲毛の環に取り巻かれた、綺麗に剃つてある脳天は、何處か高い生垣を廻した村の家畜小舎と云つた風に感じられた。顔立には少しも僧侶らしい謹嚴のところも、禁慾者らしい枯淡なところも表はれてゐなかつた。それどころか却つて、それは豪放大膽な顔付で、太く黒い肩、整つた額、喇叭吹きの際のやうに圓く赤い頬、そしてそれから長い捲毛の黒鬚が房々と垂れてゐる。さういふ顔貌は、この出家の筋骨逞ましい體付と相俟つて、豌豆や野菜よりも寧ろ牛の腰肉や、鹿の股肉を食べてゐる事を示してゐた。この不釣合を客は決して見逃さなかつた。彼はやつとの事で一口の乾豌豆を咀み終ると、今はどうしても敬虔な亭主役に何か飲物を馳走して下さるようにと頼まぬ譯に行かなくなつた、そこで隠者はその頼みに應じて、泉から最も清い水を大罐に一杯汲んで来て、彼の前に差し出した。

「この清水は聖ダNSTANの井戸から汲んで来たものだ、」と隠者は言つた、「聖人はこの井で今朝の陽が又明日出る迄の間に五百人の邪教を信ずるデーモン族やブリトン人を洗禮遊ばされたのだ——有難や有難や！」そして彼の黒い鬚をその水差しに當て、今言つた讚辭に相應しさうもない程ほんのちよつぴりとそれを飲んだ。

「和尚様、貴僧は今召し上つた僅かな食事と、この聖いが併し少々淡い飲料とで、不思議なほどお肥りなされたな。まるで貴僧は、この寂しい荒野で、彌撒を讀み、煎り豌豆と冷水で命をつなぎながら

はかなく一生を送るよりは、村相撲で褒美の羊を取るか、棒試合に賞品を獲るか、それとも劍術試合で楯を採るかした方が、ずっと似つかはしく見えますな。」

「騎士殿、貴方のお考へは、無智な俗人の考へのやうに、肉に即いてゐる。愚僧は聖母マリア様と守護神ダNSTAN様との思召しによつてこの僅かな宛行を授けられ、これのみに限つてゐるのだ、丁度、野菜と水とが聖兒シアドラク、メシエク、及びアベドネゴ（この三人は聖兒と呼ばれ猶太人が虜になつた時、王の食の後に至つて、王の饌を食べた少年よりも、美しく肥え太つた。詳細は舊約聖書、ダニエル書一章にあり）に授けられて、彼等はサラセンの王から宛行はれた酒と肉とで身を穢すよりは寧ろこの野菜と水とを飲んだやうに。」

「和尚様、天は一體誰の爲めに此様な奇蹟を行ふ思召しでございますか？ 貴僧のお名を罪深い俗人の私にお洩らし下さいませ。」

「愚僧をコプマンハーストの僧とお呼び下さるがよい、この邊ではさう呼ばれてゐますので——人々は、實のところ、それに聖といふ形容詞を冠せて下さるが、愚僧はそれを誇りとはしないのです、左様な肩書を付ける柄ではありませんからな。——そこで、騎士殿、愚僧も貴方の御姓名を承はりたいものです。」

「コプマンハーストの聖僧殿、この邊の人々は、私を黒装束の騎士と呼びます、——多くの者は、それ

に不精者の形容詞を附けるが、私に功名を競ふ野心がちつともないからださうな。」

隠者は客の答に殆んど微笑を禁ずる事が出来なかつた。

「して見ると、不精騎士殿、貴方はよほど慎重な思慮深いお方のやうだ。それに又、愚僧の貧しい齋ではお口に合はないやうだ。恐らく宮廷や陣營の放縱に慣れ、都の贅澤にお慣れなすつた身でお有りのやうだからな。それにつけて思ひ出したが、不精騎士殿、慈悲深いこの森の番人どのが私の保護の爲めにこの犬を、それから亦この稜の束を愚僧に置いて行つた折、愚僧には亦食物を置いて參つた。實は愚僧には不向きのもので、そんな事よりも大切な色々の考へ事に紛れて、今迄とんと失念致して居つた。」

「それは番人がさう致したに相違ありません。私は貴僧が初めて頭巾を脱られてから、この庵にはもつといふ食物があると睨んでみました。——貴僧の番人は何時も愉快な男らしい、そしてこんな豌豆をばり／＼噛み碎く貴僧の奥歯や、この甘くもないものをがぶ／＼飲み込む貴僧の喉を見た者は誰も、貴僧がこんな馬の秣や馬の飲物(卓子の上の食物を指しながら)に甘んじて、元氣の衰へるのを我慢する人と認めることは出来ません。だから、御遠慮なくその番人の施物をお見せなさるが宜しい。」

「隠者は騎士に不安さうな眼を投げた、その眼は一種滑稽な躊躇の色を含んで、丁度己れの客を信ずるにどの程度迄用心深くしたらいいか分らないやうであつた。けれども騎士の顔色には、面相を見てもそれと知られる程の思ひ切つた腹藏なさが現はれてゐた。彼の微笑にも亦その内に何處となく堪らなく滑稽なところがあつて、騎士に信義と忠實とのあることを保證してゐた、主もそれには感應せず

無言の目くばせを一二度交すと、隠者は立ち上つて小屋のずつと向う側に行つた(そして細心の注意と多少の工夫を凝らして隠してあつた納屋の戸を開けた。この入口から出入する暗い小屋の奥から、彼はすばらしく大きな白鐵の盆に、焼いた大きな肉パイを載せて持つて來た。この大皿を客の前に置くと、客は自分の懐劍を使つてそれを切り裂いて、早速その中味を味はつた。)

「この親切な番人殿は、此處に來てからどれ位になりますか？」騎士は、御馳走の追加の分を幾口かせか／＼と呑み込んだ後で、上機嫌の主に向つて言つた。

「二ヶ月ばかり、」と隠者は周章で答へた。

「眞實以て、貴僧の庵にあるものはどれもこれも奇蹟だ、聖僧殿！ といふのはこの肉を提供した肥えた牡鹿めは、今週はまだ脚で駆け廻つてゐるに相違ないからだ。」

隠者はこの觀察に少々顔を赤らめた、その上、彼は客が遠慮會釋なくむしや／＼やつてゐるその肉パイが段々減つて行くのをぼんやり見詰めながら、たゞ如何にも情けなさうな様子をしてゐた、以前禁慾などを口にした手前、今更肉パイ退治の仲間入りをするわけにもいかなかつたのである。

「私はパレスティンにゐたことがあります、」と騎士は突然食べるのを止めて言つた、「そして客を款待す亭主は誰も客と一緒に御馳走のお相伴をして、その御馳走のいゝか悪いか毒味をするのが、彼處の習慣のやうでした。私は決して貴僧のやうな聖いお方に、不親切な事などあらうとはお疑ひ申しません、けれども貴僧が若しこの東邦の習慣にお従ひ下されば、誠に千萬忝う存じます。」

「その要もござるまいが、貴方の御懸念をお安め申す爲め、騎士殿、愚僧一度だけ戒律を破る事に致しませう。」と隠者は答へた。さうして當時は肉又といふものがなかつたので、彼は早速肉パイの眞中に手を突き込んだ。

固苦しい禮儀の氷が一度とけると、客と亭主の間には、どちらが一番よく食ふかの競争が始まつた。そして騎士の方が恐らく一番長く斷食してゐた筈のだが、しかし隠者の方が見事に打ち勝つた。

「聖僧殿、」と、空腹が満たされると騎士は言つた、「私金貨一枚に對して向うの私の駿馬をお賭け申さうが、我々が唯今この鹿肉の御恩恵を蒙つてゐるその正直な番人殿は、この珍味な肉パイの味をよくする爲め、葡萄酒一本か、キャナリー酒一樽か、それとも何かそんなちよつとしたものを置いて行かれたに相違ありませんまい。これはもう確かに、貴僧のやうな厳格な隠者の記憶には残る程のものでない瑣事でありませう。でも若しも一度向うの倉をお捜し下されたら、私の推測の當つてゐる事がお分りなさらうと存じます。」

隠者はそれに答へてたゞにやりと笑つただけであつた、そして納屋の所に戻ると、凡そ二三升も入らうかと思はれる革袋を取り出した。彼は又野牛の角で作つた、銀の箍のはまつてゐる大きな盃を二つ持ち出した。夕餉の後口を清めるこの心地い、用意も出來上ると、彼はこれ以上四角張つた禮儀上の氣兼ねが自分には不必要と思つたらしかつた。が兩方の酒盃になみ／＼と注いで、サクソン流に、「御健康の爲めに、不精騎士殿！」と言ひながら、自分の盃を一息に飲み乾した。

「御健康を祝して、コブマンハーストの聖僧殿！」と勇士は答へた、そして主の爲めに同じやうに酒をなみ／＼と注いで乾盃した。

「聖僧殿、」と旅人は、かうして最初の一杯を飲み乾してから言つた、「私は貴僧のやうな筋肉や體力を持ち、その上實にすごい健啖家の腕を示す方が、この荒野に唯一人で住まはうなどと考へ出された事は全く不思議でなりません。私の判ずる所では、貴僧は水や豌豆を食べて、いや番人の施しを受け、てまで、此處で生きて行かれるよりは、一城一壘の主となつて、脂肉を食ひ、醇酒を飲んでゐる方が遙かに適して居られます。少くとも、私が貴僧であつたら、王の鹿（森林法の保護を受けてゐる鹿の意）で楽しみも致せば不自由も致さぬでせう。この森にはいゝ獸がどつさり群をなしてゐます。牡鹿一匹位はダンスタン上人の僕の使ひ料になつたとて、それがなくなつた事に氣附かれるやうな事は決してありませんまい。」

「不精騎士殿、それは危険なお言葉だ、どうぞ左様なお言葉はお慎み願ひたうございます。愚僧は王や法律に忠實な隠者だ、若し我が君の獵獸を奪ひ申したなら、入牢は必定であるし、この法衣が救うてくれねば（昔「僧侶の利得」云つて、普通の裁判より前に、刑法上の處分を免れる一條項があつたのを指す）恐らく絞首か何かの危難に會ふでせう。」

「けれども、私が若し貴僧であつたなら、私は林務官や番人共が寢床に温まつてゐる時分を見計つて、月明りをたよりに散歩に出るでせう、而も折々、——祈りを誦しながら——私は箭を廣場の草を食べてゐる焦茶色の鹿の群の中へ飛ばしてやるでせう——なんと、聖僧殿、貴僧は左様な慰み事をなすつた事がお有りなさらんか？」

「不精騎士殿、貴方はもう愚僧の暮し向きで貴方に關係あるものは残らず御覽なされた、暴力で自分の宿を取る者に相當する以上のものを御覽なされた。愚僧を信ぜられよ、神が貴方に授け給ふ福を、どうしてそれが手に入つたかなどと生意氣に聞きたがりなさるよりは、黙つてお楽しみになる方がましいだ。その酒盃になみ／＼注いで、御遠慮なくお召し上り下さい。そしてお願いだ、この上要らざる事を訊ねて、私の腕をお見せしなければならぬやうなことは仕向けなさらぬがよい、若しその腕を振つて、愚僧が眞劍に貴方に反對致したら、貴方は恐らく宿を取ることが出来ないでせうからな。」

「確かにさう仰せられると私はます／＼お聞き申したくなる！ 貴僧は私がこれ迄會つた中で最も不思議な隠者である、お別れする前に貴僧の身の上についてもつと知りたい。ところで唯今の嚇文句の事ですが、貴僧は危険のある所ならどんな所にも行つて、それを見附けるのを商賣としてゐる者を相手に話してゐるのだ、とお心得なさい。」

「不精騎士殿、貴方の爲めに御乾杯申す、」と隠者は答へた、「但し、貴方の御勇氣を大いに尊敬してでの事であるが、御思慮の程を敬服してゐない、若し愚僧と同等の武器を執つてお戦ひになるのなら、愚僧は貴方に、友情と兄弟の愛とを盡して、訓戒の太刀に、十分懺悔をおさせし、全く恕罪も致し申さう、すると貴方は向う十二ヶ月間は屹度過度な好奇心の罪を犯すやうな事はありますまい。」

騎士は彼に乾杯を擧げた、そして彼の武器の名を擧げて貰ひたいと願つた。

「デリラの鉄（サムソンの妻デリラが夫の髪を切つた鉄である。舊約聖書、士師記十六章）や、ヤエルの十片の釘（ヘベルの妻カナン人の長シセラの頭に釘を打ち込んで彼を殺した。舊約聖書、士師記四章）

から、愚僧が貴方に及ばないゴライアスの劍（ゴライアスは、ペリシテ軍の代表戦士で、劍を以て、敵軍イスラエルの代表戦士ダヴィデは投石器で闘つたが巨人ゴライアスは倒れた。舊約聖書、撒母耳前書十七章）に至る迄、何一つありません——が併し、若し愚僧が選擇を許されるなら、こんな小道具は何と思はれる？」

かう言ひながら、彼は今一つの納屋を開けて、其處から當時の郷士に用ゐられたやうな、一對の關劍と手楯とを取り出した。彼の動作をよく見てゐた騎士は、この二番目の隠れ場所に二三張の立派な大弓、一張の弩弓、後者に使ふ箭一束、及び前者に使ふ矢六把が藏つてあるのを見届けた。堅琴始めその他數々の極めて僧侶に似合はしからぬ様子のもも亦この暗い奥が開けられた時見えた。

「私、しかとお約束申す、もうお氣に障るやうな事はお訊ね致すまい。その戸棚に入つてゐるものは私の間全部に對して答へてゐます。して其處に一つの武器がありますが（こゝで彼は屈んで堅琴を取り出した）、私は劍や楯よりも、これでなら貴僧と喜んで腕前を試したいのです。」

「流石『不精者』の綽名に恥ぢませんな。實は愚僧は確かに貴方をひどく怪しんでゐますのぢや。けれども、愚僧のお客の事ではあるし、又愚僧は貴方の自由意志からなら兎も角、さうでなくて御勇氣を試して見たくはございません。では、まあ腰を下ろして、その盃になみ／＼とお注ぎなさい、飲み、唄ひ、愉快を盡さうではありませんか。若し貴方がよい歌を御存知なら、愚僧は、聖ダンスタン様の御堂に仕へる限り、多分神の思召しでこの草葺屋根を芝生の屋根に取りかへて（茲に入）彼の世の人となる迄はお仕へ申すつもりだが、コプマンハーストで肉パイの一片を御意のまゝに差し上げませう。」

が、まあ、兎に角、盃になみ／＼お注ぎなさい、堅琴の調子を合せるに少々手間も掛りませうし、又一杯の酒ほど聲の調子を整へ耳を鋭くするものはありませんからな。この愚僧は、この指の先が堅琴の糸を掻き鳴らすより前に酒盃に觸る方が好きなのだ。」

(十七)

夕、書に親しむかなたの隅に、

天の褒賞も受けたる殉教者の

聖き績數多描ける、

眞鍮の浮彫り美しき本をわれ開く、

やがて、燭、朧ろとなる時、

寝ぬる前に、節面白き讃歌を唱ふ、

……

誰か身の榮華を捨て、

我が錫杖と白の法衣とを取り、

浮世の騒がしき舞臺より、

平和なる庵をば擇ばざらん。

(ワートン)

愛想のよい隠者の所望で客は喜んでそれに應じはしたものゝ、この堅琴の調子を合せるのは容易でない事が分つた。

「どうも、御僧、これは絃が一本足りないやうだし、他の絃も幾らか損んでゐるやうだ。」

「さやう、それにお氣が附かれたか。さうして見ると貴方は堅琴の名人だな。乾杯、」と彼は重々しく

眼を天井に向けながら言ひ足した、——「みんな酒の咎だ！ 愚僧はアラン・ナ・デール(ロビン・フッドの一族に屬する有名な吟遊樂人)といふ北國の吟遊樂人にかう申したのです、若し七杯目のを飲んでから觸れると堅琴を損

て了ふぞとな、だが彼奴め言ふ事をきかうともしなかつた——騎士殿、お見事な手振を祝して乾杯

だ。」

さう言ふと彼はひどく眞面目臭つて盃を飲み乾した、同時に今言つたスコットランドの堅琴弾きの大

酒家の事を思ひ出して頭を振つた。

騎士はそのうちに絃の調子を幾らか直した。そして短い序曲を奏した後で、主にフランス南部の言

葉で戀愛詩人の詩をやらうか、北部の言葉で吟遊樂人の詩を唄はうか、それとも古代フランスの小唄

にしようか、若しくはイングランドの物語歌にしようかと訊ねた。

「物語歌、物語歌、」と隠者は言つた、「フランスの詩はみんな廢して。正眞正銘のイングランド人だ、

愚僧は。又守護神、聖ダンススタン様も正真正銘のイングリッド人であつた、そしていつも悪魔の蹄の切り屑を卑しき遊ばしたやうに、フランス語を卑しき遊ばされた——この庵では獨り正真正銘の英語のものばかり歌ふのだ。」

「では私が聖地で知合ひになつた、或るサクソンの吟遊樂人の作つた物語歌を演りませう。」

この騎士はたとへ、吟遊樂人の業をすつかり修めた達人ではなかつたとしても、彼のこれに對する趣味は少くとも最も優れた音樂師について修練されたものだといふ事が直ぐと分つた。彼の聲は音幅が狭く、そして本來優雅なと云ふよりは寧ろ粗いといふ聲の缺點を有してゐたのであるが、彼はこの缺點を技巧で輕減することが出來た。つまり、あらゆる修練を積んで、生來の缺點を補つたのである。だから彼の演奏は、この隱者よりもつと耳の確かな批評家が聞いても大いに稱揚したかも知れない。わけても、彼が樂の音に或は一段の精氣を加へ、或は訴へるが如き熱意を込めなどして、歌ふ詩に力と勢ひとを添へた時は殊にさうであつた。

十字軍士の歸還

一

高き勳に騎士の譽れを立て、

パレスタインより戰士歸れり。

肩に附けたる十字架は、

戦ひと疾風に襪せ且つ破れぬ。

傷つきたる楯の上の痕こそ

ありし苦戦の印なれ。

かくて、愛人の四阿にて、

彼は歌へり、黄昏時の來る頃。

二

「めでたしや麗人！ 見よ、御身の騎士は

遠き黄金の御國より歸りたり、

かの黄金の御國より歸りたり、

彼は富もて歸らねど、

富そも何の用かあらん、

彼には良き武器と軍馬のあるものを。

拍車は敵を突撃する爲め、

槍と劍は敵を倒す爲め、

これぞ彼が辛苦の記念の總て、

これぞ——またテクラが微笑の望みなる！

三

「めでたしや麗人！ 汝が美しき面影は
心變らぬ汝が武士をはげまして、
武勳をこそは立たせけれ。」

心うらゝか、品性高き同勢の集まるところ、
汝の見逃さるゝ事よもあらじ。

吟遊樂人に唄はしめ、傳令官に觸れしめん——
「かしこの美はしき處女によく目を留めかし、
その輝く明眸のためにこそ、
アスカロンの試合に勝は得たるなれ。」

四

「かの處女の微笑に目をとめよ！ これこそ、
五十人の人妻を寡婦になしたる、
劍を研ぎたるなれ、

彼が力とモハメットの咒文徒らに、
*アイコウニアムの頭帕巾巻ける

回々君主倒れし時、
處女が金髪見給へや、そが日輪の灼光こそ、
雪の頸を或は見せ或は隠すなれ、
そが髪の黄金の一條も纏ひつかざれど、
そが爲めに異教徒一人斃れたり。」

五

「めでたしや麗人！ わが名は知られねど、
總ての勳、總ての讚辭も御身のもの。
さらば、おゝ！ この意地悪の門開け給へかし、

夜露は下り、更闌けぬ、
シリアの熱き微風には慣れたれど、
朔風は屍のごと冷たく覺ゆ。

嬉しき戀に處女が羞恥忘れ給へ、
かくて御身が名聲擧ぐる者にこそ天福を許し給へ。」

(*小亞細亞のユーニアの舊名、一九〇獨帝)
(フレデリック一世に攻め取られたミコロ)

この演奏中、隱者は、現代第一流の批評家が新しい歌劇を聴く時のやうな態度を續けてゐた。彼は

眼を半ば閉ぢて、椅子に凭れてゐた、今、手を組み合せ、拇指を扭ぢ曲げて、うつゝをぬかして傾聴してゐるかと思ふと、今度は、擴げた掌の鈞合をとつて、樂の音に伴れて、間拍子面白く靜かに打ち振るのであつた。一二の好きな韻律のところ、騎士の聲が彼の敬虔な趣味に適ふ程、その曲節を高く奏でることが出來さうもない場合には、聲を出して助けを少々差し添へるのであつた。歌が終つた時、隱者はこれは善い歌だ、そして歌ひ方も巧いと、きつぱり斷言した。

「それでも」とこの隱者は言つた、「我がサクソン國民はノルマン人と長い間一緒になつてゐた爲め、彼等の憂鬱な小唄の調子に落ちてしまつたわい。その正直な騎士は何が目的で故國を出たのだ？ いや歸國して見ると戀人は喜んで戀敵と結婚してゐて、かの所謂夜の調(殊に男子が戀人の窓の下に夜間奏でるもの)も下水の中で猫が牝猫を慕つて鳴く聲程にも顧みられない、といふのがとゞのつまり、それ以外に騎士は何を期待し得たか？ けれども、不精騎士殿、愚僧はこの盃を卿の爲めに、それから凡ゆる本當の戀人の成功を祈つて乾盃します——おや貴方は本當の戀人ではゐらつしやらないのかな」と騎士が(重ねた酒の酔ひが廻つて來たので)盃の酒に水差しから水を割つたのを目敏く見附けるなり、言ひ足した。

「いや」と騎士は言つた、「貴僧は先刻この水は貴僧の有難い守護神、聖ダンスタンの井から汲んで來たと仰しやられたではないか。」

「左様、その通りだ、そして數百人の異教徒共に聖人は其處で洗禮を授け給うた。だが併し愚僧は聖人がそれを一滴でも飲んだといふ事は未だ一度も聞いたことがない。この世では何でも物は使ふべき

處へ使はねばならぬものだ。聖ダンスタン様は、誰とも同様に、坊主でも酒の好きなものは飲んでもよいといふ、快僧の特權を知つて居られた。」

そしてさう言ふと、彼は豎琴に手を延ばして、客人をもてなす爲めに、或る古いイングランドの唄に適した古歌合奏曲につれて、次のやうな獨特の歌を唄ひ出した。

裸足の托鉢僧

一

お前さんに一年でも二年でも暇を上げるから、

ビザンシウムからスペイン迄、歐羅巴中を探して御覽、

疲れる迄探し廻つても、見附けることはあるまいよ。

二

この裸足の托鉢僧程仕合せな人間を。

お前の騎士は戀人の爲めに試合場に突進する、

やがて晩禱の頃に槍に突き刺されて家へ搬ばれる、

私や急いで騎士の懺悔を聞く——彼の戀人が本當に、

この裸足の托鉢僧の慰めでなくてはと言ふからさ。

三

三

お前の王様？——ばかな！ 多くの宮様達は、

自分の禮服を俺達の頭巾や僧衣じゆもに易かへたさうだよ、
だが俺達の内うちで誰たれがそんな詰つまらない望のぞみなんか懐なつかかうぞ

托鉢僧たくはつそうの白頭巾びやくとうきんと王冠おうかんと取り換かへようなんて！

四

この托鉢僧たくはつそうは出歩いいた、そして何處どこへ行いつたつて、

土地ちやその豊饒みどりは彼の物ものと指定しせられてる、

氣きに入いつた所ところを徘徊徘徊出来る、疲つかれた時にや泊とどまられる、

何處どこの家いえでも裸足はだかあしの托鉢僧たくはつそうの家いえだもの。

五

眞晝まひるには彼は待まちたれてる、そして、彼かれが來きる迄までは、

誰も大椅子おほいす子こ漬づけしはしまし、

乾葡萄かんぶどう入いの粥かゆだつて、

御馳走ごちそうのいゝところと爐邊ろべの席せきは、

裸足はだかあしの托鉢僧たくはつそうの歴然れつきとした權利けんりだもの。

六

晩ばんには彼は待まちたれてる、肉餛飩にくうどん頭あたまを温ぬかく作り、

茶色ちやくしよくの麥酒ビールの口くち開あけて、

黒い盃くろいになみく注ついで。

そして家婦かみさんは亭主ていしゆの泥濘ぬかるみにはまるのを望のぞむだらう、

裸足はだかあしの托鉢僧たくはつそうに柔なかい枕まくらをさせぬ位くらいなら、

七

括靴サンダルと繩帶じゆんたいと法衣ほふえ萬歳ばんざい！

惡魔あくまの畏怖おそ、法王ほふおうの信しん又また萬歳ばんざい！

茨いばらに傷きずを受うけないで人生じんじやうの薔薇ばらを摘つむのは、

裸足はだかあしの托鉢僧たくはつそうにだけ許ゆるされてる。

「實じつに御上手ごうじやうでお勇ゆうましい歌うたひ振りだ、そして貴僧きそうの社會しやかいを隨分ずいぶん頌揚じゆうされましたな。所で、惡魔あくまと云いへば、御僧ごそうは寺法ていぽうに背そむくお氣晴きせいしの間ま、その惡魔あくまが訪まねて來きやしないかと心配しんぱはなならないかな。」
「愚僧ぐそうが寺法ていぽうに背そむく！ 愚僧ぐそうは左様さやうな咎とがめはいやだ——そんなものは後足ごあしで蹶あ飛ばしてして了しますわ！
愚僧ぐそうは愚僧ぐそうの御堂ごだうの勤しんめを正ただしく眞實ほんじつに務たづめてゐます——毎日まいにち、朝晚あさゆふ二度にどの彌撒みさ、朝あさの禱いのち、晝ひるの禱いのち、それから晚ゆふの禱いのち、聖母讚美せいぼさんびの祈いのち禱いのち、使徒信條しとくしんじょう讀誦どくじゆ、主しゆの祈いのちり——」

「獵カキの季節の月夜の晩を別にしてはな、」と客が言つた。
「當然、例外たるべき例外、」と隠者は答へた、「我が老僧正は出過ぎた俗人共が愚僧に宗規の末節を悉く守るかどうかと訊ねた時には、かう言へと教へてくれた。」
「成程な。だが、悪魔はさう云ふ例外に目を離さぬ勝ちのものだ、彼奴は、吼ウライえる獅子ライオンのやうに、歩き廻ウラはる。」

「吼ウライえられるなら此處で吼えるがよい、この腰の繩帯が一たび觸はると彼奴め聖ダンスタン様（傳説にダンスタン聖人即ちカクタベリイ寺院の僧正は鍛冶を以て有名であつたが、一日鍛冶場で、仕事をしてゐる悪魔が現はれたので、眞赤に焼けた火箸を以て、悪魔の鼻をつまんた所が悪魔は悲鳴を擧げて逃げ去つた云ふことである）の火箸で包まれた時と同じに高い悲鳴を擧げるだらう。愚僧は一度も人間を恐れた事がない、又悪魔や悪魔の仔も同じく恐れはしない。ダンスタン聖人、ダブリック聖人、キニボールド聖人、キニフッド聖人、スニバート聖人、キリック聖人、それからトマス・ア・ケント聖人も忘れてはならない、それに愚僧が、貧しい徳の助けもある、愚僧は悪魔といふ悪魔を物ともせぬ、短い尾の奴でも長い尾の奴でも。——だが、騎士殿、愚僧は朝のお祈りがすむまでは、もう決して斯様な問題に就いて喋しゃべつて、貴方に祕密を明しはすまい。」
彼は話を變へた、二人の興は愈々深く猛烈になつた、そして交かはるゝ盃を取つてさまざまの歌を唄ひ合つた、とその時突然二人の宴樂はこの庵の扉をけたましく叩く音の爲めに遮られた。
この妨碍の原因を説く爲めには、今一度他の登場人物の冒険に立ち返らなければならぬ、何となれば我々は、老アリオスト——のやうに、劇中の或る一人の人物にだけいつまでも付き纏つてゐるわけにはいかないからである。

(十八)

いざや！ 我等が旅路は谿たに又谷、
樂しげの仔鹿は、物臆おそぢする母の傍に踊り、
巨いなる櫛、葉の繁き枝を張りて、
緑なす芝生の小路に斑ひららなる陽影ひかげを落す——
いざ、行かん！ 樂しき道は
輝かしき陽の玉座に登る時踏む道にしあれば
月朧おぼろろに照りて佗わしき森を照らす時は
さまで樂しからず、安らかならぬ道にしあれば。
(「エトリック・フォレスト」)

サクソン人セドリックは我が子がアシュビーの試合場で卒倒するのを見た時、先づ第一に自分の從者に引き取つて介抱させたいといふ情が胸を衝くのを感じたのであつたが、併しその言葉は喉まで出たきりで呑み殺して了つた。彼はこんな群集の面前で、一度勘當した息子を許す氣にはどう考へてもな

れなかつたのである。けれども流石に彼は、オスワルドに命じてアイヴァンホーから目を離さぬようにと言つた、更に彼は又、同じ従者に、奴隸兩名を連れて行つて、群集が退散したら、すぐアシビーの町へ移すようにとも指圖したのである。けれどもオスワルドは折角の役目を何者にか先んぜられてしまつた。群集は退散したが、騎士の姿は何處にも見えなかつたのである。

セドリックの酌取りオスワルドは若主人をそこら中探し廻つたがとう／＼探し出せなかつた——若主人が今の先、倒れた血だらけの場所はあつたが倒れたその人は最早見えなかつたのだ、それは宛で仙女が彼をその場から搬び去つたかのやうに思はれた。恐らくオスワルドも（サクソン人は非常に迷信的なので）、アイヴァンホーの消え失せた事を説明するのに、何かさうした事を假想したのであらう——若しも彼が突然従者風の服装をした男をちらと見て、朋輩のガースの面だなど目敏く覺らなかつたら。その時變装したこの豚飼ひ男ガースは主人の身の上を氣遣ひ、又突然主人の姿を見失つたのに落膽して、自分の安危が懸つてゐる顔をかくす事などはとんと忘れて了つて、其處いら中、主人を探し廻つてゐるところであつた。オスワルドは自分の義務としてガースを取り押へ、脱走者として、その運命を主人に裁いて貰はなくてはならないと思つた。

酌取り役のオスワルドが、アイヴァンホーの身の上に就いて改めて詮議を始めた末、やつとその場に居合せた人々から掴み得た消息は、この騎士が數人の相當な服装をした馬丁にそうつと擔ぎ上げられて、觀衆中の一貴婦人の所有する吊臺に乘せられたまゝ、直ぐに試合場から何處かへ運び去られたといふ

事だけであつた。オスワルドはこれだけ分ると、主人の許へ今後の指圖を仰ぎに一先づ歸る決心をした——同時に彼は、ガースはいはゞ主人の務めをすてた逃亡者だと考へたので、ガースを同道して歸つたのである。

サクソン人セドリックは我が子の身の上に就いていたく案じ惱んでゐた、これは眞實自然の人情で、如何に愛國的堅忍主義の爲めに人情を抑へようとしても、到底出來得べきことではなかつたのである。併し、アイヴァンホーが親切な、そして恐らくは親しい人の手に渡つたのであらうと聞くと等しく今迄我が子の安否の不明の爲めに醸されてゐた父としての心遣ひは忽ち消えて、彼が常に言つてゐるキルフレッドの親不孝といふ考へから起る誇りを傷けられたと云ふ情と忿懣の情とに又新しく變つて行つた。「彼は勝手に何處でも彷徨いてゐるがいゝ、」と彼は言つた——、「彼は彼奴等の爲めにノルマン共と戦つたのだ、彼奴等に傷を癒させるがいゝ。彼は祖國の立派な昔の武器、槍や矛を以て祖先の名譽を保つよりは、ノルマン騎士道の手品みたいな小手先き技をするに適してゐるのだ。」

「祖先の名譽を保ちます爲めなら、」とその場に居合せたローエナ姫は言つた、「思慮があり、事に當つてきばきし、父君だけを除いては、勇者の中の勇者、君子の中の君子でございますから——それで十分でございます。」

「お黙んなさい、ローエナ姫！ この事だけは御身の言ふ事でも聞きません。さあ親王の饗宴に參る支度をなさい、あの傲慢なノルマン人が、ヘイスティングスの敗戦以來、我がサクソンに滅多に見せた

事のないやうな、何時いつにない名譽と禮儀とを盡してわし等を彼處へ招待したのだ。わしは彼處へ參らうと思ふ。參つてあの生意氣なノルマン人共に、彼奴等の勇者中の勇者を破つた自分の息子が生死の境にゐる運命も、このサクソンの心を動かすに足らぬといふ事を見せてやりさへすればいゝのだ。」

「私は其處へは參りません、してあなたは、御自分に勇氣があり物に屈しないと申し召すことが、却つて心の無情冷酷と思はれませぬやうに、御注意遊ばしませ、お願ひでございます。」

「ぢやあ家にお残んなさるが、恩知らずの姫御前。姫こそ無情冷酷といふものだ、迫害に苦しむ人民の幸福を顧みないで、つまらぬ理由のない愛着しよぶに執しよぶすることが出来るとは。私はアセルステイン殿を探して、一緒にアンジュニア家のジョン親王の饗宴に出ることにしよう。」

彼はかうして、かの饗宴に赴いたのであるが、その場の模様おもに就いてその主な出来事は既に述べた通りである。城から退出すると直ぐ、この二人のサクソンの郷士は、従者達と共に馬に跨つた、そしてセドリックが初めて脱走者ガースを見たのは、かうしたとさくさ騒ぎの最中であつた。このサクソン郷士は、諸君の既に知らるゝ如く、非常に穩かならぬ氣持で饗宴から引き返して、胸の怒りを誰かに洩らす口實を只管欲ほしがつてゐたのである。「柳かただ！」と彼は呶鳴つた、「柳かただ！ オスワルド——ハンディパート！——大共、悪者共奴め！——何故貴様達は、この悪者に足枷あしかせを掛けないで置いたのだ？」

ガースの仲間達は諫争する勇氣もなく、一番手近にあつた牛馬用の羈絆はづなで彼を縛つた。彼は抵抗もせず、人のするが儘に任せて置いた。が彼は主人の方を恨めしさうに見て、これだけの事を言つた、

「あなた様の骨肉を手前のよりも大事にした揚句がこれでございます。」

「馬に乗れ、そして出發しろ！」とセドリックは言つた。

「もう疾とうに時間だ、」とアセルステインは言つた、「急いで參らぬと、ヨールテオフ大僧正の折角の心盡しの晩餐がすつかり無駄になつてしまはう。」

けれどもこの騎馬隊は、非常に旅路を急いだので、この氣遣はれた凶事が起らぬ内に聖ウィットホルド寺に到着することが出来た。自身も亦サクソンの舊家の出である大僧正は、彼等サクソン民族特有の大まかな、有り餘る程の饗應をして、このサクソン郷士等を款待した、彼等はそれに夜の更ける迄、いや夜の明くる迄も歡を盡してゐた、そして翌朝もまた贅澤ぜいさな齋さいを共にして、それからやつと大僧正の許を辭した。

この騎馬の一行が僧院の境内を去らうとした時、端なくも、サクソン人に取つては少々容易ならぬ、一つの出来事が持ち上つた。一體彼等は、全歐洲人の中でも、最も熱心に前兆かちを擔かちぐ民族で、時代後れの一般人の間には今も尙ほ見受けられるところの、さうした迷信的な問題に關するさまざまな思想の由來を尋ねると、その多くは彼等の説から出てゐるのである。それといふのも、ノルマン人は他民族との雜種族で、その時代々々の見聞に由つて知識を啓ひらいて來たところから、彼等の祖先が、スカンヂナヴィアから持つて來た迷信的僻見は、大抵捨て、しまつて、かうした前兆などといふ題目に就いては、自由に考へることを得意としたからである。

今の場合でも、サクソン人達に危難が待ち受けてゐるやうな危惧心を起させた、その豫言者はたか
が一匹の大きな瘦せた黒犬であつた。といふのは、先頭の者が、山門を出ると突然、その犬が眞直ぐ
に坐つたまゝ、如何にも哀れつばい聲で吠え立て、それからやがて、猛烈に吠えつき、あちらこちら
と、飛び廻りながら、一行に付き纏つて離れさうにもなかつたのである。

「私はあの音楽を好みませぬ、セドリックの父上、」とアセルステインは言った。彼はセドリックに話し
掛ける時、何時でもこの尊稱を用ゐるのが例であつた。

「手前も好みません、叔父さん、」とワンバが言つた。「あの笛吹きに拂はねばなるまいかととても心
配で堪りません。」(多少の損害を受けるに云ふ意味である。云ふのは、人は笛吹きの音楽を聞いた時に
はその愉快を得たのに對し拂はねばならぬ感じ、幾らかの金でも出すからである。)

「私の考へでは、」と大僧正の甘い麥酒(うま)(バートン)は既にこの醇酒を以て有名であつたので、忘れ兼
ねてゐたアセルステインは言つた——「私の考へでは、このまゝ引き返して、午後まで大僧正の許に
ゐる方が宜しいかと思ふ。次の食事を濟まさないうちに、坊主や、兎や、遠吠えする犬などに、道先
を横切られたところを旅するのは、不吉である。」

「進め!」とセドリックはもどかしげに言つた。「今でももう目的地へ行くには日が短か過ぎる位な
のだ。あの犬はありや脱走奴隷ガースの野良犬ではないか、主人にも劣らぬ無用の逃亡者だ。」

かう言ひざま、鐙に突つ立つて、門出(かど)の邪魔をされた腹立ちまぎれに、投槍を哀れなファンクス目
かけて投げつけた——實にこの犬はファンクスだつたのである、自分の主人がこつそり旅出(たびで)したその後を

慕つてこんな遠く迄隨いて來た揚句、此處でその影を見失つて了つたが、今やつと再び彼の姿を見て、
異様の態(かたち)をして、狂氣してゐたのである。投槍は犬の肩先に傷を負はせたばかりで、僅かのところで
犬を地に縫ひつけ損ねた、そしてファンクスは悲鳴を擧げつゝ怒れる郷土の前から逃げ去つた。ガ
スは悲しみに胸が一杯になつた、自分の忠實な従者ファンクスがたくらんで惨殺されようとするのを
見て、彼は自分の身が受けた苛酷な取扱ひよりもづつと／＼辛(つら)く感じたのである。眼のところまで手
を擧げようとしても擧がらぬので、主人の不機嫌を見て、伶俐にも後に退いてゐたワンバに向つて、
彼は言つた、「お願ひだ、おぬしの上衣(マント)の裾で、俺の眼を拭いておくれ。塵が入つたが、繩で縛られて
ゐるので、どうにも仕方がない。」

ワンバは頼まれた通りにしてやつた。そして二人は暫くの間肩を並べて歩いた、その間ガースは獨
り鬱々として口を開かなかつたが、とう／＼胸の思ひを抑へ切れなくなつて——

「ワンバ。セドリック様に黙つて仕へる程の馬鹿者揃ひの中でも、おぬしだけは自分の馬鹿をあのかた
のお氣に入るやうにするだけの器用人だ。そこでお願ひだ、セドリック様の所に行つて、ガースはもう
これつ切り情立(じやうだ)てもしないし、いくら威(おど)されたつて御奉公は致しませんと言つてくれ。俺の頭を打ち
落すなり——鞭で打つなり——鎖で繋ぐなり何でも勝手にするがい——だが今後はもう俺に、情(じやう)を
盡せとか、言ふことを聞けとか言つたつて駄目だぞ。ぢやあ、早く行つて、ベオウルフの子ガースが
御奉公(まつかん)はもう眞平(まひら)だと言つた、と申し上げてくれ。」

「いかさま俺は馬鹿に違ひないが、おぬしの馬鹿の使ひは御免だ。セドリック様は、今一本投槍を腰に着けてゐなされる、あの方がいつだつて狙ひを外さねえことは、おぬしも知つてるだらう。」

「セドリック様がどんなに早く俺を的にしても構はねえ。昨日は俺の若主人キルフレッド様が、血を流してゐられるのをその儘放つてお置きになつた。今日は何時も俺に親切にしてくれたたつた一匹の生物を俺の目の前で殺さうとしなすつた。聖エドマンド、聖ダンスタン、聖ウィットホールド、聖エドワード・ザ・コンフェッサーを始め、その他曆にある、ありとあらゆるサクソンの聖徒も照覽あれ、(セドリックは決してサクソン系統以外の聖徒の名で誓つたことはなく、又彼の一家悉く同じ狭い神信心を懐いてゐたので、)俺はもう決してセドリック様を赦しはしねえ！」

「さあ俺の考へでは、」と度々この一家の仲裁役を勤めつけてゐた幫間は言つた、「御主人様はファンクスを傷けるお積りではなくて、たゞ嚇かさうとお思ひなすつたのだ。何故つておぬしが氣をつけて見られたなら分つた事だが、御主人様は鎧にお立ちなされた、つまり的を外すお積りであつたのだ。で、その刹那、ファンクスが偶然飛び上らなかつたなら、的は外れてファンクスは傷も受けなかつただらう、ところがひよつくり飛び上つたものだから、かき傷を受けたのだ。あの位ゐの傷なら一文の膏藥で屹度直して見せる。」

「俺がさう思つたら——さう思ふ事さへ出来たら——いや違ふ——俺は投槍が十分狙はれたのを見た——俺はそれを投げる者の怒りに燃える悪意といふ悪意を籠めて投げた槍が、ひゆうと空を切つて鳴

るのを聞いた、又地面に突刺つてから、その投槍がまるで的を射損つた事を残念がりでもするやうに、ぶる／＼震へてゐたのも見た。どんなことがあつたつて、もう家來でもねえ、主人でもねえ！」

そしてこの憤激した豚飼ひ男は、再びもとの陰鬱な沈黙に歸つて、幫間が色々と宥め賺しても遂に再び口を利かなかつた。

話變つて、一方、この一行の兩頭目セドリックとアセルステインとは、現在の國情、王家の分裂、ノルマン貴族間の不和や争鬭、それからその後について起りさうな、内亂の間に、壓迫に悩むサクソンがノルマンの束縛を脱せられるかも知れない、いや少くとも國民的權威と獨立とを得られる地位に昇る事が出来るやうな機會が来るかも知れないなどといふことに就いて話し合つてゐた。この問題に及ぶとセドリックは非常に活氣づいた。サクソン民族獨立の復活は彼が衷心最も願ふところであつて、その爲めには一家の幸福も、自分の息子の利害も、喜んでこれを犠牲にしたのである。併し、故國イングランドの爲めにこの大革命を果すには、全サクソン人が一つに結束して、萬人の許す一頭目の下に活動する事が必要であつた。で、サクソン王族中からその首領を選抜する必要のあることは既に言ふを待たないのであつたが、更にその事はセドリックが自分の秘密の計畫や抱負を委ねた人々にも、重大な條件とせられてゐた。アセルステインは少くともこの首領となる資格を備へてゐた、彼は一首領として推すには藝能も才幹も足りなかつたが、押出しは立派で、卑怯なところがなく、軍の事には慣れてもゐたし、自分より賢い者の忠告や助言には喜んで従ふらしかつた。とりわけ、彼は寛容で懇懇な人と

して知られ、温厚の士として信ぜられてゐた。併しどんな取り柄があつてこのアセルステインがサクソン締盟の頭目と仰がれるにしても、その民族の多くは兎角彼よりも、アルフレッド大王の血統を引いたローエナ姫を自分等の頭目として迎へたいと願つてゐた。蓋し姫の父君は智仁勇兼備の人として知られた一首領だつたので、その名は迫害に惱む同國人に、深い尊敬を拂はれてゐたのである。

セドリックに若しその氣さへあれば、少くとも他の孰れにも劣らず侮り難い第三黨の頭目に、自分が据ゑることは決してさう難かしい事ではなかつた。アセルステインやローエナに王家の血統があれば、セドリックにはこれに對して勇氣、活動、精力、殊に「サクソン人」といふ稱號を彼に得させたあの獻身的な、大義に對する執着心があつた、そして彼も亦アセルステイン及び彼の被後見人(即ちローエナ)を除けば、何人にも譲らぬ程の名門の出であつた。けれども、これ等の特性には我利我慾の影はほんの少しもひそんでゐなかつた。そして、彼自身の私黨を作つてこの上更に自分の弱い民族を分離せしめるやうな事はしないで、ローエナ姫とアセルステインとの間の結婚を抄らせて、既に存在する黨派的弊害を剿滅せしめようといふのがセドリックの計畫の重なる點であつた。ところが、彼の後見してゐるローエナ姫と我が子キルフレッドとの間に戀愛が成り立つて、この得意の企圖に一障害が起つたのである。キルフレッドが、父の家から逐はれるに至つた第一の原因は、こゝに發したのである。

セドリックがこの苛酷な仕打に出たのは、ひよつとするとキルフレッドの不在中に、ローエナ姫が戀を思ひ切るかも知れないと豫期したからであつた、がこの期待は全く失望に終つた。而もこの失望は

一部分彼の被後見者の教育の仕方源を發してゐるといつてもよかつたのである。アルフレッドの名を神のそのやうに心得てゐたセドリックは、その偉大な國王の唯一人の後裔を遇するに、恐らく當時萬人の許す皇女にも殆んど拂はれなかつたやうな、深い尊敬を以てしたのである。ローエナ姫の意志は、殆んど凡ゆる場合に於て、セドリック一家にとつて、一種の掟の如きものであつた。そしてセドリック自身から、姫の主權は少くともこの狭い範圍内では十分に認めらるべきものと決めて置いたやうに、姫の臣下の先頭に立つて行動することを誇りとするやうであつた。かうして、たゞに自由意志ばかりでなく、專制的權威さへも實行するやうに、躡けられたローエナ姫は、これまで受けた教育の爲め自分の情慾を抑壓したり、自分の心に染まぬ取扱ひを受けたりするやうな企ては何にでも反抗もすれば、憤りもする傾きがあつた。又従順と服従とを教へ込まれた世の女性でさへ、保護者や兩親の威光に屢々背き勝ちなと言つたやうな場合になると、ローエナ姫は自分の獨立を主張しようとするのであつた。彼女は自分の深く感ずるところを大膽に公言して憚らなかつた。そして日頃彼女の意見に讓歩する習慣を脱することが出来なかつたセドリックは、後見者たる威光をどうして振つたらよいか全く途方に暮れたのである。

セドリックは王位恢復の夢を以て彼女を眩惑しようとしても無駄であつた。非常に聰明なローエナ姫は、彼の計畫を實行出来るとも思はなかつたし、又例へそれが成就され得るにしても、自分だけに望ましからぬことだと思つた。彼女はアイヴァンホーのキルフレッドに對する戀を公言して少しも包

み隠さうなどとはせず、若しこの愛する騎士が除け者にされるなら、自分はアセルステインと共に玉座に登るよりも寧ろ尼寺に引つ込んで尼となつて一生を送りたいと斷言するのであつた。常日頃アセルステインを輕蔑してゐたローエナ姫は、今や彼の爲めに失戀の憂目に遭ふに至つて、愈々心から彼を憎み嫌ひはじめたのである。

それにも拘らず、女の貞操に對する信念のそれほど強いものと思つてゐなかつた彼セドリックは、姫とアセルステインとの結婚を計る事は取りも直さずサクソン側に重大な貢獻をするものだと思ひ込んで、及ぶ限りの手段を盡して何處迄もこの縁組を成り立たせようとするのであつた。所が、彼の希望に對する殆んど致命的打撃とも思はれたのは、あのアシビーの試合に我が子が俄かに而も意想外に現はれたといふことである。その瞬間は、たしかに、セドリックの親としての情愛は、誇りや愛國心よりも強かつた。が、やがて誇りと愛國心の方が強くなると、その二つの動機から、彼は今やアセルステインとローエナとの結婚の爲めに斷乎たる手段を取り、それと共にサクソンの獨立の恢復を助ける必要と思はれるその他の策を急ぐことに意を決した。

この最後の問題に就いて、彼は今アセルステインと事細かに論じてゐた、が彼は、ホットスパー(エシイクスピヤは「ヘンリ四世」の中で陽氣な冗談を云ふ熱狂的な武士として描いてゐる)のやうに、自分がこんな乳精を取つた一皿の牛乳のかすのやうな人間を動かしてかういふ名譽な行爲をさせなければならぬのだと思ふと、時折歎かぬ譯には行かなかつた。アセルステインは實際、非常に虚榮心の強い男で、自分の高い家柄や、親譲りの主權や、代々傳

はつた家來からの服従を受ける權利などの話で自分の耳を楽しませる事を好んだ。併しこの詰らない虚榮心は彼のお側仕への家來や彼に近づくサクソン人達などからこの臣下としての服従を受けるだけで十分に満足された。彼は假令危険と戦ふ勇氣はあつても、少くともそれを求めて行く面倒を嫌つた。で、彼は獨立に對するサクソン民族の要求に就いて、セドリックの立てた大體の主義には一致し、その獨立が得られた曉、彼等に君臨するといふ彼自身の權限に至つては尙更容易に納得してゐたのである、が、いざこれ等の權利を主張する方法が論議される段になると、彼は矢張り、遲鈍で、優柔不斷で、愚圖々々で、進取の氣象に乏しい「のろまのアセルステイン」であつた。セドリックの熱烈な激越した勸告も、彼の無感激な氣質には殆んど何の効果もなかつた、それは丁度水中に熱彈を投ずると、一時は一寸した音を立て、煙を擧げても、忽ちに消えて失せて了ふと同じであつた。

が、乗り疲らした瘠馬に拍車を當てるとか、又は冷たい鐵を槌で打つとかするのに喩へてもよいやうな、このアセルステインへの勸告をひるがへして、それを彼の被後見者であるローエナ姫の方へ向けるにしても矢張り、セドリックは同じ不満を姫との談合からも受けたのである。即ち、姫と姫の愛する侍女エルギサとがキルフレッドの勇氣や運命に關し、話し合つてゐるところへ、彼が割り込んでいつて邪魔をした時、エルギサはセドリックの耳には最も痛い題目である試合場に於けるアセルステインの醜態を持ち出して、姫君と自分自身との仇を見事に打つて退けたのである。であるから、この剛直なサクソン人セドリックに取つては、この日の旅は凡ゆる不快と不満とに満ちたものであつた、で彼は例の試合と、

それを催さうと宣言した者とを、更にそんな處へ行かうなどと考へた自分の愚かさをも、内心幾度か呪つたのである。

晝頃、アセルステインの發意で、旅人達はとある泉の傍の森の樹蔭こかげに足を駐めて、馬を休めたり、手厚い大僧正が馱馬に積んでくれた食物を食べたりした。彼等の食事は随分長くかゝつた、でこれ等の色々な障害から、終夜旅行を續けなければ到底ロザーウッドに到着する望みは覺束なくなつたので、一行はこれ迄よりも一層馬の足を早めて道を急いだ。

(十九)

さるやごとなき夫人おとがたを護衛して、

物具ものぐつけた人々の一隊が間近にゐる、

今宵をかの城中で明かすらしい。

(それと氣取けとられず、彼等の後をつけて、

斷々きんげんに耳に入つた彼等の言葉から推すと。)

(オッラー—悲劇)

今や旅人等はかの森林地の入口に到着し、その森の奥深く進み入らうとしてゐた、がそこには當時、

迫害や貧困に驅られて絶望に陥つてゐた數多の浪士どもが、その頃の無力な警察などは物ともせぬ程の大集團を作つて、この森を我物としてゐたので、この森の奥は危険だと思はれてゐた。折から日はもう黄昏たそがれに近かつたが、セドリックとアセルステインとはこれ等の盜賊を少しも怖れなかつた、といふのは、彼等は十人の従者をつれてゐたからである。その十人の他にワンバとガースとがゐるが、一人は幫間、今一人は俘虜とりこであつたので、その助けは期待されなかつた。尙ほ、こんなに遅く森の中を旅行するのは、セドリックもアセルステインも自分達の勇氣、並びに血統や名望に信賴する所があつたからである。而もその浪士といふのは森林法の苛酷な爲めにこの流浪の、無鐵砲な生活に陥つた者で、重にサクソン系統の農夫や郷士であつたが、その爲め一般に同民族の身體からだや財産は尊重すると思はれてゐた。

一行は、大森林へ進み入ると間もなく、助けを呼ぶ悲鳴が續けざまに聞えるので驚いた、そしてその聲のする方へ馬を進めて行つて見ると、地上に投げ出された馬吊臺の傍に、猶太風の立派な装ひを凝らした一人の妙齡の女が坐つてゐる。と、一方には、黄色い帽子で、一目でそれとわかる猶太の老人が、深く絶望を表はす身振りをしながら、あつちこつちと、うろくして、何か意外な災難に襲はれでもしたかのやうに、両手を揉みしぼつてゐるのであつた。

アセルステインとセドリックとの問ひに答へて、この老猶太人は暫くの間はたゞ、續け様さまに舊約全書中のアブラハムやモーゼなどの長老の名を有りつたけ呼び上げて、劍はの双を以て、自分等をずた／＼に斬り苛さいなまうとしてゐるイシュマエルの子等(舊約聖書中のイシュマエルの子のやうな人で「天下を敵とする浪士」の意)を防いで下さるやうにと

祈るだけであつた。が、この恐怖の悶えの鎮まり始めた時、ヨークのアイザック（猶太人といふのは實にこの物語の古馴染であるヨークのアイザックであつたのである）はやつと事の顛末を物語る事が出来た。彼は今日アシビーで六人の護衛と、或る病友の吊臺を曳く騾馬とを一緒に雇つたのである。この一行はドンカスタ迄その病友を警護する筈であつた。で彼等は此處まで無事にやつて来たのであるが一人の樵夫から、行手の森の中に強い浪士共の一團が待伏せしてゐるといふ話を聞くと、逃げ出したばかりか、吊臺を曳いて来た馬迄一緒に連れ去つてしまつた、それで後に残された猶太人とその娘とは防ぎやうも退きやうもなく山賊共に掠奪せられたり、或は殺戮せられたりする羽目に陥り、今にもその山賊に襲はれるかと、ひやく／＼してゐたのである。「どうぞ私等を不憫と思し召して、」と猶太人は辭を低くして言つた、「貴方様方の御保護によりまして道中させて下さいませ。たしかに、こんなに有難い恩恵は私共の俘囚（猶太人は、昔、ビロンの王の捕虜となつた、舊約聖書、耶利米亞記三十九章九節）の時以來、イスラエルの子に授つた事がございませぬ。」

「猶太の犬め！」とアセルステインは言つた、——彼は凡ゆる種類の些細な事、わけても詰らない無禮を何時迄も憶えてゐた。「貴様はあのアシビーの試合場の棧敷でわし達にどれだけ侮辱を與へたかもう忘れて了つたのか。盜賊共と戦はうと逃げようと、或は貴様の好きなやうに示談で梟をつけようと勝手にせい、わし達から助けも同道も求めるな。若し貴様のやうな世界中から盜む奴輩からだけ盜賊が奪るのなら、わしだけは、そんな盜賊は眞正直な者だと思ふわい。」

けれどもセドリックは連れこの苛酷な發議には同意しなかつた。彼は言つた——「我々はこの兩人を次の村へ送り届ける爲め從者二名と馬二頭とを置いて行つてやるが宜からう。假令それが爲め手薄になつてもほんの僅かな事だ、アセルステイン殿、貴方の銘刀と、残りの從者共の助けとがあれば、浮浪者共の二十や三十切つて捨てるには何の造作もあるまい。」

浪士どもが多數、そしてちぎ間近にゐると聞いて、ローエナ姫は少しおどろいたが、しかし後見者の發議には、雙手を擧げて賛成した。すると、今迄萎れ返つてゐたレベッカは急に立ち上り、從者の中を掻き分けて、このサクソン姫の乗馬の所迄來ると、跪いて、目上の者に挨拶する際の東方諸國の風習に倣つて、ローエナの衣物の端に接吻した。それから立ち上つて、面帕（ヴェール）を後へ掻き上げると、姫も自分も信ずる神の御名にかけて又兩人共信ずるシナイ山上の掟（神がモーゼに啓示した掟、舊約聖書、出埃及記十九章）の天啓にかけて、自分達親子を不憫と思つて、貴女様の御保護により旅を續けさせて下さいませと、ローエナ姫に哀願した。レベッカは言つた——「私自身の爲めばかりに、この御恩恵をお願ひ申すのではございませぬ、又あの哀れな老人の爲めばかりでもございませぬ。私等風情に悪い事をし、強奪を加へたところで、基督教徒に取つて手柄にならぬ迄も、ほんの軽い罪にしかありません。そしてそれが都會で行はれませうと、荒野で行はれませうと、又田畑で行はれませうと、私共にとつて何でございませう？ けれども、私がこの病人を貴女様の御保護によりまして、大事に親切に運ばせて戴きますようお願い申し上げますのは、澤山のお方にもお愛しい、又貴女様にもお愛しいお方に代つてなのでございませぬ。と申しま

すのは、若しひよつとこの御病人にとんだ事でもございますと、貴女様は御末期まうちに私共の願ひを叶へて下さらなかつた事を御後悔遊ばして、お苦しみ遊ばす事と存じますからでございます。」

レベッカのかう訴へた氣高い嚴かな態度は、美しいサクソン姫をして、その言葉は二重の重きを置かした。

「あの男は老人で、弱うございます」と姫は後見人に向つて言つた、「あの處女は若くて綺麗ですし、あの親子の友は病んで命が危うございます——猶太人ではありませんが、私達は基督教徒としてこの窮境にゐるあの人達を見殺しに致す譯には参りません。あの人達に馱騾馬二頭の荷を下ろさせ、その荷を馬の背の奴隷兩名の背後のところに擔はせるが宜うございませう。あの騾馬なら吊臺を曳きますし、又私達はあの老人と娘に宛行つてもいゝ馬を曳いて來てゐます。」

セドリックは直ぐに彼女の發議を容れ、又アセルステインもたゞ次の條件を附け加へてそれを容れた——「彼等は一行程の後に隨つて道中せねばならぬ、そしてワンバに例の豚肉の桶を持たせて、彼奴等に付き添はせたがよい。」

「手前はその桶を試合場に置いて参りました」と幫間は答へた、「手前よりも立派な騎士が多勢同じ運命に遭ひましたやうに。」

アセルステインは颯と顔を赤らめた、試合の最後の日には彼自身の運命もさうであつたからである。一方それを見て、アセルステインの不快の程度と同じ位に小氣味よく思つたローエナは、この無情

な求婚者の残酷な冗談に復讐でもするかのやうにレベッカに向つて自分と並んで馬に乗るやうにと勸めるのであつた。

「私をお仲間にお入れ下さつたことがお姫様の御顔汚しのやうに思はれますのに、私等風情が、お並びするなんて相應ふさわしうございますまい」とレベッカは、嬉しげな謙遜な態度で答へた。

「この時には既に荷物の積み換へは大急ぎで済まされてゐた、それと云ふのも「浪士」といふ唯つた一言が皆んなを十分敏捷にし、又追々黄昏の近づいて來る事がこの言葉を尙ほ一層胸に深く徹こたへさせたからである。このどさくさの最中に、ガースは馬の背から下ろされた、そして降りる間に彼は幫間ワンバを説きつけて後腕うしろうでに縛つてあつた綱を弛めて貰つた。それはワンバの方で恐らく故意にしたのだらうが、非常に疎略に結び直されたので、ガースは造作もなく繩目をすつぽりと脱けて、それからそうつと茂みへ忍び入り、その儘一行から脱走して了つた。

「どさくさ騒ぎは中々静まらなかつた、そして暫く經つてから、ガースのゐなくなつた事が知れた。それまで知れずにゐたのは、つまり彼はこれから先の道中、一人の僕の後に曳かれて行く筈であつたので、皆自分の仲間の誰かゞ、ガースを預つてゐるものとばかり思ひ込んでゐたからである。そして彼等の間にガースが實際にゐなくなつたと囁かれ始めた頃には、一行は浪士の襲撃が今か／＼と思ふ程に迫つた氣持でゐたので、そんな事に注意を拂つてゐるどころではなかつた。」

一行の迎る道は、今やどうしても、二人以上、騎士が並んでは通れぬ程狭くなり、やがて深い谿へ

と下り始めた、その谷には一つの小川が流れてゐて、その兩岸は崩れ、水がじく／＼して、其處には低い柳が一面に生ひ茂つてゐた。一行の先頭に立つてゐたセドリックとアセルステインとは、この隘路で攻撃される危険があるのを見て取つた、が併し孰れも餘り實戦の經驗を持つてゐなかつたので、自分等にふりかゝる危害を防ぐ手段としては、出来るだけ大急ぎでこの峽路を通り過ぎるより他、何もいゝ考へが二人の胸に思ひ浮ばなかつたのである。それで少なからず隊伍の亂れた儘、二人は馬を進めて、從者の一部と共にこの小川を渡り切つた。丁度その時、突然前後左右から一度にどつと襲撃して來た、その勢ひの猛烈さ——彼等の混亂した不用意の状態では、到底手強い抵抗を試みる事は出来なかつた。「白龍(イングリッドの守護)！ 白龍！ 楽しきイングリッドの味方聖ジョージ！」サクソン浪士を裝ふ賊のこの鯨波が四邊に起つたかと思ふ間もなく、賊徒が一度に四方八方から現はれた。それが餘り不意だつたので、人數が實際倍もあるやうに思はれた。

サクソンの頭目は兩人同時に——セドリックはいかにもセドリックらしく、アセルステインはまたいかにもアセルステインらしい境遇の下に、賊の捕虜となつた。セドリックは一人の敵が現はれたその瞬間、残りの投槍をその者目がけて投げつけた、とそれは先にファンクスに投じたものよりもよく利いて、その敵を僕々その直ぐ後にあつた櫛の樹へ縫ひつけて了つた。セドリックは、これ迄は上首尾であつたが二番目の敵を目がけて馬に拍車を當て、同時に腰の劍を抜いて、太刀風烈しく打下ろすと、その劍は彼の頭上に垂れてゐた太い枝には、つしと當つた。すると自分の強く打ち込んだ太刀の機勢に

太刀は彼の手から脱けて了つた。彼はその場で捕虜となつた、そして彼を目がけて押し寄せた二三人の山賊の爲めに馬から引き摺り下ろされた。アセルステインは、馬勒を取り押へられて、これも亦捕虜となり、劍を抜くことも、十分な防禦の身構へを執ることも出来ない内に、我と地響き立て、落馬して了つた。

從者等は、荷物が邪魔にもなり、主人の運命を見ては驚き怖れもして、ぐづ／＼してゐるうちに容易く寄手の餌食となつた。一方、一行の眞中にゐたローエナ姫や、後にゐた猶太人及びその娘も、これ亦同じ不幸に遭つた。

一行中で僅かに虎口を脱し得たのは、この場に臨んで平生ずつと智慧のありさうな顔をしてゐた者よりも遙かに多くの勇氣を示した道化ワンバ唯一人であつた。彼は家來の一人が丁度今、まだるい愚圖々々した手付で引き抜かうとしてゐた劍を奪ひ取つて、猛り狂ふ獅子の如く前後左右に薙ぎ立てながら、近づく敵を追ひ拂つて、主人を助け出さうと勇敢な働きをした、けれどもその甲斐はなかつた。で多勢に無勢、到底敵し難いと見て取ると、幫間ワンバは遂に馬から飛び下りて、傍の藪の中へ飛び込み、周圍がみんな、騒いでゐるのを幸ひ、修羅場から逃げてしまつた。

而もこの剛勇なる幫間は、我身が安全と分るや否や、幾度も引き返して眞心から懐いてゐた主人と一緒に、捕虜にならうかなるまいかと躊躇したのである。

「俺はよく人々が自由の幸福といふことを話すのを聞いた、」と彼は我と我が身に言つた、「だが俺は

誰か賢い人に、その自由を得た今、それをどう用ゐたらいいか教はりたいものだ。」
 彼がこの言葉を聲高く獨言ちた時、彼の直ぐ傍で一つの聲が低い用心深い口調で、「ワンバ！」と呼んだ、そして同時に一匹の犬が、彼の處へ飛んで来て鼻を鳴らして媚びた、見るとそれはあのファンゲスであつた。「ガースー」とワンバは同じく邊りに氣を拂ひながら答へた、すると豚飼ひ男が直ぐに彼の前に突つ立つた。

「何事が起つたのだ、」と彼は熱心に訊ねた、「今の叫び聲や、あの太刀の音はどうしたのだ？」

「たゞ時代時節のいたづらさ。彼等が皆な捕虜になつたのだ。」

「誰が捕虜になつたんだ？」とガースは、もどかしげに叫んだ。

「御主人に、姫君に、アセルステイン様に、ハンディバートに、オスワルドさ。」

「やあそれは大變だ！ どうして又捕虜になつたのだ？——そして誰の捕虜に？」

「旦那様は餘り戦ひにはやり過ぎたし、アセルステイン様は餘り身構へが遅かつたし、又他の者は全然戦はうとしなかつた。そして残らず緑の上衣、黒い覆面の奴等に捕虜にせられた。そして皆んな、おぬしが豚に振り落してやる野生の林檎のやうに、芝生の上に轉げ廻つてゐる。俺は出来るなら泣かずに、」と正直な幫間は言つた、「それを笑ひたいのだが。」そして彼は心からの悲しみの涙を流した。

ガースの顔は耀いた——「ワンバ、」と彼は言つた、「おぬしは武器を持つてゐる、そしておぬしの胸(情)は、何時も腦(智)より強い——俺達はたつた二人切りだ——だが決心を固めた人間が不意打ちす

りや大いにやつつけられよう——さあ俺について来い！」

「何處へ？ そして何の爲めだ？」幫間が言つた。

「セドリック様を救ひにだ。」

「が、たつた今お前はセドリック様の御奉公は眞平だと言つたばかりだぜ。」

「そりやセドリック様がお仕合せな内だけさ——俺について来い！」

幫間がガースの言ふ事を肯いて引き返さうとした途端、突然其處へ姿を現はして、待て！ と二人を呼び止めた者があつた。ワンバは、その男の身装や武器だけから判断したのなら、つい今主人を襲つた賊の一人と推測した事であらうが、併し、その賊が覆面をしてゐなかつたといふ事の他に、肩に斜めに掛けた煌々する肩帶、それへ吊つた立派な角喇叭、それに彼の聲や態度の物靜かな威風堂々たるま、それ等は薄暮にも拘らず、これこそ弓術の賞を争つて、あんな不利な事情でありながら、見事勝利を得た郷士ロックスリイだと思ひつかせたのである。

「これは一體どうしたといふのだ、」と彼は言つた、「いやこの森で、掠奪したり、脅嚇したり、捕虜にしたりするのは何者だ？」

「彼奴等の上衣を傍に寄つて御覽なさるが宜しうございます、」とワンバは答へた、「してそれが郷士様の子供等の服であるかねえか御覽なさるが宜しい——豌豆の莢がどれもこれもよつく似てゐるやうに、郷士様の着てゐるのとそつくりその儘でございますからな。」

「ほんとにさうか、間もなく分らう。貴様達はわしが戻つて来る迄、今立つてゐる處から動くな、(萬一動く)と息の根を止めてくれるぞ。」わしの言ふ通りにせい。さうすりやお前達やお前達の主人の爲めになる。——だが待てよ、出来るだけあの者共のやうな身拵へをせにやならんて。」

さう言ひながら、彼は肩帯を喇叭諸共外し、帽子から飾羽毛を取つて、それ等をワンバに渡した。それから懐中から覆面を取り出し、(そして)緊と立つてゐると云ふ命令を繰り返して、偵察の目的を果すべく出掛けて行つた。

「俺達は凝然と立つてたもんだらうか、ガース？」とワンバが言つた、「それとも逃げ出したもんだらうか。俺の馬鹿な心では、あの男は泥棒の支度を萬端餘り調へ過ぎてゐた、どうも眞人間とは受取れねえ。」

「悪魔になりたけりや悪魔にならせるが、俺達はあの男の歸りを待つても損な筈はねえ。若し彼奴が向うの組のものなら、もう彼等に警報をしたに違ひめえ、すりや戦つても逃げて何の役にも立つめえ。それに、つい此間も出會した事だが、流浪泥棒つてものを相手にするのに滅法悪い奴等でもねえ。」郷士は間もなく歸つて來た。

「ガース、わしは向うの奴等の中に入つて、彼等が誰の部下であるか、又何處へ行くのか探つて來た。彼等はあの捕虜共に實際手荒な事をする事はよもあるまい。僅か三人で今彼等を襲ふのは全く狂氣の沙汰だ、(何故と云ふに、)向うは立派な武士だ、で、そんな奴等だから、誰でも近づくとすぐ警報を傳

へるやうに番兵を置いてゐる)が併しわしは直ぐに、彼等がどんな警戒をしようとするかと物ともせず働く事が出来る程の軍勢を集めてみせる。お前達は兩人共召使、それもイングリッド人の權利の擁護者、『サクソン人』セドリックの、忠義な僕だつたな、確かに。セドリック殿にこの窮境を助けるイングリッド人がゐなくて困るやうな事はさせはしない。ではわしと一緒に來い、もつと援兵を驅り集めるのだ。」かう言ふと、彼は幫間と豚飼ひとを後に從へて、大勝に森の中を歩き出した。長い間黙つて歩く事はワンバの氣持にそぐはなかつた。

で未だ自分が持つてゐる肩帯と喇叭とを見遣りながら、彼は言つた、わしはこの立派な褒美を取つた矢が射放される所を見たやうに思ふが、それはクリスマス程ずつと前の事ではなかつたやうだ。「そして俺は、」とガースは言つた、「それを取つた郷士さんの聲を晝も夜も聞いた、又それを聞いてからお月さんはまだ三日も経つてゐねえ、神かけてこれに間違ひねえて。」

「お前さん方、」と郷士は答へた、「わしが誰であらうと何者であらうと、そんな事は今の役に立たない、わしがお前さん方の主人を自由の身にして上げたら、お前さん方はわしを一生中の一番よい味方だと思へる譯だ。そしてわしがこの名で知られようとあの名で呼ばれようと——いや又牛番人程弓を引けようと、牛番人よりも巧からうと、又日向を歩くのが、わしの好みであらうと、月の光を浴びるのが好きであらうと、そんな事はお前達に關係もないし又それに就いてお前達が大騒ぎするにも及ばぬ事なのだ。」

「俺等の頭は獅子の口にある、」（「獅子の口に頭がある」とは危地に陥つてゐるの意）とワンバはガースの耳に囁いた、「どうでもそれを救ひ出してやらなきゃなんね。」

「レッ、黙れ。」ガースが言った、「馬鹿な事を言つてあの人の氣に障るな、俺は萬事うまく行くだらうと、心から當てにしてゐるのだ。」

(二十)

秋の夜の長くして佗しき時、

森の細路の仄暗き時、

隱者の聖歌洩れ来るは、

巡禮の耳に常に如何に妙なりけん！

信仰は樂の調べを借り、

樂は信仰の翼に乗る、

かくて、太陽を歡び迎ふる鳥のごと、

そは天に翔り、翔りつゝ歌ふ。

（「聖クレメントの泉の隱者」）

三時間たつぷり歩いてから、セドリックの僕達は、あの不思議な道案内と打ち連れて、森の中の、とある小さい廣場に着いた。その真中には一本の大きな榊の木が、ね振ぢくれた枝を四方に延ばしてゐて、その樹蔭に四五人の郷士が土の上に寝そべつてゐた。そして、今一人は歩哨らしく、月光の蔭をあちらこちらと歩き廻つてゐた。

足音のちかづいて来るのを聞くと、見張りのものは、直ちに警報を傳へた。寝てゐた者は、がばと跳ね起きて、各自に弓を取つたかと思ふまに、弦に六本の矢をつがへて、旅人たちの近寄つて来る方へ向けた。が、その時、道案内の何者かをみとめると、尊敬と愛着とを、この上もなく形にあらはして彼を迎へた、と同時に、さうき先刻までの荒つぽい應接の態度や、さうした不安の色は、すっかり消えてゐた。

「ミラーは何處にゐる？」と道案内者は先づ訊ねた。

「ロザラム方面の街道にゐます。」

「同勢は？」と、首領らしいその男が重ねて訊いた。

「六人、そして分捕品は十分ある見込でございます、運よくば。」

「そいつは神妙な話だ、」とロックスリイは言つた、「そしてアラン・ア・デールは何處にゐる？」

「ジョルヴォールの僧正を張込みに、ワットリング街道（キングランドを横断してドーヴァーからロンドンを経てチエスタに達する大道）の方へ歩いて行き

ました。」

「それもいゝ思案だ、」と首領は言つた、——「それから和尚は何處に？」

「自分の庵いほりにゐます。」

「ぢやあ、わしは其處へ行かう。」と、ロックスリイは言つた、「お前達は手分けして、仲間の者を探して來い。出来るだけ澤山同勢を集めて置けよ、うんと狩り立て、やらねばならぬ獲物が徘徊うろついてゐて、死物狂ひの抵抗をするだらうからな。では夜明けに此處で又會はう。——あゝ、一寸待て、」更に附け足して彼は言つた、「一番大事な用事を忘れてゐた——お前達の中誰か二人は、フロン・ド・ブーフの城のある、トールキルストーンの方へ大急ぎで行け。俺達のやうな、假装をした猛者連が一隊の捕虜を其處へ連れて行くところだ——其奴等そいつらをよよく見張つて居れ、たとひ俺達の同勢が揃はぬ中に彼奴等が城に着かうと、俺達は俺達の體面上、彼奴等を懲らしてやらねばならぬのだ。又さうする手段も見つけよう。だから彼奴等をよよく見張つて居れ、そして、お前達の中で、一番足の早い者を遣つて、そこいらの郷士共たよりの消息を持つて來させるんだ。」

彼等は全く命令通り實行することを誓つた、そしてそれらの使命を果す爲めに氣輕に飛び出して行つた。一方、彼等の首領と今や彼を大いに尊敬もし、又幾分怖れもして來たその二人の連とは、コブマンハーストの御堂をさして路を辿つて行つた。

やがて彼等が一寸した月影の射す樹間の空地——その正面に尊い、けれども荒れ果てた御堂と、苦

行の信仰生活に非常に相應はしい粗末な庵とが立つてゐる處に着いた時、ワンバはガースにかう囁いだ、「これが若し泥棒の巢窟すみかだとすると、『お寺へ近づく程神様から遠ざかる』といふ古い諺が證明されるわけぢやて。そして屹度、」と更に附け加へて言つた、「それに違ひなからう？——まあぢつと耳をすまして奴等が庵で歌つてる飛んでもない聖歌をお聞き！」

實際その時隠者と客は、その肺量一杯の非常に強い聲で、或る昔の酒の歌を唄つてゐるところであつた、これがその疊句である——

さあさ、その茶色の盃こつちやへお廻し、

面白い子ぢや、面白い子ぢや、

さあさ、その茶色の盃こつちやへお廻し、

ほう！ 面白いジエンキン、お前は

悪者のやうによく飲むな、

さあさ、その茶色の盃こつちやへお廻し。

「ふゝん、滿更まんざら捨てた歌ひ振りぢやねえぞ、」とワンバは、この合唱に附け足して一寸自分の文句を差し挿んでから言つた。「だが一體誰が、而も眞夜中に隠者の庵からこんな陽氣な囃はやしを聞くと思はう！」

「いや、俺はさうでもないよ、」とガースが言つた、「何しろこのコブマンハーストの浮かれ坊主は名

うての男だ、この道で影を亡くする御料林の鹿の半分はこの坊主が殺すのだからな。なんでも人の話ぢやあ、山番がお上かみに訴へ出たので、もつとよく規則を守らなけりや、袈裟衣けさころもを悉皆すつかり剥ぎ取られるだらうと云ふ事だ。」

二人がかう話してゐる間に、ロックスリイのけたましく、續けざまに扉を敲く音が、到頭中に聞えて隠者と客とを驚かした。「おや、おや」と隠者は、今迄唄つてゐた賑やかな歌を突然止めて言つた、「今度の夜更よごの客はもつと澤山らしいぞ、わしはこんな頭巾の手前、この心地よいお勤めをしてゐるところを見られたくない。どんな人にも敵はあるものだ、のろまの騎士殿。世間には随分性悪しやうあくの手合てあひがゐて、愚僧が貴方といふ疲れた旅の方に、それもものゝ三時間足らずしかお勧めせぬお款待もてなしの小酌しやくを、やれ亂舞の、放蕩のと、どれもこれもわしの商賣や、わしの氣性には反對の悪徳にばかりこじつけてしまふのだ。」

「何といふ卑劣な讒誣者だ？」と騎士は言つた、「私は彼奴等を懲らしてやりたい。だが、和尚殿、萬人皆その敵を持つと云ふ事は眞實だ、この國にさへ、素面すめんよりも寧ろ兜の格子越しに話したいやうな者共がゐます。」

「ではその貴方の鐵くろがねの兜を、のろま殿、御性分はのろまながら、出来るだけ迅はやくお被かぶりなさい、」と隠者は言つた、「その間に愚僧は此處こゝいらの白鐵しろがねの瓶を片付けて了ひませうが、どうも今の先迄この瓶の中へ入つてゐた奴が妙にわしの禿頭くちうちの中を駈け廻つてゐるわい——それから片附ける音を紛まぎらす爲

めに——何しろ、實際、わしは少々ふらくするやうな氣がするでな——わしが今唱へる通りの調子でわしに合せて下さい、なに文句などはどうでも宜しい——わしもあまりよく知らんのだ。」

かう言ふと、彼は雷のやうな聲を張り上げて、「深き淵より呼べり」(舊約聖書、詩篇百三十篇、京まうでの歌の初めの文句「ああエホバよわれ深き淵より汝を呼べり」とあるを引いた)と歌ひ出し、それに紛らして酒宴の器類を取り片づけた、その間騎士は、心しんから笑ひながら、武装しつゝ、輿こしの乗るたびに、時折主あるじの僧に聲援するのであつた。

「こんな時刻に又何といふ飛んでもないお祈りを擧げるのだ？」と、外からの聲が言つた。「おやまあ、旅たびの方！」と隠者は、自分自身の騒ぎ聲と、それから多分よる夜よなか酒を饜腹たらぐ飲んだ故であらう、随分耳慣れた聲音こゑにも拘らず、それに氣附かず言つた、「お行きなさい、神様やダンスタン聖人の御旨みねだ。そしてわし達の信神をお妨げ下さるな。」

「狂氣坊主め」と外からの聲が答へた、「ロックスリイだ、戸を開けてくれ。」

「萬事安心だ、——無事だ——」と隠者は黒裝束の騎士に言つた。

「だが何人なんびとです？ 私にはそれが中々重要な關係があるのです。」

「誰？ いや、なに、わしの友達なのだ。」

「だが、どう云ふ御友人ごゆうじんです？」と騎士は押しして訊ねた、「貴僧の御友人でも、私にはさうでないかも知れませんかからな。」

「どう云ふ友達？」と隠者は繰り返した、「さあ、さういふ問ひはとかく問はれ易くて答へにくいもの

ぢやて。どう云ふ友？——さやうさ、一寸思ひ出したところでは、先づ愚僧がつい先刻お話し申したあの正直な番人でございませうかな。」

「は、あ、貴僧が敬虔な隠者であるやうに、その番人も同じ程度に正直だといふのですな、まあそれは疑ひ申しますまい。それはさうと、蝶番を叩き壊されぬ中に、戸を開けて上げたがいゝでせう。」

一方、犬共は、この騒ぎの始め頃に恐ろしい吠え聲を立てゝゐたのが、今は外に立つてゐる人の聲を聞き分けたかのやうであつた、と云ふのは、今迄とは打つて變つて、宛で彼を内へ引き入れるやうに取りなすかのさまに、戸を掻いたり、わん／＼鳴いたりしたからである。隠者は素早く玄關の門を外して、ロックスリイと連れれの二人を一緒に内に入れた。

「これは、隠者殿、」と郷士は一目騎士の姿を見るなり、先づかう訊ねた、「こゝに居られるお飲み相手は、どう云ふお方かな？」

「同宗の仲間で、」と隠者は、首を振りながら答へた。「實は、徹宵二人で祈禱を上げてゐたのだ。」

「ではその方は僧兵なんでせう、」とロックスリイは言つた、「彼等はもつと澤山海外にゐます。それはさうと御坊、貴僧に念珠を置いて六尺棒を取つて戴かねばなりません、僧であらうと俗人であらうと、仲間の者は一入残らず用があるのだ。——だが、」彼は一步脇へ連れて行つて、言ひ足した。「御僧は氣でも狂はれたか？ 御存じない騎士などを内へ引き入れて？ 我々の規約をお忘れなされたか？」

「御存じない、と！」僧は大膽に言つてのけた、「乞食が自分の腕を知つてゐると同様、わしはよく存じてゐるわい。」

「では名は何と云ふ？」

「名は、」と隠者は答へた、「えゝと、名はスクラッペルストーンのアントニイ卿だ——貴方の口振りぢや、まるでわしが、何時も人と飲んで、その人の名を知らずにゐるやうだな！」

「貴僧はちと飲み過ぎられたな、」と彼の森男は言つた、「して又餘計なことを喋り過ぎればしなかつたかな。」

「いや郷士殿、」と黒装束の騎士は、前に進み出て言つた、「この愉快な主をさうお怒りなさんな。このお款待も若しも断られたら私は無理にも、強請らうと思つてゐたのです。そして隠者殿はその款待を私に與へて下さつたまでのことです。」

「貴方が強ひる！」と僧は言つた、「まあ今わしがこの灰色の衣を緑の法衣に着更へる迄お待ちなさい。そしてわしは屹度貴方の脳天に六尺棒を十二ほど喰はせますぞ。さもないと、わしは眞の坊主でも、立派な森男でもない。」

彼はかう言つてゐる間に、法衣を脱ぎ捨てゝびつたり身に着いた黒い硬布の胴衣と股引だけになり、その上へ素早く緑の法衣を引つ掛け、同じ緑の長襪を穿いた。「濟まないが紐を結んで下さい、」と彼はワンバに言つた、「お駄賃にスペイン製の白葡萄酒を一杯差し上げませう。」

「それは有難うございます、」とワンバは答へた、「だが、まあお考へなすつて——一體手前はあなた

が聖い隠者から罪深い森男に變化かはられるお手傳をしてもいゝものでございませうか。」
 「いや案ずるには及ばぬ、」と隠者は言つた、「わしはたゞフランチェスコ派の灰色の僧衣に對し、この緑衣の罪を懺悔するだけで、すべてはまた元通りになるのだ。」

「アーメン！」と暫間は答へた。「成程、上等服を着た懺悔者は粗末の衣を着た司僧に懺悔を聴いて貰ふものでございます。ではあなたの法衣おころもは手前の染分けそめわの胴着もお負けにお赦し願へませうね。」

かう言ひながら、彼は僧に手傳つて、言はれるまゝに、今度は長襪を胴衣に附ける恐ろしく澤山の紐を結んでやつた。

二人がかうしてゐる間に、ロックスリイは騎士をちよつと傍へ呼んで、かう話し掛けた——

「お隠しなさいませぬ、騎士殿——貴方は確かアシュビーの馬上試合の二日目にイングランド人側の味方となつて勝利を得させられたお方でございませう。」

「そして若しそれが甘く當つたと致したら、郷士殿、それから何となさる御所存です？」と騎士は答へた。

「若しさうであつたら、私は貴方を弱い者に味方する人と當然思ひます。」

「さういふのが少くとも眞の騎士道と申すものであらう。私をさうでなく思はれるのは、どうも餘りぞつと致しません。」

「だが私の爲めに、立派な騎士であると同様、立派なイングランド人であつて欲しうございます。と

申す譯は外でもございませぬ。貴方に今お話し申さねばならぬ事は實際、總ての正直な人の義務、いや、わけてもイングランド生えぬきの者の義務でございます。」

「貴方は何處を探しても、私程イングランド及び凡ゆるイングランド人の生命いのちを大事に思ふ者にお話しなさる事は出来ません。」

「私は喜んでさう信じませう、」と郷士は答へた、「何しろ我がイングランドは開闢このやう以來愛國者の支持を必要とした事はございせんからな。ではお聞き下さい、こゝに一つの企圖くはだて事があるのです、果して貴方がお見受け申した通りのお仁ひとなら、定めし天晴れ御加擔下されようかと存じます。實は一隊の悪者共が、自分等よりも善良な人々に身を扮して、サクソン人セドリックと申す高貴のイングランド人や、その方が後見する姫、及び友のコンニングスポローのアセルステインなど引つ捉へて、トールストーンと云ふ、この森の中の城へ連れ込みました。それで貴方を立派な騎士とも立派なイングランド人とも見込んでお願い申し上げますが、どうかその人達を救ひ出す御援助をしては下さるまいか。」
 「それは武士の誓言、たしかに引き受けました。が、それにしても、彼等の爲めに私の援助を乞はるる貴方は一體どなただか承つて置きたいものです。」

「いや私は名もない男です。けれども我が國の味方であり、又我が國の味方である人々の味方でございます——今のところはこれだけで満足してゐて下さらなければなりません、まして貴方にしてからが何時いつ迄も御名を包むようお望みなさる以上、尙更の事でございます。しかし、私の言葉は、一旦こ

の口から出た以上、勳爵士の誓言同様、破り得ぬものだとお信じ下さい。」
 「喜んで信じませう。私は人の面相を觀つてゐるので、失禮ながら貴方のお顔に正直と決斷方との相の現はれてゐる事が解ります。でこれ以上はお訊ね申し上げずに、その虐げられた捕虜を救ひ出す御援助を致しませう。この仕事が終われば、我々は必ずもつとよく知り合つて、お互に十分満足してお別れすることゝなませう。」

「ぢやあ、」とワンバはガースに向つて言つた、——僧ももう十分身支度が出来たので、暫間はこの小屋の向う側に近寄つて行つて、騎士と郷士との話の結末を聞いたのである。——「ぢやあ、俺達は新しい味方を得たわけだな？——屹度あの騎士の剛勇は、隠者の神信心よりも、郷士の正直よりももつと本物だらうぜ。だつてこのロックスリイは生れながらの鹿盗人のやうだし、坊さんは中々達者な猫被りのやうに見えるものな。」

「お黙りよ、ワンバ、」とガースが言つた。「そりや皆んなおぬしの推量通りかも知れんが、併し今、角の生えた鬼が出て来て、セドリック様やローエナ姫を自由の體にする援助を申し込んで来て、俺にはその悪魔の申出を斷つて、俺の後に退かせる(新約聖書、馬可傳八章三十三節に「イエス回顧りその弟子を見てペテロを戒めて曰ひけるは、サタンよ我後に退け、爾は神の情を思はず反つて人の情を思ふ、」)だけの神信心はまあ大抵あるまいと思ふ。」

僧は今悉皆郷士の服裝を調べて、劍を吊り、圓楯を抱へ、弓を手挟み、箆を負ひ、肩に丈夫な長柄の矛を擔いでゐた。そして一行の先頭に立つて庵を立ち出で、扉の鍵を念入りに掛けると、その鍵

を敷居の下に藏つた。

「貴僧はもう十分働けるやうになられたかな、」とロックスリイは言つた、「それともまだ褐色の瓶の酒が頭の中をぐる／＼駐け廻つてゐるか？」

「いや聖ダンスタンの泉をほんの一口飲めば鎮まるぢやらう、」と僧は答へた、「まだ何となく腦の中がひゅ／＼／＼鳴るやうだし、脚もふら／＼／＼するやうだが、まあ見てゐておくれ、もうぢき兩方共失くなるだらうから。」

さう言ふと、彼は泉の水が滾々と流れ落ちて、白い月光に水泡を作つて踊つてゐる石の水盤へつかつかと歩み寄つて、泉を飲み乾して了ふ積りかと思はれる程長い間息も吐かずにか／＼／＼飲んだ。

「いつかこれ迄にそんなに澤山水を飲まれた事がお有りだつたかな、コブマンハーストの聖僧殿、」と黒装束の騎士が言つた。

「いやわしの酒樽が漏つて、中味が飛んでもない口から流れ出てな、それで此處にあるわしの守護神の賜物(前に記してある)の外は飲むものが何にも残らなかつた事があるが、その時以來の事だ。」と僧が答へた。

それから手や頭を泉の中に突つ込んで、酒盛りの跡をすつかり洗ひ落した。かうして氣が清々しく酔ひが覺めると、この快僧は、携へた重い矛を、宛ら一本の蘆を秤つてゑもゐるかのやうに、軽々と三本の指で頭上に振り廻しながら、かう叫んだ、「娘共を勾引たしといふ、そ

の不實の人攫ひ奴らは何處にゐる？ 彼奴等の十人や十五人束になつて掛つて來たつて、びくともせんで！」

「和尚殿、御坊は誓ひなさるか、」と黒装束の騎士が言つた。

「さう和尚々々と言つて下さんな、」と變装の僧は答へた、「神かけて、わしは法衣を着てゐる間だけは僧侶の身である——が緑の衣に納まつた時は、西區にゐるどの愉快な森男とも、飲みもし、悪口もたつき、又少女を口説きも致すのだ。」

「さあお歩きなされ、御坊、」とロックスリイは口を出した、「黙つてお歩きなされ。御坊はまるでお祭りの前夜、僧院長が寢床へ行つた後で、僧院中の尼さんが騒ぐやうに姦ましい。——あなた方もお歩き下さい、そんな事をぐづく立ち止まつて話してゐなさるな——さあ、お歩きなさい、我々は同勢をありつたけ驅り集めなけりやならないのですぞ、萬一レジナル・フロン・ド・ブーフの城を襲ふとなれば、我々の軍勢は餘り十分とは申されまい。」

「何に！」と黒装束の騎士は吃驚したやうに言つた、「では王の公道で、王の自由な民を抑へたのはフロン・ド・ブーフなのか、——彼は盜賊となり、暴虐者とまでなつたのですか。」

「彼は、いつも暴虐者なりました、」とロックスリイが答へた。

「して盜賊としても、」と僧は口を挾んだ、「わしの知合ひの多くの盜賊が持つ半分程の正直ささへ持つてゐるかどうかも疑はしいものぢやて。」

「さあ御坊、黙つてお歩きなさい、」と郷士は促した、「禮儀の上から云つても、憤みから云つても、言はずに置くべき事を言ふより、寧ろ集合の場所へ道案内でもなされた方がずつとまじだ。」

(二十一)

あゝ、何と多くの年月の

経つたことぞ！

人々がこの卓子の周りに坐つて、

ランプや蠟燭の光が、

その表を照らしてからこのかた。

疾くに去つた時の音が、我等が頭上、

この小暗い高い空虚の圓天井に、

長く奥津城に眠つてゐる人の音聲の

さすらふやうに、

今も尙ほ囁くのを聞くやうだ。

(オッラー悲劇)

セドリックやその仲間の人々の爲めにかう云ふ手段が講ぜられてゐる間に、彼等を捕へた武装の一隊は、彼等を押し籠める積りの安全な場所をさして、捕虜を急がせてゐた。併し宵闇は刻一刻と追ひ迫つて来るし、森の小徑はこの掠奪者共にはほんの朧ろげにしか知られてゐないやうであつた。彼等は度度長い間立往生しなければならなかつた、それ許りか、一二度は道を間違へて、又元の方向を取る爲め、途中で引き返さなければならなかつた。夏の短夜は、十分安心して本當の道と信ぜられる徑を進む事が出来ない中に、はや明け渡つて了つた。併し曙の光と共に自信も元の如くついて来て、この騎馬の一隊は今や馬の足を早めて前進した。その間に次のやうな對話が、この山賊共の二頭目の間に交されたのである。

「もうそろ／＼貴方は私共と別れらるべき時刻でありますぞ、モオリス殿、」と寺侍はド・ブラシーに言つた、「この神祕劇の二番目の役割を演ずる支度をなさるがい。今度は救助の騎士を演らなくてはならないのだからな。」

「いや、それに就いては私に好い考へがある、」とド・ブラシーは答へた、「私はこの獲物がフロンド・ブーフの城に本當に預けられる迄は、貴方とお別れしますまい。城中で私は本當の姿でローエナ姫の前に出よう、さうすれば必定、姫は私の犯したこの亂暴も、所詮自分を戀慕するの餘りに出た事と思はれるだらう。」

「してド・ブラシー殿、貴方は又何で以前の計畫をお變へなすつた？」

「それは貴方に何の関係もありません。」

「けれど騎士殿、願はくはこの策の變更が、私の公明正大な趣意に對する疑惑などから起つたものでなくて欲しい、あれはフィツァーズもくれ／＼も説いて、お聞かせ申した筈だ。」

「私の考へは私の考へだ、」とド・ブラシーは答へた、「泥棒が泥棒のものを盗むと鬼が笑ふとよく下世話で申します、がその鬼が笑はないで、地獄の火や硫黄を吐き掛けても、それが寺侍が自分の好むところに従ふのを妨げは決して致しませんまい。」

「して又その鬼が地獄の火や硫黄を吐きかけても、自由兵團の首領が、自分が凡ゆる人間に對して行ふ不義非道の所爲を、仲間であり、友人である者からも受けようかと恐れるのを止めもすまい、」と寺侍が答へた。

「こりや無益な險呑な擦り合ひだ、」とド・ブラシーは答へた。「ではかう申せば澤山であらう、私は寺侍團の風儀(寺侍團のたらしめない風儀、品行は論ずるに及ばない様である)を存じてゐる、で、貴方は私が折角斯様な危険を冒してまで得た美しい獲物を、さうむざ／＼騙り取られたくはないのだ。」

「何だ詰らん！ 何をくだらん心配をなさるのだ？——貴方は我々寺侍團の誓約を御承知の筈だ。」

「よつく心得てゐます、して又その誓約がどんなに遵守まもられてゐるかも心得てゐますわい。さあ、寺侍殿、立派な紳士の道はパレスティンでは自由な解釋をされてゐる、又今の問題も私が貴方の良心に少しも信頼を置けぬ一問題なんです。」

「然らば眞實のところをお聞き下さい。私は貴方の碧眼の美人には少しも眼をくれない。この一行には私にずつといゝ相手の女がゐます。」

「何に！ 貴方はあの侍女に身を屈しようとなさるのか。」

「いや、騎士殿」と侍侍は傲然として言つた、「侍女などに身を屈しはしない。捕虜中に貴方にも劣らない可愛らしい獲物があるのにお氣がつかれないのか。」

「すると貴方の言はれるのはきつとあの猶太の美人のことだな！」

「だが、私があゝの猶太の美人をどうしようつて、誰が苦情を申さう？」

「苦情を申すものはあるまい、若しあれば貴方の獨身生活の誓ひの手前か、若しくは猶太女との情事に對する良心の咎めかだらう。」

「誓ひの方は、我々の大長老が私に免除を與へてくれた。又良心の方は、三百のサラセン人を殺した男が、今更田舎娘が基督磔刑祭の逮夜に初めて懺悔をする時のやうに、僅かな過を一々數へ立てるにも及ぶまい。」

「貴方は御自分の特權を一番よく御存じぢやない。」とド・ブラシーが言つた。「けれど、どうやら貴方の思惑はあの娘の黒い瞳よりも、たしか、あの金貸爺の財布にあつたやうだ。」

「私は兩方共に賞美する、」と侍侍は答へた、「それにしても、あの猶太の老耄は半分の獲物に過ぎぬ。フロン・ド・ブーフにしても自分の城を只で貸しはしますまいから、あの財布は何うで彼と分けねばな

るまい、私は今度の掠奪で全然私一人のものと言ひ得る物を何か一つ手に入れなくちやならない。それであの可愛らしい猶太娘を私獨りの獲物に極めたのだ。それはさうと、私の意のあるところがお分りの上からは、御自分の最初の計畫通りにされるでせうね？——私の干涉を御心配なさる事は少しもないと申すことはお分りの筈だ。」

「いや、何處迄も獲物の傍は離れますまい。貴方の仰せられる事は一通り眞實だ、が併し私はどうも、大長老の免除に依つて得た特權や、三百のサラセン人殺戮によつて得た功績などは好まない。貴方は餘りに結構な自分免許の權利を持つて居られるので、微罪などにはあまり懸念されないのだ。」

かういふ對話が交されてゐる間に、セドリックは、自分を警護してゐる者共から、何とかして彼等の身分や目的の表明を聞き出さうと努めてゐた。「貴様達はイングラント人に相違なからう」と彼は言つた、「であるのに、おゝ何たる事だ！ 本當のノルマン人でゝもあるかのやうに同胞を掠める。貴様達は慥かにわしの近くに住んでゐる者だ、若しさうなら、わしの友人の筈だ、イングラント人でわしの近所の者なら、誰が一體友達でない譯があらう？ これ貴様達郷士共に言つて聞かせるぞ、貴様達の中で浪士の焼印を捺された者共さへ、わしから保護されてゐたものだ、といふのも、わしは彼等の不幸を憐み、暴虐な貴族共の壓制を呪ふからだつた。だのに、貴様達は何をわしから取らうとするのだ、或は又こんな亂暴狼藉を働いて何の役に立つのだ？——貴様達の爲業は野獸よりも悪いぞ、而も貴様達はその野獸の啞のところまで眞似ようとするのか。」

併し、セドリックが警護の者共に幾ら諫告しても何の甲斐もなかつた、彼等はその沈黙に對して餘りに多くの立派な理由を持つてゐて、セドリックの怒りによつても、諫言によつても、その沈黙を破られる筈はなかつたのである。彼等は相變らず彼を急ぎ立て、馬の足を早めに早めながら、遂に大木の並樹道の盡きる處、當時レジナル・ド・フロン・ド・ブーフの住む、トキルストーンの白茶けた古城が立つてゐる處まで來た。城砦はさして廣大なものでもないが、中央には天主閣の、高い大きな四方形の塔が聳え、その周圍には内庭に包まれた、その天主閣よりも低い建物が立つてゐた。外堀の周圍は深い濠で、近處の小川から水が引いてあつた。フロン・ド・ブーフはその性格上自分の敵と屢々相闘つたので、城を側面から護る爲めに外壁上の角々に塔を建て、城に大きな強味を加へたのである。入口は弓形の外堡をくゞりぬけるやうになつてゐた。その外堡と云ふのはその頃の城に普通あるやうに、その外堡の隅々に小さい櫓があつて、同時にその櫓が外堡を護るやうにしてあつた。

セドリックはフロン・ド・ブーフの城の櫓が、灰色の苔蒸した鋸壁の上に聳えて、今しもその周りを圍む森を離れた朝日にきら／＼輝いてゐるのを見るや否や、咄嗟に、自分の災難の原因がはたと胸に浮んだ。

「わしはこの森の盜賊や、浪士共に飛んだ濡衣を着せたわい」と彼は言つた、「こんな悪者共も彼等の組に屬するものだと思つたとは。いやこの邊の叢の狐共とフランスの荒れ廻る狼共とを混同したのと丁度同然だつたわい。さあ言へ、犬共め——貴様達の主人が狙つてゐるのは、わしの生命か、乃至は

財産か。わしと貴族アセルステインと、この兩人のサクソン人が、嘗ては我が種族の領土であつたこの國に土地を持つてゐるのが多過ぎるとでも云ふのか——そんならわし達を殺せ、わし達の命を取つて貴様達の暴虐のありつたけを盡せ、かつて我々の自由に對してしたやうにな。このサクソン人セドリックは、イングランドを救へない位なら、寧ろイングランドの爲めに死にたいのだ。お前の暴虐な主人に言へ、わしの願ひはたゞローエナ姫を立派に無事に還してくれる事だけだ。姫は女だ、姫を怖るゝには當らぬ、それに姫の爲めに進んで戦はうと云ふ者は、悉くわし達と一緒に死ぬるだらう。」警護の者は、矢張り前と同じくこの言葉に一言も口を利かなかつた、そしてその時にはもう城の門前に立つてゐた。ド・ブラシーは角笛を三度吹いた、彼等の近づいて來るのを見ると、壁の上に備へられた弩の射手共が急いで吊橋を下して、彼等を通した。捕虜達は警護の者に依つて否應なしに馬から引き下され、一室に連れて行かれて、遽しい食事を供されたが、アセルステインの他には、一人として口をつける氣になれなかつた。而もこの「懺悔王」(西サクソンの王エドワード)の末孫も自分等の前に並べられた立派な御馳走を腹一杯食べてゐる時間になかつた、と云ふのは、警護の者が彼やセドリックに、ローエナ姫を隔てた部屋に押し籠めなければならぬといふ事を告げたからである。抵抗しても無駄であつた、彼等とはある大きな部屋に隨いて行かねばならなかつた、その部屋には不細工なサクソン風の柱が立つてゐて、今も尙ほ我が最も古い僧院の、最も古い部分に見受けられる、あの食堂に似てゐた。

ローエナ姫は續いて供の者から引き離されて、鄭重にはあるが、矢張り姫の意向などはほとんど酌まれないで、隔たつた一室へ連れて行かれた。レベッカも同じく父から引き離されて心を痛めた。彼女の父は娘と引き離されたのを悲しむ餘り、金迄差し出して、娘を自分の傍に置かして貰ひたいと懇願したが無駄であつた。「卑しい不信者め」と一人の番人は答へた、「お前の休所を見たら、娘と一緒になどと言はなくなるだらう。」そして、それ以上彼は言はずに、年老つた猶太人を無理やりに他の捕虜とは違つた方へ引き摺り去つた。召使達は、念入りに體を探られ、武装を解かれた末、城中の別な處へ幽閉された。そしてローエナ姫はせめて侍女エルギサに册かれたなら、幾分の慰めを得られたかも知れなかつたが、それさへ拒絶されたのである。

そこで先づ第一にわれ／＼の關心に上るのは、あのサクソンの首領等がどうなつたかであるが、彼等の幽閉された部屋は、今こそ衛兵所のやうなものに使用されてはゐるが、その昔はこの城の大廣間であつたのである。それが今は遙かにつまらない事に用ゐられた、といふのは、當主が、自己の住居の便利や、安全や、美觀などの爲めに建増した數ある建物の中に、新しい立派な廣間を造つたからである。この新しい廣間の圓天井は以前よりも軽い優雅な柱で支へられ、ノルマン人がその頃既に建築に取り入れた、あのずつと上品で贅澤な裝飾が完全に用ゐられてゐた。

セドリックは過去を顧み、現在を思つて憤りの情に胸をふさぎながら、部屋中を歩き廻つてゐた、が友のアセルステインは相變らずの鈍感で、たゞいつもの忍耐と冷靜を缺き、眼前の不便の外には、何

事も意に介さぬ態であつた。而もその眼前の不便さへ今はさして感ぜぬらしく、たゞ折々セドリックが彼に興奮した激した口調で訴へると、それに勵まされて答へる位なものであつた。

「さうだ、」とセドリックは、半ば獨言の如く、半ばアセルステインに話し掛けるものゝ如く言つた、「父がトールキル・ウルフガンガーと宴を張つたのはこの廣間だつた、あの時はたしか、當時叛逆者トステイ(ハロルドの弟)に味方した諸威人を征伐に行く、勇敢な、不幸なハロルド(キリアム一世の征服前イ)を饗應したのだつたつけ。ハロルドが謀反した弟の使節に寛大な返答を與へたのもその廣間だつた。わしは度度父がその話をする毎に激したのを見たものだつた。トステイの使節を通した時、さしも廣いこの部屋が、王を圍んで血紅色の葡萄酒を痛飲する、高位のサクソンの諸將で狭い位だつた。」

「どうか、」とアセルステインは友の物語るこの饗宴の條にやゝ心を動かされて言つた、「晝には酒や馳走を少し持つて來る事を忘れないでくれ、ばい、が——今朝朝飯の時には息づく暇も殆んどなかつた。それに私は馬から降りて、直ぐ食事をとるのはどうも有難くない、尤も醫者はさういふ習慣を勧め

るのだが。」

セドリックは友のこの話の間に投げ込んだ言葉には無關心で、自分の話を續けて行つた。「トステイの使者は、周りの總ての人々の苦り切つた顔付にも怯めず、臆せず、廣間の中をつか／＼と進んで行つて、遂にハロルド王の玉座の前に平伏した。

「陛下」と彼は申し上げた、「御弟君トステイ様が武装を解いて、陛下に平和をお望みになれば、どん

な條件をトステイ様はお出しになるべきでせう？」

「兄弟の愛と、それから立派なノーザムバーランド伯となる事と、この二つだ、」と寛大なハロルド王は聲高く仰せられた。「けれど、若しトステイ様はその条件をお容れ遊ばしませば、その忠實なお味方ノルエー王ハロドラダ様には、如何程の土地を御譲與下されませうか。」

「『イングラントに七呎の土地(墓地を指す)を取らずぞ、』とハロルド王は言葉烈しくお答へ遊ばされた、『尤もハロドラダは大男だと聞き及んでゐるから、今十二時だけ許し遣はすも苦しくない。』

「廣間に歡呼の聲が響き渡つた、そして、間もなくイングラントに版圖を持つべきノルエー王の爲めに祝盃を擧げた。」

「私も彼の爲めに全心を籠めて乾盃することが出来たらうに、」とアセルステインは言つた、「何しろ舌が上顎にひつついてゐる始末だ。」

「裏をかゝれた使者は」と、セドリックは聞き手に何の興味もないに拘らず、益々活氣附いて語り續けた、「トステイ及びその味方に、不興な兄王の不吉な答を傳へようと退き下つた。遠いヨークの塔や、ダーエントの血腥い流れが、あの恐ろしい修羅場(スタンファアの戦)を見たのはそれからだつた、この一戦で實に剛勇無双な膽力を示したにもかゝらず、ノルエー王とトステイとが兩人共、その最も勇敢な家臣一萬と枕を並べて討死して了つた。が、この戦争に勝つた光榮の日に、サクソンの旗を揚々と翻してくれたその強風が、ノルマンの帆を脹ませて、その死活を決するサセックスの濱邊に吹き寄せようとは、一

體誰が思つたであらう？——ハロルド王がほんの僅かの日の間に、怒つてノルエーの侵略者に當てた七呎の地以上に、自分の王國を持たなくならうとは、誰が思つたであらう？——アセルステイン殿——ハロルド王の血統を引かれた貴方と、サクソン王家の非常に強い擁護者を父に持つたわしとが、先祖があんな盛宴を張つたその廣間で、悪者のノルマンの捕虜にならうとは、誰が思つたであらう？——「いや全く悲しい事である、」とアセルステインは答へた、「が、併し彼等とて相當の身代金を拂へば必ず我々を免すことであらう——兎に角我々を直きに餓死させて了ふのが彼等の目的であるわけはなからう、だが、もう正午であるのに晝食の支度をする様子の見えないのは一體どうしたのであらう。セドリック、窓を覗いて、午が廻りかけてゐぬかどうか一寸陽脚を見て下さい。」

「もうさうなつたかも知れない、が、わしはあの汚れた格子を見ると、時刻が過ぎたとか、過ぎぬとかいふやうな事柄以外の事を思ひ出さずには居られんのだ。あの窓が作られた頃は、我々の頑固な先祖はまだ硝子を作る術も、硝子を焼き附ける術も知らなかつた——ウルフガンガーの父は驕つた男で、ノルマンデーから一人の技術者を連れて參つて、神の授け給うた陽の金色の光を種々な異様な色合に分解して了ふこの新しい種類の紋飾で、自分の廣間を飾らせたのだ。この外國人が此處へ參つた時は貧乏で、乞食のやうで、へい／＼と追従言つて、家内中の一番賤しい内地人にも、直ぐと帽子を脱いだものだ。それが、歸る時には、贅澤で、高慢で、自分の貪慾な國民にサクソン貴族の素質ではあるが富んでゐる事を言ひ觸らした——あゝ、アセルステイン、これは祖先の質朴な風俗を失はなかつた

ヘンジストやその不撓不屈な同族の子孫によつて、昔疾くに知られたり、見ぬかれたりした馬鹿げたことなのだ。(大昔ヘンジストミホーサミがブリトン人を助けてビクト人を防ぐ爲めに大陸からインゲランドに航し、掃國するミインゲランドの富めるこみを盛んに吹聴した、サクソン種族の侵略もこの富の噂を聞いた爲めだ云ふ)我はこれ等の異國人を我々の心服の友、我々の信頼する僕と致した、我々は彼等の工匠とその技術とを借りて、勇敢な祖先が身を護るに用ゐた眞の質朴や剛毅を賤しんだ、そして我々はノルマンの双の下に斃れるずつと前に、既にノルマンの技術に依つて氣力を殺がれてゐたのだ。替澤な美味を愛する爲めに外國の征服者の奴隷となる位なら、我々の質素な食物を平和と自由とのうちに食べた方がどんなによかつたか知れぬ!

「今はどんなに粗末な食物でも奢りと思はねばならない、」とアセルステインは答へた、「そして、セドリック、午飯の時間さへお忘れになつて居られるらしい貴方が、そんな過ぎ去つた昔の事をさう間違ひなく心に留めて置くことが出来るとは不思議千萬である。」

「この男には食慾に關する事以外何を話したつて駄目なんだ!」とセドリックは獨り離れて苛々しながら呟いた。「ハーデイカニユート(ラムベスのオズゴッド・クラブの家で酒を飲みながら死んだ)の亡靈が、彼に取憑いたのだ、彼は盃に酒を満たす事と、鯨飲する事と、お代りを言ひつける事との外は何の楽しみも持つてゐない。——あゝ!」と彼はアセルステインの方を憐れむやうに見やりながら言つた、「あんな立派な體にあんな愚鈍な魂が宿らうとは! あゝ! インゲランドの回復と云ふやうな目論見があんな不完全な要の上で廻されねばならぬとは! ローエナ姫と結婚したなら、實際、姫のもつと氣高いもつと寛大な魂が、彼の内に

潜んでゐるもつと立派な性質を未だ喚び覺し得るかも知れぬ。だが、ローエナ姫も、アセルステインも、わし自身も、この残酷な掠奪者の捕虜となつて、而もこれは多分我々を放つて置けば、彼の民族が横取りした權力を危くしはしないかと感ずる爲めに、かういふ目に遭はせたらしいが、こんな境遇にゐる間はどうして姫と彼とを一緒にさせられようぞ?」

セドリックがかうした痛ましい回想に思ひ耽つてゐる間に、この座敷牢の扉が開いて、一人の配膳方が白い職掌を示す棒を持つて現はれた。この尊大振つた男が重々しい足取りで部屋へ入つて來ると、その後から四人の僕が馳走をのせた食膳を運び込んだ、アセルステインは、それを見、その匂ひを嗅いだだけで、もう今迄の一切の不自由は報償はれたらしかつた。給仕をする者は皆んな假面を被り、假装をしてゐた。

「これは何の假面狂言だ?」とセドリックは言つた、「お前達の主人の城に幽閉されてゐて、それでもまだ誰に幽閉されたか知らずにゐるわし達と思ふか。彼奴にかう言へ、」とこの機會を捉へて身を放免して貰ふ交渉を開かうと思ひながら、言葉を續けた、「貴様達の主人、レジナル・フロン・ド・ブーフにかう言へ、一體何ういふ理由があつて我々の自由を束縛するのか、とんと見當がつかないが、たゞ我々に金を出させて、己れの腹を肥やさうといふ不法な望みからとしか思はれぬとな。よいか、しかと傳言しろ、わし達は本當の泥棒の強奪に屈從すると同じ事情で彼奴の強奪に屈從するのだとな。そしてわし達がこれだけ出せば放免してよいと思ふだけの身代金を指定しろと言つてくれ、その身請金

が我々の身上に叶ふものなら立派に拂つてやらう。」

配膳方は何の答もせず、たゞ一寸頭を下げてただけであつた。

「してレジナル・フロン・ド・ブーフに言へ、」とアセルステインも續いて言つた、「わしは彼に命がけの決闘を申し込むと。わしらの解放後八日以内に、徒歩でもよし、馬上でもよし、何處か安全な場所、決闘をする事を申し入れるのだ。彼も本當の武士なら、よもや事態がかうなつては、辭退や逡巡はすまい。」

「御挑戦のことは、主人に申し傳へるでございませう、」と配膳方は答へた、「まあ、御勝手に召し上つて下さい。」

アセルステインの挑戦は餘り立派に發言はされなかつた、といふのは、口一杯頰張つて兩顎を一度に働かさなければならなかつたのと、生來口籠る方なのとで、口から出る大膽な挑戦の言葉を著しく、弱めたからである。それでも、彼のこの一言はセドリックに、友に氣概の甦つた確かな印として歓迎せられた。と云ふのは、セドリックはアセルステインの血統には尊敬を拂ひながらも、彼の今し方の無頓着さには、段々辛抱し切れなくなりかけてゐたからである。今やセドリックは挑戦の言葉を聞いたので、稱讚の印にと彼に眞心籠めて握手をしたのである。けれども、アセルステインが、「若し戦つて、こんな蒜澤山の吸物を出すやうな牢から出る時期を早める事が出来るものなら、フロン・ド・ブーフの如き男十二人とでも戦はう、」と言つた時には、セドリックは又も微かな哀愁の胸に湧くのを感じた。

併し肉慾の鈍感に後戻りしたのを知らすこの言葉を聞き流して、セドリックはアセルステインと差向ひに座を占めた、それから、アセルステインは食卓に何も並ばない中は自國の慘狀を思ふ爲めに食物の事を念頭から拂ひ退ける事が出来たのであるが、食膳が目前に並べられると、忽ち彼のサクソンの祖先の食慾が、その他の特性と共に、彼に傳へられてゐることを證明した。

けれどもこの二人の捕虜は食膳を餘り味はない中に、城門の前で鳴らされた角笛の音の爲めに、この食事といふ最も重大な仕事からさへ彼等の注意を攪き亂されたのである。その笛の音は非常に烈しく三度繰り返された。それはまるで魔城の前で退治の任に當つた騎士が——自分の呼ぶ聲に連れて廣間も塔も、射眼も鋸壁も、朝の霞のやうに吹き飛ばすといふその騎士が、吹いたのかと思はれる程激しかつた。二人のサクソン人は食卓から飛び上つて、窓際へと馳せ寄つた。が二人の好奇心はたゞ失望に終つた。といふのは、生憎どの窓口もたゞこの城の中庭を見下ろすだけで、音はその城の彼方から聞えて來たからである、併し、この呼び出しの音は重大なものであつたらしく、城内には忽ち恐ろしい騒ぎ聲が起つた。

(三十二)

わしの娘よ——わしの金貨よ——

おゝわしの娘よ！——

おゝわしの基督教徒の金貨よ！

裁判にかけてくれ！ 國法に照らして！

わしの金貨を、わしの娘を！

(「ヴェニス商人」)

サクソンの二頭目は、好奇心が満たされないので、未だ十分飽き足りない食慾の要求が再び心に起るや否や、元の馳走の席へ歸つたのである。が、この方は暫く措くことにして、次に我々はヨークのアイザックの尙ほ一層厳しい幽閉の方を一寸覗かねばならない。この哀れな猶太人は、城中の地下牢に、無造作に投げ込まれた。其處の床は地面よりも低く而も壕より低いので、非常に濕つぽかつた。日光は僅かに、捕虜の手の届かぬ遙か上にある一二の射眼から洩れて來るのみであつた。これ等の口は眞晝でさへ、ただ朦朧とした覺束ない光を通すのみであつたので、同じ城中でも他の場所が未だ晝の日の恵みを失はぬずつと前に、全く暗くなつたのであつた。周圍の壁には、躍起に脱走を試みる虞れにあつた前の囚人が繋かれた鐵の鎖や足枷などが、錆びたまゝ空しく懸つてゐた。その足枷の一組の環には、もとは人間の足であつたらしい朽ち崩れた二つの骨が、まるで誰か囚人になつたものが其處で死ぬるがまゝに放つて置かれたり、腐敗して骸骨に成り果てる迄手もかけないで置かれたりしたかのやうに、残つてゐた。

この恐ろしい地下室の一隅には、一つの大きな鐵爐が設けてあつて、その頂邊には、半ば腐蝕つた鐵の棒が渡してあつた。

この光景を一目見た者は、アイザックよりも剛氣な者でさへ必ず怖ぢ氣だゞずには居られなかつたらうが、當のアイザックは、恐ろしさの原因が差し迫つてをらず、而も有りさうに思はれる時に恐怖を感じたよりも危険が頭上にのし掛つてゐる時の方が却つて一層泰然としてゐたのである。愛獵家の言に兎は獵犬の牙に掛つて跪いてゐる時よりも追はれてゐるうちの方が遙かに苦しいものだといはれる。恐らくかうした譯からであらう。猶太人等は、何かにつけ恐怖を覺える事が頻りなので、身に振りかゝる凡ゆる暴虐の手に對し或る程度迄の覺悟が出來てゐるその爲め如何なる攻撃を受けようと、最も手酷い性質の恐怖から生ずる驚愕の念も起る事がないのである。それに又アイザックが、このやうな危険な場合に遭遇したのは決してこれが始めてはなかつたのである。従つて彼は經驗上から今度も亦以前のごとく獵人から獲物として救はれる(舊約聖書、詩篇九十一篇三節に「確かに神は汝を」獵人のわなより救ひたまふべし」ミあるによる)やうに立ち廻る事も知つてゐたし、又さうありたいとも望んでゐたのである。とりわけ彼には猶太人特有の、人に屈せぬ剛愎さがあつて、それにイスラエル人(猶太人)はその迫害者の要求を容れて、徒らに彼等を満足させる位なら、寧ろ權力や暴力で加へ得る最大の害惡をも不撓の決心を以て忍ぶと、屢々世に知られてゐるが、彼もその決心をもつてゐたのである。

この消極的な反抗の氣分を懷きながら、濕つた鋪石の床に脚が着かないやうに上衣を折り敷いて、

アイザックは地下牢の片隅に坐つてゐた。針金のやうに細い漏れ陽に仄かに見える、その腕組みをした手、纏れ亂れた髪や髯、裏毛の外套や高い帽子などは、若しレンブラント(オランダの画家、老人の肖像をよく描いた)をこの時代に在らしめたなら、恐らくこの有名な畫家に貴重な研究の一資料を供したことであらう。猶太人は殆んど三時間程、姿勢も崩さずに、凝と坐つてゐた、するとやがて、地下牢の階段の方に當つて、人の足音が聞えた。鐵棧を引く音がぎぎと鳴つた——耳門を開ける時、蝶番の軋む音がした、そして、レジナルド・フロン・ド・ブーフが、寺侍のサラセン奴隸二名を従へて、牢屋の入口に姿を現はしたのである。一生を公けの戦争に又私の不和や喧嘩に費して來た背丈の高い、筋骨の逞しいこのフロン・ド・ブーフは又自分の封建的權力を擴張する事には少しも躊躇しない男であつた。その面構へはいかにも彼の性格にふさはしく、そしてそこには人一倍狂暴な、人一倍兇惡な心情が強く表はれてゐた。その顔に残つた創痕は、これが普通の顔付の者なら、名譽ある剛勇の印として、それにふさはしい同情と尊敬とを招いたであらうが、この特別なフロン・ド・ブーフの場合には、却つて彼の面貌の犖犖さを増し、彼の態度の與へる畏怖の念を彌増すに過ぎなかつた。この恐るべき領主は身にびつたり合つた革の胴着を着てゐた、がその胴着は解れてゐた上に甲冑の染で汚れてゐた。武器と云つては、帶に吊つた短劍以外に何もつけてゐない、その短劍は右腰に下げた、がちや／＼鳴る鍵の束の重さに、よく釣り合つてゐた。

フロン・ド・ブーフに従ふ黒奴は、以前の派手な衣服を脱いで、粗末な亞麻布の胴着とずぼんに着換へてゐた。その袖は、屠殺者が屠牛場で仕事にかゝる時のやうに、肘の上迄捲り上げてあつた。どれも手に小さい籠を提げてゐた、そして地下牢に入ると、フロン・ド・ブーフが手づから扉の鍵を念入りに二重に下ろす迄、入口の處に立つてゐた。この用心を爲終へると、フロン・ド・ブーフは靜かに歩いて猶太人の處に近づいた。そして眼を据ゑて凝とアイザックを見詰めた、そのさまは丁度話に聞く猛獸が獲物を睨み竦ませるやうで、彼も亦眼光鋭く相手の體を射竦めようとするかのやうに思はれた。事實、フロン・ド・ブーフの險のある、惡意に満ちた眼は、この不幸な囚人に、幾らか今想像したやうな力を及ぼしたやうに思はれた。猶太人は口をぼんやり開けて、非常に恐れながら、この殘忍な領主を見詰めた儘坐つてゐると、この犖犖なノルマン人の凝視する毒々しい眼光の注ぐ限り、體が文字通りに震へ縮まつて行くやうに見えた、哀れにもアイザックは、怖ろしさの餘り、立つて挨拶しようと思つたのだが、立つ氣力も失せたばかりか、帽子を脱ぐ事も、哀願の言葉を口にする事さへも出來なかつた。それ程に強く彼は拷問と死とが身に振りかゝつてゐるといふ信念に、心を悩まされたのであつた。反對にノルマンの堂々たる體軀は一層擴大するやうに思はれた、それは丁度鷲が防ぐ力のない獲物に掴み掛からうとする時羽を立て、身振ひする姿にも彷彿してゐた。彼は不幸な猶太人が今、言はゞ出來るだけ狭い範圍に縮まつてゐるその片隅から三步内の處に立ち止つて、奴隸の一人に此方へ來るやうに合圖した。黒奴は命令通り進んで來て籠の中から大きな一對の秤皿と幾つかの分銅とを取り出して、それをフロン・ド・ブーフの足許に置くと、又引き下つて、仲間の者の恭々しく離れて立つてゐ

る處に歸つた。

これ等の者の立居は静かで嚴かで、宛で彼等の魂に恐怖や残忍の豫想か何かと振り懸つてゐたかのやうであつた。フロンド・ブーフは彼の不運な捕虜にかう言葉を掛けることによつて、自らこの場面を展開させた。

「呪はれた種族の中の最も呪はれた犬め、」その太い重々しい聲は地下牢の天井に物凄く響き渡つた。「お前にこの天秤が見えるか？」

不幸な猶太人は弱々しく「はい」と答へた。

「お前はこの天秤で銀貨一千ポンドを、ロンドン塔の標準度量衡(當時ロンドン塔はイングランド王の宮殿の一で、標準の度量衡を蔵して居た)通りに量つて、差し出さねばならんぞ、」と無慈悲な領主は言つた。

「おムアブラハム様！」と、猶太人は身の危難に我知らず聲を擧げた、「そんな要求をこれ迄聞いた人が世にございませうか——誰が一體銀貨一千ポンドなどといふ大金の事を、吟遊樂人の物語の中でもいゝ、聞いた事がございませうか——どんな人間の目がそんな寶の山を見る幸福を授かつたでございませうか——ヨークの城壁内は無論のこと、手前の家も手前の同族全部の家も残らずお探し遊ばしたとて、貴方様の仰しやるやうな多額の銀貨は、その十分の一も見附かりは致しますまい。」

「わしは無理は言はぬ。銀貨が不足ならば、金貨でも苦しくない。銀貨六ポンドについて金貨一マーカーの割で差し出せば、お前のその不信心な圖體が、これ迄お前の考へた事さへないやうな刑罰を受け

ずに濟むのだぞ。」

「どうぞお慈悲を！ 騎士様！」とアイザックは叫んだ。「手前は老耄で、貧乏で、弱い者でございませう。私のやうな者を負かしたつて、それが何の益になりませう——蟲けらを捻り潰すのは詰らぬことでございます。」

「いかさま、お前は老耄でも居らう、がそれはお前の恥よりも、お前に白髪頭になる迄暴利や不正を働かせて置いた者の愚さの恥だ——いかさまお前は弱いかも知れない、猶太人だとして、心臓も手もあれば、何時かは弱くならう——だが、お前の裕福なことは隠れもない事實だぞ。」

「騎士様、手前の信仰致します天地の神々様に、又世間一般に信じます天地の神々様に誓つてそんな事は——」

「偽りの誓ひを立てるな、」とノルマン領主は遮つた、「強情を張つて我と我が身の破滅を招くな、そんな事になる前に貴様を待つてゐる運命を悟つて、とくと考へて見い。わしがたゞ嚇す爲めにこんな事を申してお前の種族に生れついた卑劣な臆病を之幸ひに弄ぶなどと思ふと大違ひだ。お前が信仰しないものに誓ひ、我が教會が教へる福音書に誓ひ或は又教會に與へられた天國を開けたり閉めたりする鑰(新約聖書、馬太傳十六章九節に「又われ天國の鑰を爾に予へん、爾が地に於て繫る鑰は天に於ても繫き、爾が地に於て解くは天に於ても解くべし」とある)に誓つて、わしの意圖は深く、嚴としてゐる事を斷言して置くぞ。この牢獄はふざける爲めの處ではないのだ。お前より何千倍も有名な囚人が幾人もこの壁の内で斃り居つた、が、彼等の運命は少しも世間に知れたことはなかつたの

だ！ だがお前には長い時間のかゝる死刑が用意してある、それに較べると彼等のはまだしも贅澤なものだつたと言へる。」

彼は又奴隷に近く寄れと云ふ合圖をして、奴隷の言葉で別々に何か彼等に言つた。彼も亦もとパレスタインにゐたからで、かうした残酷も恐らく其處で覺えて來たのであらう。サラセン人共は籠の中から木炭と一對の鞴と、それから一個の油壺とを取り出した、一人が火打石と火打鋼で火を燧つと、他の者は既に述べた大きな錆びた鐵爐の中へ木炭を投げ込んで、それが眞赤に燃え上るまで鞴を吹いてゐた。

「こりやアイザック、」とフロンド・ブーフは言つた、「お前にあの燃え熾る炭の上に列んでゐる鐵棒が見えるか——あの暖かい床の上にお前を寝させるのだ、柔毛の蒲團の中にでも休むやうに着物を脱がせてな。あの奴隷の内一人にはお前の下に火の絶えないやうにさせ、今一人にはお前のやくざな手足に油を塗らさう、その手足の燻肉が黒焦げにならぬやうにな。——さあ、あんな焦げてゐる寢床に寝るか、それとも銀貨一千ポンドを拂ふか、二つに一つだ、お前にはもうそれより外に方法はないのだ。」

「そんな事は有りえないことでございます。」と、哀れな猶太人は叫んだ。——「そんなお心持が本當だなどといふ事は有りえません！ 天地のお慈悲深い神様は決してそんな残酷な事の出来る人間を造りなさないんです！」

「アイザック、そんな事を頼みにするな、それは飛んでもない間違ひだ。貴様はわしが——街が掠め荒

されて、何千といふ基督教徒が劍で、洪水で、又火で殺されるのを見て來たこのわしが、たつた一人の詰らない猶太人の悲鳴や、わめき聲に辟易して心を變へるとでも思ふのか。——それとも、法律も、國も、良心も何もなく、たゞ主人の意志あるのみの——主人が一寸目配せさへすりや、毒藥でも、火炙りの柱でも、懷劍でも、繩でもなんでも使つて見せる、其處の黒奴の奴隷共が、——情を乞ふ言葉さへ解しないその奴隷共が、情を知つてゐるとでも思ふのか。——ちつとは物を考へて見ろ、老耄奴！ お前のあり餘る財産を少し吐き出せ、基督教徒に高利を貸して取つたものを少し基督教徒に拂ひ戻せ、お前は奸智に長けた奴だから、直ぐに又萎びた財布を脹らますことが出來よう、だが如何な名醫でも、神藥でも、お前が一度この棒の上に手足を擡げたら、もう再び黒焦げになつた皮や肉を元に戻すことは出來ないのだ。さあ、お前の身代金を勘定して渡せ、そしてこんなに安い金で、一度入れば、二度と生きて還つて、その祕密を語る者の先づないこの地下牢から出る事が出来るのを悦べ。わしはもう餘計な事は言はない——お前の臍線金を出すか、肉と血を出すか、二つに一つだ、どつちともお前の選ぶ通りにしてやらう。」

「アブラハム様、ヤコブ様、我等が有らゆる御先祖様、手前を救つて下さいまし！」とアイザックは言つた、「私はどちらをも選ぶことが出來ません、私にはあなたの法外な要求に應ずるだけの財産がないのでございませうから！」

「奴隷共、此奴を引摺んで裸かにしろ、」と騎士は言つた、「そして猶太人の祖先共に、此奴を救へる

ものなら救はせて見るがよい。」

奴隸共は領主の舌よりも尙ほ多くを語るその眼や手の指圖を受けて、再びつか／＼と進み出ると、不幸なアイザックに両手をかけ、床から引つ張り上げて、二人の間に抑へつけた儘、残忍な領主の次の合圖を待った。哀れな猶太人は少しでも憐憫の色が動くかと、奴隸やフロン・ド・ブーフの顔を凝と窺つてゐた、併し領主の顔には、彼の殘虐行爲の前觸れであるその冷たい、半ば不機嫌のやうな、半ば嘲るやうな笑ひが現はれてゐた、又黒い眉の下に陰鬱にぎよ／＼してゐるサラセン人の獰猛な眼は白眼のところがいやに白い爲め、尙ほ一層意地悪い眼付となり、今にも展開しようとする場面の演出者或は俳優となることを厭がるどころか、寧ろその光景から心秘かに楽しみを豫想するやうな色さへ見せてゐた。猶太人は更に目を移して、自分が間もなく横たへらるべき、眞赤に燃えた爐の方を眺めやつた、それでも尙ほ迫害者に憐憫の情の起りさうな機會が見えないので、流石に彼の決心も破れた。

「一千ポンドの銀貨を拂ひませう——それはつまり、」と彼は一寸言葉を切つてから附け加へた、「手前の同胞に助けて貰つて拂ひませう、何分そんな聞いた事もないやうな金高は、猶太人の食堂の戸口で物貰ひのやうに乞はなければ、とても才覺出来ないのをごさいますから。——それで一體何時何處でお渡しすれば宜しいのをごさいますか？」

「此處でだ、」とフロン・ド・ブーフは答へた、「此處で手渡ししなければならぬ——此處で秤らなくてはならない——この地下牢の床の上で秤つて勘定しなければならぬ、——お前の身代金をしかと

手に入れないうちにわしがお前を手放すと思ふか。」

「それで、その身代金をお拂ひ申したら手前が放免されるといふその保証は何でございますか？」

「ノルマン貴族の一言だ、この貪慾な高利貸奴！ 貴様や貴様の種族全體の金銀よりも、混ぜ物の少ないノルマン貴族の誓言がその保証なんだ。」

「甚だ失禮ではございますが、領主様、」とアイザックは怯々しながら言つた、「手前はどうしてもして手前の言葉に少しも信頼して下さらない方のお言葉をすつかり信じなければならぬのをごさいますか？」

「お前はさうしない譯には行かないからだ、」と騎士は嚴然と言ひ放つた。「お前が今若しヨークにあるお前の寶藏にゐて、わしがお前の金錢の貸附を求めてゐるのなら、支拂ひの期日や、保證の抵當を指命するのはお前だらう。だがこゝはわしの寶藏だ。此處ではわしの方が有利の地位に立つのだ。そしてわしは二度とお前に自由を許す條件を繰り返して言つて聞かせはしないぞ。」

猶太人は切なげに唸つた。——「では、どうぞ手前を放免して下さいと共に、手前と一緒に道中した連れの人々も放免して下さいませ。あの人々は手前を猶太人だと嘲りました、けれども手前の頼りないのを憐れんで途中手前を助けるに暇取つた爲めに、飛んだ手前の御相伴をおさせしたのでございませ、それに、あの方々は何かで手前の身代金を助けて下さるかも知れませぬ。」

「彼方にゐるサクソンの野人共の事を言ふのなら、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「彼奴等の身代金は彼奴等の身代金で、又お前とは異つた條件に依るのだ。斷つて置くが、お前はお前自身に關する事

だけ心配すりやいゝんだ、他人の事に要らぬ世話を焼くな。」

「では、手前の負傷してゐる友達と一緒に放免されますだけでございますね？」

「猶太人如きにわしは二度も斷らなくちやならないのか、うぬだけの事に關つて、他人の事は捨て、置けといふに。——お前はお前の都合の宜い方を選んだ以上、今はたゞお前の身代金を、而も早速支拂ふと云ふ事しか残つてゐないのだ。」

「でもその金銀の爲めに手前の申します事をお聞き下さいまし、貴方様の……その……何も……構はずに得ようとなさるその金銀の爲めに——」此處で彼は残忍なノルマンの怒りを買ひはしないかと思つて、一寸言葉を切つた。が、フロン・ド・ブーフはたゞ笑つて、猶太人が口籠つた空を自ら満たした。

「わしの良心の咎めも構はずに、とお前は言ひたいのだらう、アイザック、さう言つたふが——これ、よく聞け、わしは無理は言はない。わしは取られる者の恨みなど少しも意にかけはしない。而もその取られる者が猶太人である場合にはな。アイザック、お前は無理やりに取り立て、ジャックス・フィッソドタレルの世襲財産を滅ぼした折、高利貸の吸血鬼と言はれたと申して、ジャックスを相手取つて裁判を起した時など、お前はわし程辛抱強くなかつたな。」

「私は猶太の法典にかけてお誓ひ申します、貴方様は剛勇でいらつしやいますが、あの事では瞞されなさいました。フィッソドタレルは、手前が手前自身のお金を請求したからと言つて、それも手前の部屋で短刀を抜いて切つて掛つて來たのでございます。支拂期日は踰越節(エホバが埃及人の長子を悉く撃殺して、而もイスラエル人の家々は

踰越して其兒を救つた夜を、記念する爲めに祝ふ猶太人の祭で、三月の満月の折に行ふ。舊約聖書、出埃及記十一章」でございました。」

「彼がした事などはどうでもいゝ、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「問題は、何時わしの方のは、わしの手に入るかといふ事なのだ——アイザック、何時金はわしの手に入るかな？」

「手前の娘レベッカに貴方様のこれなら大丈夫といふ護衛をつけて、ヨークまでお遣り下さいまし、騎士様、さうしますれば乗馬の者の歸り次第早速にその金を——」かう言ひさして彼は深い溜息を漏らした、がそれもほんの數秒だけで、又言葉を附け足した、——「金をこの床の上で數へませう。」

「其方の娘だと！」とフロン・ド・ブーフは吃驚したやうに叫んだ、——「アイザック、全くわしはもつと前にさうと知つたらよかつたなあ。わしは彼方にゐる眉の黒い娘は其方の妾だと思つた、それで、わしは昔の長老や、英雄の流儀に倣つて、彼女をブリアン・ド・ボア・ギルベール卿に侍女として進ぜたのだ。昔の長老や英雄などはかういふ事では我々に有益な手本を示したものだ。」

アイザックがこの無情な消息に驚いて揚げた喚き聲は圓天井をさへ打ち鳴らして、彼を捉へてゐた二人のサラセン人も思はず手を放した程吃驚させた。彼は體の自由になつたのを幸ひに、鋪石の床の上ゆかに身を投げて、フロン・ド・ブーフの膝にしがみ附いた。

「あなたの御要求なさつたものは何でもお取り下さいまし、騎士様——その十倍でもお取り下さいまし——手前を破滅させて乞食になさりたいのならなさいまし。——いや、あなたの短劍でこの手前を刺して、その爐でお焼き下さいまし、けれども、どうぞ娘ばかりはお助け下さいまし、無事に女の操

を完うさせて放免してやつて下さいまし！ あなたも、女の腹から生れたのでございますもの、頼りない處女の操は保たせて下さいまし——あの娘は亡くなつたラシエルに生き寫してございます、あの娘は死んだ家内の持つた六人の楔の内生き残つた一人つ見でございませう——あなたはたつた一つ残つてゐる慰めをも男やもめから奪ひ取らうとなさいませうか——あなたは父親にその生き残つた一人つ見も、こんな事なら亡くなつた母親と一緒に先祖の墓所に埋められてゐてくれた方がよかつたにと、あらぬ望みをおさせなさいませうか。」

「前以て、それと知つて居ればよかつた、」とやゝ面を和げてノルマン領主は言つた。「わしは、其方の種族は自分の錢袋以外に何ものも愛しないと思つて居つた。」

「成程、手前共は猶太人ではございませう、そんなにお考へなさるのには酷うございませう、」とアイザックは、明かに同情を寄せたと見えたこの機を逃さじと努めながら言つた、「狩り立てられた狐でも、昔まれた山猫でも、皆その子を愛します——如何に卑められ、迫害されたアブラハムの種族だとして、子の可愛さに二つはございませう！」

「やうでもあらう、アイザック、今後は其方に免じて、わしもさう信じよう——だが、今はそんな事は何の足にもならない、わしには出來て了つた事も、又次に來るべき事も、如何ともしがたいのだ、わしの一言は武士と武士と取交したものの、況してそれは十人の猶太の男女の爲めでも破る事はならぬわい。それに又、そちの娘がギルベールの物になつたとしても、娘の身に災害が及ぶと考へる必要はないではないか。」

「ありませうとも、あるに違ひありませんとも！」と、アイザックは苦悶に手を揉み絞りながら叫んだ、「一體何時侍どもは、男に残酷、女に恥辱以外の事を何か致した事がございませうぞ！」

「邪教徒の犬め！」フロン・ド・ブーフは眼を輝かして、そして恐らくは、幸ひ痲癩を起すにいゝ口實を掴んで喜んだのであらう、かう言つた、「ザイオンの殿堂を守護する聖い身分の人に向つて不敬の言を吐くな、それよりは、お前が約束した身代金を拂ふ算段でもせい、さもないとお前のその猶太人獨特の喉にこそ飛んだ災難が降つてくるぞ！」

「強盜め、悪黨め！」と、アイザックは暴虐者の侮辱に憤怒を以て應へて言つた、敵はぬと知りつゝも、今は如何しても抑へることが出來なかつたのである。「貴様なんかは何を拂ふものか——俺の娘を無事に立派に引き渡してくれないうちは、一文だつて拂ふものか。」

「これイスラエル人、お前は正氣でそんな事を吐くのか」と、ノルマン人は嚴然として言つた——「お前の肉と血には熱した鐵や、熱した油に堪へ得る魔力があるのか。」

「そんな事が何だ！」と猶太人は子を思ふ親の情で自棄になつて吐き出した、「有りつたけのひどい事をしろ、俺の娘は俺の血と肉だ、俺にとつては貴様の残忍に嚇かされてこんな手足などより千萬倍も愛しいものだ。金なんぞ何で遣るものか、遣るんなら、貴様のその強慾な喉に熔かし込んでやるわ——いや、一文だつて、ナザレ人め、貴様にやるものか、そんな事をして、貴様の一生に相當す

る重い天罰から救つてやつて堪るものか！ 俺の命が欲しけりや取るがいゝ、そして猶太人は、責苦に惱む眞最中でも、基督教徒をどうすれば失望させられるか知つてゐたと言へ。」

「それは今に分らう、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「お前の呪はれた種族の忌み嫌ふ、尊い十字架に掛けて、お前を火と鐵とのこの上もない苦しみに遭はせてやるから！ 奴隷共、彼奴を裸かにして、鐵棒の上に縛りつけろ。」

年老いた猶太人の弱々しい抵抗などはものともせず、サラセン人等は早や彼の上衣を引き剥いで、續いて彼を赤裸にして了はうとした、と丁度その時、城外で二度吹き鳴らされた喇叭の音が、この地下牢のやうな奥迄も響いて來たのである。そして直ぐその後からレジナル・フロン・ド・ブーフを呼び立てる高い聲が聞えた。流石兇暴な城主も、かゝる惡魔の如き所業を人に見られる事を憚つてか、奴隷共に合圖をして、アイザックに着物を打ちかけ、二人の奴隷共を連れてこの地下牢を立ち去つた。猶太人は後にたゞ一人残されて、一命の助かつた事を神に謝し、又娘の幽閉、さては續いて起つて來る運命の事を思つて悲歎に暮れた、彼の心は今や我身を思ひ、又子を思ふ情が最も強くなつて來たのである。

(二十三)

いや、こんなにやさしく精魂をこめて

情深い言葉で言ひ寄つても

御身をなびかすことが出來ぬとあれば、

わしは武士らしく劍の切つ先で

口説き申さう、

戀の常規に反き、お慕ひ申すぞ、

暴力に訴へても。

(「ヴェロナの二紳士」)

ローエナ姫の案内された部屋には、何處か原始的な風致と壯麗さがあつた。而も彼女が此處に入られた事は、他の囚人には與へられなかつた特別な尊敬を現はす印と見做してもよかつたのである。併しこの室は元來フロン・ド・ブーフの妻の爲めに造られたものであるが、その妻が死んで既に久しく、月日と共に朽ちては行くし、又手入を怠つたので、彼女の趣味から飾つた僅かの裝飾も次第に損ねられて了つた。綴錦は彼方此方に壁からだらりと下つて居り、その外の所では或は太陽に褪せ、或は星霜の經るまゝにぼろ／＼に裂け朽ちてゐた。けれども、荒れ果てゝゐるとは言へ、此處は城中で、サクソンの嗣姫を收容するに最もふさはしいと考へられた部屋であつた。そしてこの不埒な芝居を打つ役者共が各自の演ずべき役割の打合せを済ます迄、彼女は此處に唯一人残されて自分の運命を様

様に想ひ回らしてゐた。この役割はフロン・ド・ブーフ、ド・ブラシー、及び寺侍の三人で開いた相談會で極められた。彼等は、それ／＼この圖太い企てに、自分が特別に與つたところから割り出して主張した、めい／＼に都合のよい事を長い間激論した後、やつと彼等の不幸な囚人等の運命を決したのである。

それで、先づ自分の爲めに、今度の冒険を企てたド・ブラシーが、最初の目論見通りに、ローエナ姫を自分の手中に収めようとして、この部屋へ現はれたのは、丁度正午頃であつた。

尤もこの間の時間が悉く彼の仲間との相談に費されたわけではなかつた。ド・ブラシーは閑を見て、その頃の凡ゆるおめかしを盡して己が身邊を飾つたのである。彼の緑の長衣と假面とは今や投げ棄てられて了つた。長い房々した髪は高價な毛皮の外套の上に奇妙な恰好で垂れ下つてゐた。鬚は綺麗に剃られ、胴衣は脚の中程にまで達し、そしてそれを緊めると同時に重い劍を吊してゐた腰帯には、刺繡や黄金細工の浮彫を施してあつた。この時代の靴の贅澤な流行については既に前にも書いたが、モリス・ド・ブラシーの靴の尖は牡羊の角のやうに反り返つて振、その贅澤さといつたら、最も派手なものとも功名を競はれる程であつた。當時のしやれ者の服装は先づこんなものであつた。そして、今の場合では、着てゐる者の美しい容姿と立派な立居とによつて、その効果は大いに助けられてゐた、實に彼の風采は宮人の優雅と、武士の淡泊とを等分に兼ね備へてゐたのである。

彼は、黄金の飾針をあしらつた、聖マイケル(使首天)が魔王を踏まへてゐる圖を畫いた天鷲絨の帽子

を脱いで、ローエナ姫に一禮した。と共に、彼は物靜かに姫に椅子を指し示した、が、姫は尚ほも立つたまゝでゐるので、騎士は右手の手袋を脱いで、姫を其處へ案内する意を示した。併し、姫は頭を振つて、その申し出でた好意を斷り、さて答へた、「若し私が獄卒の看視を受けてゐるとしますれば、騎士様——今の場合私はさうとしか思へませんが——自分の受ける宣告を知るまで立つた儘でゐますのが、囚人の身に一番似つかはしい事かと存ぜられます。」

「おゝ！ 美しいローエナ姫、」とド・ブラシーは答へた、「御身は御身の捕虜の前にこそ居れ、獄卒の前などには居られません。して、御身がやさしくもこのド・ブラシーから期待なされますその宣告は、却つて、このド・ブラシーが御身のその美しいお眼から受けなければならぬのでございます。」

「私はあなたを存じません、」と姫は憤れる高貴な美女の誇りを以て、威丈高になつて言つた。「私はあなたを存じません——又、左様に不躰に馴々しく、戀愛詩人の讒言のやうな事を私に仰せられても、そんな事が盜賊の亂暴狼藉の言譯にはなりません。」

「美しい姫君、それもこれも御身の爲めでございます、」とド・ブラシーは同じ語調で答へた——「私の致しました事は孰れも皆御身のお美しい御縹緞の爲めでございます。私の致しました事は皆、私が心の女王に選み、眼の北極星に選みましたその人に應はしい尊敬からでございます。」

「繰り返して申し上げます、騎士様、私は貴方を存じません、それから、騎士の印の鎖や、拍車を身に着けたお方は、かやうに身の護りもない淑女の前へ、づか／＼出られるものではございません。」

「私が御身に知られてゐない事は、實際私の不運と存じます。でもまあ、このド・ブラシーの名は、試合場であれ、戦場であれ、吟遊樂人や傳令官が武士の功を讚美致しました時には、大抵その選に漏れたことがなかつたやうに存じます。」

「そんなら傳令官や吟遊樂人に貴方の讚美を任せて置かれた方が宜しうございませう。あなたの讚美はあなた御自身の口から聞きますよりも、あんな人々の口から聞く方が似つかはしいのでございませう。それで一寸お伺ひ致しますが、あんな人々の内一體誰が、今夜の忘れ難い勝利、僅かの臆病な男衆を供に連れた老人に對して贏ち得た勝利と、又無理やりに盜賊の城へ移された不幸な處女といふその戦利品とを、歌に唄ひましたり、試合の記録に留めたり致しますのでせう？」

「御身の仰しやる事は當つてゐません、ローエナ姫」と騎士はやゝ困惑した態で唇を噛みしめて、言葉遣ひも初めに使つたやうな、作へた慇懃さでなく、餘程自然な調子に歸つて言つた。「御身は御自分に熱情があまりにならないので、御自分の美で他人に狂熱を起させて置きながら、その狂熱を道理と思し召すことが出来ないのでございます。」

「どうぞお頼みでございますから、騎士様、左様な吟遊樂人が常に用ゐますやうな言葉はお止し下さいまし。それは騎士や貴族の口には似合ひません。慥かに貴方は、そんなありふれた言葉をお始めなさるからは、私に椅子に坐れとお強ひになるのでございませう、がそんな言葉はどの卑しい胡弓弾きでも、これからクリスマス迄品切れにならない程澤山仕込んでゐます。」

「高慢な娘御」とド・ブラシーは、自分の慇懃な話し振りもたゞ輕蔑を買つただけなので激昂して言つた。「高慢な娘御、其方がさうなら此方も高慢に出なければならぬ。ではお聞きなさい、私は其方の御人品に最もふさはしい仕方御求婚申したのです、ところが定まり文句や丁寧な言葉よりも、弓や斧で言ひ寄る方が其方の御氣質に適つてゐますのだ。」

「言葉の上の禮儀も、粗野の行ひを隠す爲めに使はれます時は、騎士の帶を卑しい下郎の腰に着けたのと變るところはございませぬ。確かに、その隠さうとなさるのでお惱み遊ばしてゐられるらしく存じます。——矢張り惡黨の衣裳や言葉を用ゐられた方が、惡黨の行爲を優しい言葉や振舞の假面で隠すよりも、貴方にお似合ひでございませう。」

「姫、よく御忠告して下さつた」とノルマン領主は答へた、「それでは大膽な行動の辯明に最もよい大膽な言葉で申して置きますが、そなたは二度と再びこの城を出ることは出来ない、若し出れば、モオリス・ド・ブラシーの妻として出るのだ。私は謀の破れることには慣れてゐない、いや又ノルマンの貴族ともあらう者が、結婚を申し込んで、立身させて遣らうといふサクソン處女に、一々綿密に自分の行爲を辯明する必要もあるまい。そなたは傲慢だ、ローエナ、それなればこそそなたは愈々わしが奥方に適してゐるのだ。そなたはわしと縁を結ばないで外にどんな手段で高い名譽と立派な地位に昇ることが出来るか？ わしと結婚しないでどうしてそなたは、サクソン共が自分の財産である豚と共に住んでゐる卑しい田舎屋敷の境界を逃れ、イングランドに於て、美を以て秀で力を以て威ある總て

の者の間に位置を占めることが出来よう、どれ程そなたが崇められるのが當然であり、どれ程わしがそなたを他人に崇めしめようとしても。」

「騎士様、そなたがさう輕蔑なさるその田舎屋敷は、私の幼い時分からの隠家でございました、そして實は私がそこを立ち退く時は、——萬一いつか左様な日が到來致しましたなら——私が育て上げられた住居や習はしを輕蔑しない方と御一緒に立ち退きたいものでございます。」

「姫、御事は事が餘りぼんやりしてこのわしには解るまいと思つてゐられようが、御身の底意はちやんと察してゐるのだ。だが獅子心王リチャードが何時か再び王座に戻られるだらうなど、夢想なされるな、まして王の嬖臣アイヴンホーのキルフレッドが、そなたを王の御前に連れて出て、寵臣の花嫁として歓迎されようなどは、ゆめ／＼と思ひなされるな。これが他の男ならこんな事を思ふと嫉妬の炎も燃えようが、わしの固い意志は中々そんな子供らしい、そんな望みのない感情で變へられはしない。姫、このわしの戀敵はわしの掌中に在るのだ。わしよりも恐ろしい、嫉妬心を懷いてゐるフロン・ド・ブーフに、その男がこの城中にゐるといふ祕密を明すも明さないのも、このわしが心一つにあると知られよ。」

「なにキルフレッド様が此處に？」とローエナは、蔑むやうに言つた。「それが本當だなどは、丁度フロン・ド・ブーフが身の程も知らずに、キルフレッド様と競ふのと同じでございます。」

ド・ブラシーは一瞬間ちつとローエナを見詰めてゐた。「そなたは本當に何も知らないのだな？ そなたはアイヴンホーのキルフレッドがああ猶太人の吊臺で運ばれてゐた事を知らなかつたのか。——聖墓を奪ひ還すべき偉い腕を持つた十字軍士には相應な乗物なんだ！」かう言つて彼は嘲るやうに呵々と笑つた。

「たとへあの方が此處に居られませうと、」ローエナは、抑へることの出来ない不安の悶えに震へながらも、強ひてさもないやうな口調で言つた、「何であの方がフロン・ド・ブーフの競争者でございますらう？ 騎士道の習ひに依りますれば、暫くの間の幽閉と、相當な身代金との外何の恐るべき事がございませう？」

「ローエナ姫、そなたも亦、女性に普通な思ひ違ひに欺かれて居られるな。自分達の美に關する競争以外には世に競争があり得ないと思ふやうな。世には戀の嫉妬同様、野心の嫉妬、富の嫉妬と申すものゝあることを御存知ないのか。此處の主、フロン・ド・ブーフは可なりのアイヴンホー領地に對して彼が主張する要求にキルフレッドが反對するので、まるで自分よりも深く青い眼の女に好かれてもするかやうに、キルフレッドを直ぐに、熱心に、そして無遠慮に、排斥するだらうといふ事を、そなたは御存知ないのか。だが、姫、私の頼みに笑顔をお見せ下さい。さすれば、私はかの怪我をした勇士が少しもフロン・ド・ブーフを恐れる事のないやうにする。さまなければ、そなたは、彼が決して同情を示す事のない者の手に渡つた時の如く、その死を哀悼することになるかも知れぬ。」

「どうぞ、あの方をお救ひ下さいまし！」と、ローエナは、戀人の身に差し迫つてゐる運命の恐ろしさ、今迄の剛毅な心もくづをれて言つた。

「救ふ事が出来る——救はう——これが私の心である、」とド・ブラシーは言つた。「そのわけは外でもない、ローエナ姫がド・ブラシーの花嫁となる事を承知してくれたなら、その姫の親族に——姫の後見人の息子に——姫の幼友達に、誰が手荒い事をしえませう？　が、彼の保護を得るには、そなたの愛といふ代價を拂はねばならぬ。私は自分の望みの有力な障碍となるらしい者の、幸運を助けてやつたり、悪運を防いでやつたりする程馬鹿ではない。そなたが、彼の爲めを思つて私にお盡しなされば、彼は安全なのです、——それをお厭やと仰せになれば、キルフレッドはこの世のものではございませぬ。そしてそなた自身もさう近々には自由の身とはなれますまい。」

「貴方のお言葉は、その無頓着な率直の中に、その言葉が表はす恐怖とそれから現はれるらしい恐怖と調和する事の出来ないものを何か持つてゐます。私は貴方の目的がさう悪いとも、又貴方のお力がさう大きいとも信じません。」

「それなら勝手にさう信じてゐるが、今に時が経てば自然とそれが誤りだとお分りにならうから。そなたの戀人はこの城中に傷ついて寝てゐる——御身の選ばれた戀人は、彼はフロン・ド・ブーフが野心よりも、美人よりも、もつと愛するものを手に入れようとするのを邪魔する者です。アイヴンホーの反對を永久に沈黙させるには、短刀の一突きでも、手槍の一刺しでも、事は足りる。いや、フロン・ド・ブーフがそんな大びらな所業をして名分が立たぬと恐れるなら、醫者に一服盛らせただけでい——部屋係りか、附添ひの者に彼の頭から枕を一寸外させただけでも宜い、さうすると今の體のキル

フレッドは、現在の體のまま、血を流さないで死に急がれるのだ。それからセドリックも亦——」
「それにセドリック様も亦、」とローエナは彼の言葉を繰り返して言つた、「私の氣高い——私の寛大な後見者！　あの方の御息の爲めとは申しながら、大事なあの方の事を忘れるやうでは、今かういふ憂目を見るのも當前でございませぬ！」

「セドリックの運命も亦、そなたの決心一つにある、」とド・ブラシーは言つた、「その決心のつかれるまで、私は暫く向うへ參つてお待ち申さう。」

ローエナはこれまで、この辛い立場にありながら、勇氣を奮つて、氣丈に我が身を守つて來たが、併しそれはこの危険を重大な差し迫つたものと考へなかつたからである。彼女の氣質は天性、骨相學者が美貌に相應しい、温和な小心な、そしておとなしい性向と考へる所のものであつたが、その後それは彼女の教育によつて加減され、言はゞ鍛へられたのであつた。凡ゆる人々の意志が、いやセドリック自身の意志さへ（他の者には全く專横で氣儘でありながら）彼女の望み通りになるのに慣れて來たので、彼女は、周囲の人々の習慣的な不斷の尊敬と服従から生ずる、あの一種の勇氣と自信を持つやうになつた。それで、彼女には自分の意志が人の反對を受けるなどと云ふ事は殆んど考へられなかつた、ましてそれが全く輕蔑的に取り扱はれるといふ事などは、到底有り得べからざる事と思はれた。

であるから、彼女の尊大と、他を支配する習慣とは、彼女の生來の性格上加へられた假りの性格であつた、そしてその假りの性格は、今彼女の危険、並びに彼女の戀人と保護者の危険に向つて彼女の

眼が開くに至つて、彼女から全く消えてなくなつたのである。そして彼女は自分の意志が、元はほんの一寸現はしても他から尊敬せられ、注意せられる習はしであつたのに、今は自分より有利の地位を占めてゐる、そしてその地位を利用する決心を固めた、強く、猛く、堅い心の人の意志と置き替へられたことを知つた時、彼女は彼の前に畏縮して了つた。

姫はまるで何處にも見出されない助けを求めざるやうに、邊りを見廻し、そして何やら二言三言途切れ途切れに口走つてから、天に向つて手を舉げ、抑へ切れない口惜しさ悲しさが一度にとつと胸に込み上げたのである。こんな美しい人間がこんな窮境に陥つてゐるのを平氣で見つてゐる事は到底出来なかつた。ド・ブラシーも、感動するよりは寧ろ當惑したが、矢張り動かされない事はなかつた。彼は事實、餘り深入りし過ぎて、今更引込みがつかなくなつてゐた。而も、ローエナの現在の状態では、どんなに口説いても、威嚇しても彼女を従はしめることは出来なかつた。彼は部屋の中を彼方此方と歩き廻り、或は空しく恐れ戦く處女に落ち着くやうにと勧めたり、或は自分の行動をどうしたものかと躊躇したりした。

彼は思つた——若し俺がこの力を落してゐる娘の涙と悲嘆とに動かされたなら、俺はあんなに多くの危険に遭ひ、ジョン親王やその陽氣な一味の者達の嘲りを買ふ源となつたあの美しい希望を失ふといふ事以外にどんな結果を収められよう？ 「而も」と彼は我と我が身に言つた、「どうやら俺は今演つてゐる役には向かないやうな性格を持つてゐる氣がする。俺はあんな美しい顔が、苦悶に歪んでゐる

ところも、又あの涼しい眼が涙に潤うてゐるところも見てゐる事が出来ない。いつそ姫が始めの傲慢さをずつと通してゐてくれればよかつた。それともこの俺がフロン・ド・ブーフのやうな鍛へに鍛へた無情な心をもう少し持つてゐたらなあ！」

これ等の思ひに振り動かされて彼はやつと不幸なローエナを慰め、未だそれ程絶望の果てに沈む必要がないのだと安心させることが出来た。が併しこの慰藉に努めてゐる最中にド・ブラシーは例の「遠方で鋭く吹き鳴らす途切れ勝ちの角笛」の音に遮られた。その音は又同時に城中の他の者共をも驚かし、それらの強慾な計畫や放縦な企てを遮つたのである。皆んなの中で、恐らくド・ブラシー程この邪魔を残念に思はない者はなかつたらう、何故なら、彼のローエナ姫との交渉が、自分の企圖を遣り通すことも、諦めることも、どちらも容易でないと云ふ程度にあつたからである。

こゝに於て(本章のこれより以下の文は、この本の最初の草稿になかつたのだが、後書き加へたものである)我々は無駄話の出来事よりも何かもつといふ證據を提供して、たつた今、讀者の前に展開された憂鬱な描寫を辯明する事を必要と思はざるを得ない。かの勇猛な領主等(ジョン王の専制に反対し、王をシテ大憲章に調印せしめた貴族達)が踏み留まつて王冠に反対してこそ、イングランドの自由はその存在を保たれたのである。それに、彼等自身がかういふ恐るべき暴虐者となつて、イングランドの法律のみか、又自然及び人間の掟に迄叛く亂暴狼藉を働くことが出来ようとは、考へるのも歎かましい事である。併し、あゝ！我々は小説そのものが當時の恐怖の實際の暗黒面に殆んど達し得ないといふ事を證する爲めには、たゞ勤勉なるヘンリ(ロバート・ヘンリ。スコットラ。の歴史家で「英國史」の著者)の著書から、彼が同時代

の歴史家達より蒐集したあの數多の文章の一節を引用しなければならぬ。

「サクソン年代記」(ノルマン征服前の英國史として權威あり)の著者の筆に成る、ステイーヴン王の御代、ノルマン血統の諸侯、諸城主の手に行はれた殘忍酷薄な所行に關する記述は、彼等が自分の情熱の燃えるまゝにしかねなかつた亂暴狼藉の有力な證據を供するのである。「彼等は哀れにも築城工事で貧しき民を苦しめ、又その工事が成ると、彼等は惡者共を、否寧ろ惡魔どもを城中に一杯入れた。而してその惡魔共は富裕と見ると男女を問はず引つ捕へて牢獄に投じ、殉教者でも未だ曾て受けた事がない程の殘酷な苛責を加へた。中には泥中に窒息せしめられる者もあり、中には足、頭又は拇指を括つて吊され、その下に火を燃やされる者もあり、中には頭を節のある綱で締めて、遂に腦迄も切れ込ませられる者もあり、又中には有毒、無毒の蛇、蟾蜍等の群がる獄中に押し籠められる者もあつた。」併し、讀者にこの記述の殘りを續けて讀む苦しみを與へるのは殘酷であらう。

斯る勝利の苦い果實の今一つの例として恐らくは引用出来る最も有力な一例として我々は、マティルダ皇后の身の上を擧げる事が出来る。皇后がスコットランドの姫君であり、後にエドガア・アッセリグ(エドワード懺悔王の世子であつたが、キリアム勝)の姪にしてイングランドの女王と獨逸の皇后とを兼ね、實に帝王の娘であり、妻であり、母である身分でありながら、若い頃教育の爲めにイングランドに在住中、ノルマン貴族の淫逸な追求を逃れる唯一の手段として、尼僧の假面を被らざるを得なかつたのである。この口實を彼女は、自分が墨染の衣を着けた唯一の理由として、イングランドの大僧侶會議の

席上で述べた。集つた僧侶はこの口實の有効なことと、この口實の根據となつた事情の顯著なことを認め、斯くしてその時代を汚してゐたあの恥づべき淫逸の存在に動かすべからざる、而して非常に注目すべき證據を與へたのである。彼等は言つた、キリアム王の征服後、そのノルマンの家來共は、あの偉大な勝利に心驕つて、彼等自身の邪惡な快樂の外は何の掟も認めず、たゞに被征服者サクソンの土地財産を掠奪した許りでなく、又最もみだりがましく彼等の妻や、娘の節操を侵した。それで、當時貴族の夫人や令嬢にとつては、神信心によつて尼寺に入るのではなく、たゞ人間の放縱極まる亂倫の行ひから自分の節操を救ふ爲めに、墨染の衣に身を裹んで、尼寺に隠れるのが普通であつた。以上は實に當時の眞實な世相であつた。

イードマー(僧侶にして歴史家)によつて記された、會議席上の僧侶の公言によつて公表せられた如く、當時はこれ程に放縱淫逸を極めたのである。で、我々は餘り信を置き難いワードー稿本(本書第一版の序文の中に「私の材料に就いては殆んど云ふべき事はない。その材料は主として希代のアングロ・ノルマン稿本で、アーサー・ワードーが餘程注意して自分の標の筆筒の三番目の引出しにしまひ込んで置いて、何人にもさはることを許さなかつたもの云々」があるを参照)の典據に基いて既に縷述し來つた、そしてこれからも縷述せんとする光景の可能性を辯明する爲めには、これ以上付け加へて云ふ必要がない。

(二十四)

獅子その花嫁に言ひ寄る如く

我れ彼女に言ひ寄らん。

(「ダグラス」)

今まで記し來つたやうな場面が城中の他の所で演ぜられてゐる間、猶太の娘レベッカは遠く離れた櫓の一室で自分の運命を待つてゐた。彼女は二名の變装した曲者に此處へ連れて來られた、そしてこの小さな部屋に押し籠められて見ると、彼女は一人の年取つた巫女の前にゐるのであつた。巫女は丁度、床の上で、自分のまはす絲車に拍子を合せるかのやうに、始終サクソンの歌を獨り口吟んでゐた。巫女はレベッカが入つて行くと、頭を擧げて、意地悪い嫉妬の眼付でこの美しい猶太の娘を睨んだ、老年で、不器量で、おまけに、逆境に陥ると、人は兎角、若い美しい顔の持主をかうした目で見たがるものである。

「あつちへ行くんだ、蟋蟀婆」と一人が言つた、「御主人の命令だ——お前はもつと綺麗なお客にこの部屋を明け渡さにやならんのだ。」

「ふん、恩返しにそんな御用か」と、醜い老婆は呟いた。「お前達の中で一言はれる侍も、私の一言が馬から下りさせたり、務めの手を止めさせたりした昔もあつたんだ。それが今ではお前達のやうな別當風情の命令にも、出て行かなきやならないのか。」

「アーフリード婆さん」と今一人が言つた、「ぐづぐづ理窟を言はずに、さつさと立つて行くがい。」

我が君の嚴命は二つ返事で聽かねばならんのだ。婆さん、お前も元は花盛りがあつたらうが、もうお前の御日様はとつくに沈んじまつた。今ぢや荒野に追出された老耄馬のポンチ晝そつくりさ——若い時にや跳ねもしたらうが、今ぢやよぼく歩きが精々といふ所だ——さあ、よぼく歩いて出て行け。「といつても不吉な犬共だ！」と老婆は言つた、「大小屋の中に斃つちまへ！鬼神ザンボックがわしの脚と脚とを引き裂かうと、この絲取棒の上にある麻を紡いで了はぬうちにはこゝを出るもんかい！」「その口返答は御主人に言ふがい、鬼婆め」とその男は言つて部屋から出て行つた。後にはレベッカが一人老婆と一緒に残されて、かうして厭やくながら、この老婆の前に居なければならなかつたのである。

「彼奴等はどんな惡魔の所業を企んでゐるだらう？」と老婆は折々横目遣ひに意地悪さうな眼付でレベッカを盗み見ながら獨語つた、「だが當てるのは譯はない——ばつちりした目、黒い髪、それに坊主が未だ黒い油で汚さないうちの紙のやうな白い肌(當時僧侶を除いては字を書くだけの學問のある者はなかつた。又僧侶は黒い油で羊皮紙に字を書いたものである)——ふん、彼奴等がこの娘をどうしてこんな淋しい櫓に連れて來たのか、當てるのは何でもなし、此處からはどんなに泣いても喚いても、聞える氣遣ひはない。丁度五百尋の地の底で喚くのと同じだらう。——これさ、綺麗な娘御、お前はもう此處では梟の外に相手がないのだよ、梟の鳴く聲なら、お前の泣く聲と同じ位に、遠くには聞えまい、そしてお前と同じ位に顧られないのだ。それに、見ればお前は異國の人らしいが」とレベッカの着物や帽子に氣づいて言つた、「お前さんは一體何處の國だ

え？——サラセン人かえ——それともエジプト人かえ——何故返事をしない？——泣くことは出来ても、喋ることは出来ないのかえ？」

「怒らないで下さい、おばあさん」と、レベッカは言った。

「もう言はぬでもいゝ」とアーフリードは答へた、「人は足跡で狐を知る。私は言葉で猶太の娘を知るのさ。」

「どうぞ教へて下さい、むりやり私を此處へ引張つて来て、末には私をどうしようと言ふのでせう！あの人達は私の異教徒である償ひに私の命が欲しいのでせうか。命なら喜んで捨てませう！」

「お前の命？ お前の命を取つたつて彼奴等に何が面白からう？——わたしの言ふ事をお信じ、お前の命はちつとも危かないよ。昔、サクソン貴族の一人の處女が、いやといふほどひどい待遇を受けたが、今にお前も、それと同じ待遇を受けるのさ。そして、お前のやうな猶太の娘が、もつといゝ待遇を受けぬからと言つて、不満を懐くだらうかね？ わたしを御覽——今のレジナルの父のフロン・ド・ブーフや、その家來のノルマン人共が、この城を襲つた頃には、このわたしはお前のやうに若くて、お前の二倍も綺麗だつたのさ。わたしの父と七人の息子は一階を奪はれ、ば二階、この部屋が奪はればあの部屋と、一生懸命に先祖譲りのこの城をよく護つたもんだつた——一室だつて、一階段だつて、その人達の血で沁らなかつた所はなかつたよ。その人達も死んだ——どれもこれも死んだ。そしてその體が冷たくならない中に、その血が乾かない中に、このわたしは勝つた奴等の餌食になり、慰

みものになつたのだ！」

「助かる道はございますまいか——逃げ出す手段はないでせうか」とレベッカは言った——「助けて下されば、澤山、澤山、お禮は致しますが。」

「そんな事をお考へでないよ、此處からは死の門を潜るより外に逃げ道はない。それも遅い、遅い。」鬼婆は白髪頭を振りながら附け足した、「その門がわたし達に開く前でも、もう遅いのだ——でも、わたし等と同じ因果なものも世に多からう、さういふ者をこの世に残して去るかと思へば、せめてもの慰めになる。御機嫌よう、猶太の娘！ 猶太人でも、猶太人でなくつても、お前さんの運命はどつち道、同じこつたらう、何しろ良心の咎めも感じなければ、同情の涙も流さない奴等が相手なんだからな。では、さやうなら。私の糸は紡いで了つた——お前の仕事はこれから始まるんだ。」

「ゐて下さい！ ゐて下さい！ どうぞ！」とレベッカは言った、「ゐて下さい、私をお呪ひなされても、お罵りなされても構ひません、ゐて下さい——あなたがゐて下さるだけで何かの保護になります。」
「マリア様がおゐで遊ばしたとて保護にやならない——あれそこに立つておゐるで、」と老婆は粗末な處女マリアの像を指しながら言つた、「マリア様にお前を待つてゐる運命が防げられるかどうか考へて御覽。」

彼女はかう言ひながら部屋を出て行つた、彼女の面相は一種の冷笑に歪み、その爲めいつもの澁面よりも一層憎々しくさへ見えた。彼女は部屋を出ると扉に錠を下ろした、そしてレベッカは、老婆がと

ぼく、さも辛さうに櫓の階段を下りて行く時、一足毎に段の急なのを呪ひ罵る聲をたしかに聞いた。レベッカは今や、ローエナ姫の運命にも増して恐ろしい運命を豫期しなければならなかつた。何故といふに、サクソンの世嗣姫に對してなら未だ多少の温情も禮儀も保たれるといふ事があつたらうが、日頃虐げられてゐる猶太民族の一人に對してはさういふ態度に出る筈が何うしてあり得よう？ 併しこの猶太の娘にはかういふ強みがあつた——彼女はあゝも考へ、かうも考へる癖を持ち、生來智力も優れてゐたので、身に振りかゝつた危険に向ふだけの覺悟が人並以上に出来てゐたのである。レベッカは既に幼時から氣丈な、觀察力に富んだ性格を持つてゐたので、父親がその邸内で見せびらかしたり、又は彼女が他の富裕な猶太人の家々で目撃したりした榮華や富貴も、彼女の目を眩まして、彼等が楽しんでゐる覺束ない境遇に甘んじさせることは出来なかつた。あの有名な饗宴に於けるダモクレスのやうに、レベッカは絶えず、そのきらびやかな華美のたゞ中で、たつた一本の髪の毛で、この民族の頭上に吊されてゐる劍を見成つてゐた。かうした反省は、若し他の境遇の下にあつたなら、傲慢に、横柄に、更に頑固にもなつたかも知れないレベッカの氣質を和らげて、更に健全な分別力を有つやうにしたのである。

父親の手本や指圖から、レベッカは、自分に近づく總ての人々に對して、鄭重に振舞ふことを教はつた。彼女には心の卑しさとか、それを現はす爲めに始終びく／＼してゐるやうなことがなかつたので、父の過度の追従に倣ふことは出来なかつたが、しかし彼女は立派な謙讓さで振舞つた。それは丁度一面には卑められる種族の娘として生れた惡運の境遇に従ひながらも、他面には心中、自分は宗教的偏見の爲めに謂れなく壓迫せられてゐるが、自分の眞價から言へば、今より高い位置を占める資格があるといふ自信を持つてゐたかのやうであつた。

このやうに、いつでも逆境を迎へる覺悟をしてゐた彼女は、既にその場合に處するに必要な剛毅の心を修得してゐた。彼女の今の立場は何よりもその畢生の沈着を必要とした。で、彼女は出来るだけ勇氣を奮ひ起した。

彼女の先づ第一に爲すべき事は、部屋を檢査する事であつた、が併しそれは逃亡の望みも、防衛の望みも殆んど與へなかつた。この部屋は抜け道もなければ、落し戸もなく、そして此處へ入る時潜つた扉で主屋と通じてゐる外は、全部この櫓の圓い外壁で圍まれてゐるやうに見えた。その扉には内側に門も横木もなかつた。たつた一つの窓が、この櫓の頂きを圍繞してゐる胸壁を設けた場所に向いて、開いてゐた。レベッカは一目それを見た時、逃亡の望みを幾分かそれに繋いだ、が間もなくそれがこの胸壁の他の何處とも聯絡のない事を知つた、此處は例の通り矢孔のある胸壁で固められた孤立した隅つこの張出櫓であつて、その胸壁には數名の射手が屯して櫓を護り、その城壁を矢玉で以て側面から防ぐことも出来るやうになつてゐたのである。

それで今の場合、消極的な堅忍と、偉大で寛容な人物に自然生ずるあの神に對する強い信頼との外には、何にも希望を繋ぐものはなかつた。レベッカは、神の選んだ民（「選ばれた民への約束」は元來猶太人へのそれを云ふのであるが、基督教徒はそ

れが自分達に當てはまるべき物のやうに解してゐる)に對する聖書の約束を如何に誤つて解するやうに教へられてゐようとも、現在を彼等の試練の時であると考へたり、又はザイオンの子が何時かは異邦人と同じ幸福な境遇に入らされるであらうといふことを信じたりする點では誤らなかつた。一方、彼女の周りの總ての者は、彼等の現状が罰と試みとの状態であるといふ事や、罪を犯さないで苦しむのは彼等の特別の義務であるといふやうな事を教へた。このやうに自分を不幸の犠牲と考へる覺悟が出来てゐたので、レベッカは早くから自分の身分を想ひめぐらして、多分遭はねばならない危険に出會つても怖れぬやうに心を馴らしてゐたのである。

けれども、一つの足音が階段に聞えて、やがて櫓の部屋の扉が靜かに開かれ、皆んなの不幸を起した、かの山賊の一人の装ひをした、丈高い男が靜かに入つて来て、扉をばたんと閉めた時には、この囚人はさすがに身を震はし、色を變へたのである。その入つて来た男は帽子を眼深に被つて、顔の半分を隠し、その餘りを覆ひ包むやうな具合に外套を着てゐた。彼はこの假裝で、驚き恐れてゐる囚人の前に突つ立つた、その様子が丁度自分で考へても恥づるやうな所業を何か決行しようと思つてもしてゐるやうであつた。而も、その服装は彼が曲者である事を現はしてゐたけれども、彼が何の目的で此處へ来たかを示すのに困つてゐるやうであつた。で、レベッカは、やつとの事で、彼の言ひたい事を推し測る餘裕を持つた。彼女は既に二個の高價な腕環と一本の襟飾とを外して置いた、彼の強慾心を満たせば、彼の好意を得る傳手になると定めて、急いで浪士らしいこの男の前に腕環と襟飾とを差し出した。

「これをお取り下さいませ、」と彼女は言つた、「そして、神様の爲めに、私と私の年取つた父とを憐れと思し召して下さい! この飾りは貴い品でございます、でも、私達を快く無事にこの城から出して下さる方の御恩に比べますと、ほんの詰らぬものに過ぎません。」

「美しいパレストアインの花よ、」と浪士は答へた、「この眞珠は東方獨特の光澤のある品ではある、が皓さではそなたの齒に遠く及ばない。その金剛石もびか／＼輝いてゐる、が、そなたの眼には敵はない。それにわしはこの荒稼業を始めてから、金よりも美人を選ぶといふ誓ひを立てたのだ。」

「そんな悪い事をなさいませぬ、」とレベッカは言つた、「どうぞ、身代金をお取り下さいませ、哀れと思し召して下さいませ! 黄金はあなたに樂しみを買つてくれませう。——私達を虐げる事は、あなたに悔いを齎らすことが出来るだけでございます。父はあなたの一番の高いお望みをも喜んでお飽かせ申し上げますでせう、そしてあなたは、御賢明なお振舞をなさいませぬなら、私共の分捕品で、浪士をよして、公民社會への復活も購ふことが出来ませう——過去の過ちに對する宥恕も得られませうし、又これ以上犯す必要のないお身にもなれませう。」

「その言葉は尤もだ、」と浪士はフランス語で答へた——恐らくレベッカがサクソン語で始めた會話をその言葉で續けて行くのがむづかしいと思つた故であらう、「だがお聞きなさい、ペーカの谷(エルサレムの谷、舊約聖書、詩篇八十四篇六節に「彼等はペーカの谷をよぎりて、それを泉となす云々」)に輝く百合のやうな少女よ! そなたの父はもう有力な煉金術者の手に渡つてゐる、その男はどうすれば地下牢の爐の錆びた鐵格子さへ金銀に變へられるかを知

つてゐるのだ。アイザック老人は、わしが頼むか、そなたが歎願するかして助けなければ、老人が大事にしてゐられるものを、みんな蒸溜し盡して了ふ蒸溜器にかけられるのは必定だ。身代金は愛と美とで拂はなければならぬ、その他の貨幣では受取らない。」

「そなたは浪士ぢやない、」とレベッカも彼が話し掛けたと同じ言葉で言つた、「浪士だつたら腕環と襟飾とを差し出すと言つたやうな申出を断りますまい。この國にゐる浪士は誰も、あなたが今お話しになつたやうな國訛りを使ひません。あなたは浪士ではなくて、ノルマン人——ノルマン人も、多分生れの貴い方でございませう——おゝ！ あなたの御行爲もさうであつて下さいまし、してその恐ろしい浪士の假面を脱ぎ捨て、下さいまし！」

「そして、さう旨く言ひ當てる事の出来るそなたは、」とブリアン・ド・ボア・ギルベールは、顔から外套を引き下げながら言つた、「本當のイスラエルの娘ではない、若さと美しさを除き、何處から云つても、本當のエンドルの巫女(エンドルはペレスタインの村落。昔サウル、ペリシテ最後の決戦の前夜この村にゐる巫女を訪ねて種々教を乞うた。——舊約聖書、撒母耳前書二十八章全部)だ。わしは浪人ぢやない、美しいシャロン(バレスタイン西部の沃野)の薔薇だ。してわしは、眞珠や金剛石をそなたから剃ぎとるところか、そんな飾りがよく似合ふそなたの頸や腕にかけて上げたい者なのだ。」

「私の財産でなければ、何をあなたは私から得ようとなさるのでございませう？」とレベッカは言つた——「あなたと私との間には何にも共通したところがございませう——あなたは基督教徒——私は猶太の娘でございませう。——私達の結婚は、基督教會の掟にも、猶太教會の掟にも反して居ります。」

「成程、さうであらう、」と寺侍は笑ひながら言つた、「猶太の娘と結婚する？ 飛んでもない！ それがシバの女王(ソロモンを訪ねた南アラビヤの宮んだ女王)であつても駄目だ！ まあお聞き、それに、可愛らしいザイオンの娘よ、たとへこの上ない基督教徒の王様が、そのこの上もない基督教徒の姫御前に持參金としてラングドック(南フランスの昔の一國)を附けて下さると云つても、わしはその姫と結婚出来ぬ身なのだ。わしは、今そなたを愛するやうに、戀人として愛するより外には、如何なる少女も愛する事はわしの誓ひに背くのだ。わしは寺侍だ。わしの僧團の十字架を御覽。」

「今のやうな場合でも、あなたはその十字架に頼るお氣なのでございませうか。」

「たとひわしがさうしようと、それはそなたに關係はない、そなたは神聖な我々の救ひの道の印しるしを信ずる者ぢやない。」

「私は祖先が教へた通りに信じてゐます、」とレベッカは言つた、「神様、たとへ間違つてゐても私の信仰をお許し下さいますようお祈りいたします！ 併し騎士様、あなたが騎士としての、又宗教家としての、あなたの誓ひの中で一番厳かなものを今にも破らうとしてゐらつしやる時でさへ、あなたが最も神聖だと信ずるものに、躊躇なくお頼り遊ばす時、一體何があなたの物ですか。」

「そりや眞面目な尤もな説法だな、おゝシラクの娘！」(經外典——典據の疑はしい十四篇の名、元は舊約聖書中には彼のお説法は偽經のやうにろくなものでない。嘲つたのである)と寺侍は答へた、「だが優しい牧師さん、そなたはそなたの狭量な猶太人の偏見に目が眩まされて、我々の高い特權が分らないのだ。結婚は寺侍の方

では永久の罪なのだ、が併しそれより小さい失錯(女の操を犯す意を含む)ならどんなことをわしが爲出来さうと、今度の寺侍團長會議で直ぐに恕ゆるされたらう。帝王中の最も賢い王(「最も賢い王ソロモン」も、その父)でも、有名な手本を示した、その父でも、我々ザイオンの御堂の貧弱な兵共つはものがその御堂を護るに熱心なところから得た特權以上に、廣大な特權を求めはなさらなかつた。ソロモンの殿堂の守護者はソロモンの範てほんに倣なまつて免許ゆるしを要求してもよからう。

「あなたが若し、たゞ御自分の放縱と不身持との言譯をする爲めに、聖書を讀み、聖徒の傳を讀まれるのなら、あなたの罪は、最も有益な、なくてはならぬ藥草から毒を絞しぼり取る者の罪と同じでございます。」

寺侍の眼はこの非難の言葉に嚇と燃えた——「よつく聽け、レベッカ。わしはこれ迄まぎ優しく物を言つてゐたが、今こそわしは征服者の言葉を遣ふぞ。そちはわしが弓矢に掛けて手に入れた獲物だ。——何處の國の掟おきてによつてもわしの意志に従はねばならぬ獲物だ。わしはわしの權利を一步も譲らない、わしが頼んで見ても、ねだつて見ても、そちが厭いやだと云ふものを暴力で取るのもいとはぬ。」

「お退りなさい、」とレベッカは言つた——「お退りなさい、そしてそんな恐ろしい罪を犯さうとなさる前に私の言ふ事を一言お聞き下さい！如何にもあなたは私の力に打ち勝つ事が出来ませう、神様は女を弱く造られて、その保護を男の義侠ゆたに委ね給うたのですもの。併し寺侍様、私はヨーロッパの果てから果て迄あなたの極惡無道ごくあくな事を觸れ廻ります。基督教徒の同情なまけに訴へるのが無駄なら、私は彼等の

の迷信に訴へませう。どの寺侍團長會議にも——あなたの僧團のどの僧會にも、あなたが異端者のやうに猶太女に邪淫の罪を犯したといふ事を知らせてやります。あなたの罪を聞いて身震ひしない人でも、猶太の娘を附け廻す程、あなたが胸の十字架けがを潰したことは呪はしく思ふでせう。」

「猶太の女よ、そちは頭の鋭い奴だ、」と寺侍は答へた、彼女の言葉が眞實であるといふ事や、自分の僧團の掟は、自分が今追求してゐるやうな情事を、斷然嚴罰に處するといふ事や、又或る場合には免職にさへするといふ事をよつく承知してゐたのである——「そちは頭の敏い奴だ、」と彼は言つた、「だが、この城の鐵壁外に聞かさうとなら、そちの嘆聲は餘程高くなければならない、がこの中に聞かさうとなら、それも無駄だ、此處では不平の聲も、歎きも、正義に對する訴へも、助けを呼ぶ聲も皆んな様に靜かに消えて了ふのだ。そちを救ふ途みちは唯一つだ、なあ、レベッカ。そちの運命に従へ——わし等の宗教に歸依するがいゝ、さうすれば多くのノルマンの貴婦人が榮華の點でも、美しさの點でも、御堂の守護者中第一の槍の名手の思ひ者には劣る、といふやうな身分にそちはなれよう。」

「私の運命に！」とレベッカは繰り返した——「お、神様！どんな運命に？——あなたの宗教に歸依する！——してそんな悪者を隠かくまふのはどんな宗教かしら？——お前が寺侍中第一の槍の名手！——腰拔武士！——破戒僧！——私はお前に唾を引つ掛けてやる、お前なんか何だ！アブラハムの神様は、お約束(神がアブラハムに彼の子孫が選ばれた民に)通りその娘に逃道にすみちを開けて下さつた——この邪惡の深淵ふちからでも！」

かう言ひながら、彼女はいきなり張出櫓に續く格子窓を開き、あつといふ間もなく、胸壁のとつばしに突つ立つた、下は恐ろしく深く何一つ目を遮るものもない。彼女はこれ迄全く身じろぎもせず立つてゐたので、よもやさうした絶望的な事をしようとは夢にも豫期しなかつたボア・ギルベールは、彼女を遮る暇も、引き止める暇もなかつた。彼が進み寄らうとすると、レベッカは叫んだ、「高慢な寺侍、近寄つて来るな、それとも勝手に進むか！ 一歩でも近寄ると、私はこの絶壁から飛び下りる。お前の獸慾の犠牲などにならないうちに、體をあの中庭の石に打つけて、粉微塵に砕いて了ふんだ！」

レベッカはかう言ひながら、手を合せて天の方に延ばした、それは恰もこれを最後に身を跳らす今の際に死後の冥福を祈るが如くであつた。寺侍はたじろいた、これまで決して同情の爲めにも、悲嘆の爲めにも動かされなかつた決心が、レベッカの勇氣を讚美する心には動かされたのである。

「降りて来い！」と彼は言つた、「無鐵砲な娘！ 大地、大海、大空に誓つて、そちの氣に障るやうな事は決してしない。」

「お前の言葉は信じられない、」とレベッカは言つた、「お前は私にお前達、寺侍團の諸徳を評價する方をよく／＼教へてくれた、ふん、よく誓ひを守つたね、でもたかゞ哀れな猶太娘の操を破るか破らないかのことぢやないか、多分今度の寺侍團長會議でお前さんに罪障消滅の宣告を與へるだらうよ。」

「そちはわしを誤解してゐる、」と寺侍は熱意を籠めて叫んだ、「わしはわしの名にかけて——この胸の十字架に掛けて——腰の劍に掛けて誓ふ——先祖からの舊い紋章に掛けて誓ふ、わしはそなたに如何な危険も斷じて加へない！ そなたの爲めではなくとも、そなたの父の爲めに我慢しろ！ わしはそなたの父の味方とならう、そなたの父はこの城中に有力な味方が要るだらう。」

「おゝ！」レベッカは言つた、「私もその事は知り過ぎる程知つてゐる。その言葉を信じてもよいものだらうか。」

「若し今後、わしに就いて苦情を言ふべき筋があつたなら、わしの武器を逆まにしてもいゝ、わしの名が汚れてもいゝ、」とブリアン・ド・ボア・ギルベールは言つた、「多くの掟、多くの誠めをわしは破つた、が約束だけは一度も破つたことはない。」

「ではそこ迄のところはあなたを信じませう、」とレベッカは言つて、胸壁の縁から下りた、が併し未だ出狭間(當時はこれをマチコールと呼んでゐた)の一つにびつたり寄り添つて立つてゐた。——「私は此處に立つてゐます、」と彼女は言つた。「あなたはそのまま、そこにゐて下さい、今私の方へ一歩でも近づかうとなさるなら、この猶太の娘は、自分の操を寺侍に委すよりは、寧ろ魂を神様にお任せするといふ事をお見せするばかりですから！」

かう言つてゐる間、彼女の面の表情に富んだ美しさと、非常によく釣り合つた彼女の高く固い決心は、彼女の様子、振舞に、人間のものとも思へぬ威嚴を添へるのであつた。彼女はかくも急劇な、かくも恐ろしい運命に逢つても、眼光も衰へねば、頬の色も失せなかつた、いやそれどころか、自分は自分の運命を左右することが出来る、思ひの儘に汚辱から死へと逃れる事が出来るといふ考へは、頬に尙ほ一

層濃い紅色を、眼に尙ほ一層の輝きをさへ與へたのである。流石自負心の強い元氣なボア・ギルベールも、これまでかくも雄々しい、犯し難い美女を見たことがないと、心竊かに感嘆したのであつた。

「仲直りをしようぢやないか、レベッカ」と彼は言つた。

「仲直りがなさりたいのなら仲直りも致しませう」とレベッカは答へた——「仲直りも——ですが、二人の間にこれだけの間を置いて。」

「もうわしを恐がるには及ばないよ。」

「私はあなたを恐れは致しません。落ちれば誰だつて生きては居れない程高い、この目も眩むやうな塔を造つて下すつた方に感謝致します——その方に、それから猶太の神様に感謝致します！ あなたを恐がりは致しません。」

「そなたはわしを誤解してゐる、本當に、そなたはわしを誤解してゐる！ わしは生れつきから、そなたが見るやうに、冷やかな、我儘な、情けを知らぬ者ではない。わしに酷薄といふものを教へたのは女だつた、だからわしは女にそれを加へて來たのだ、だがそなたのやうな女にはなかつた。レベッカ、聞いてくれ——このブリアン・ド・ボア・ギルベール位自分の戀する婦人に心を捧げて、その女の爲めに槍を手にした騎士は一人もなかつたのだ。その女の父は小さい領主で、毀れた塔と、實らぬ葡萄畑と、二三哩四方位みのポルドーの瘠せ地ランデ（フランスの西部、ポルドーの附近の低い砂地の沼地）との外は、なんでも自分の領地の事を自慢にする男だつた。そんな父の娘と生れた彼女の名は武術の行はれる處では何處でも知

られてゐた、持參金として州一つを持つ程の多くの貴婦人の名よりも廣く知られてゐたものだ。——さうさ、」と彼は、遽かに活氣づいて、レベッカの前にゐる事も全く忘れ果てたやうに狭い露臺をあとこち歩きながら語り續けた。——「さうさ、わしの武勇、わしの冒険、わしの熱血、それ等はアデレイド・ド・モントマールの名をカスティル（當時一八九四年一王國をなした西班牙の一方）の宮廷からビザンチウム（當時の東ローマ帝國の首都）の宮廷迄轟かせたものだ。そしてその揚句どういふ報酬をわしは得たと思ふ？——わしが勞苦と血潮で購つた高價な名譽を得て歸つて行つて見ると、その女は、其奴の詰らぬ領地外には少しの名前も聞えてゐないやうな、ガスコン（フランス南の部の一地方）の郷士と結婚してしまつてゐたのだ！ わしは本當にその女を愛してゐた、わしは女が誓ひを破つたことに對して手酷い復讐をしてやつた！ が、併し、わしにした復讐は、わしの身に返つて來た。その日からわしは塵の世とその數々の羈絆（きづな）とから離れて了つたのだ。言ひ換へてみるとわしの男盛りも家庭の樂しみを知つてはならない——情愛深い妻に慰められてはならない——老年になつても家庭の樂しみを知つてはならない——わしの墓は孤獨でなければならず、子孫は一人としてわしの後に残つて、ボア・ギルベールと云ふ古い名前を傳へてはならないといふことになつたのだ。わしは自己活動の權利、獨立の特權を捨て、一切を僧院長にお任せ申してゐる身だ。寺侍は奴隸といふ名こそなければ、總てに於て奴隸だ、土地も財産も持つ事がならない。たゞ他人の意の儘に、生き、動き、呼吸をするのだ。」

「あゝ！」とレベッカは言つた、「どんな利得がそんな絶對の犠牲を償ふことが出來ませう？」

「復讐の力だよ、レベッカ、」寺侍は答へた、「それから功名心の満足への希望だ。」

「人間にとつて一番貴い権利をお抛げ棄てになるにしては悪い償ひでございます。」

「さうは言ふな、娘」と寺侍は答へた、「復讐は鬼神への御馳走だ！ して僧侶共が我々に言ふ通り、若し、鬼神が復讐を獨占したなら、それは鬼神が復讐をたゞの人間共に占有させて置くには餘りに貴い楽しみだと思つたからだ。——それから功名心？ それは天の幸福（悪天使が天國より墮落した事實を暗示する。舊約聖書、以賽亞書十四章十二節に「あしの子明星よ、いかにして天より墮ちしや、もろくの國をたふし、者よ、いかにして研られて地にたふれしや」）とありて、次の節にその原因を功名心に歸してゐる）をさへ擾す事が出来た誘惑なのだ。」

——彼は此處で一言葉を休めた、それから又附け加へて言つた、「レベッカ！ 不名譽よりも死を選ぶ事の出来る女は、誇りの高い、そして強い魂を持つてゐるに相違ない。そなたはわしの物でなくてはならない！——いや、驚くな、」彼は更に言ひ足した、「それはそなた自身の得心の上で、而もそなた自身の條件通りでしなくてはならない。そなたは帝王の玉座から見渡されるよりもつと廣い希望の原野をわしと共に歩む事を承知しなくてはならない！——答へる前にわしの言ふ事を聞いておくれ、斷る前によく判斷しておくれ、——寺侍は、そなたが先刻言つたやうに、自分の社會的權利、自由行動の力を失ふのだ。併し玉座も既に震ひをのゝかされる程の強大な團體の一員となり、手足となる、——丁度海に落ちるあのたつた一滴の雨が、岩を掘りくづし、王の艦隊を巻き込む、あの抗し難い大洋の個々の部分となるやうに、畢竟この強大な團結こそかうした大海なのだ。わしはこの強大な團體の詰らない一員ではなくて、既に首領の一人である、だからわしが何時かは大長老の采配を握れるといふ

功名心を抱くのも無理はない。王の頸根に足をかけるのはひとり御堂の取るにも足らぬ兵だけではないあるまい——麻の草鞋を穿いた僧でさへ亦さうする事が出来る。具足に身を固めたわし等の歩みはきつと王の玉座にまで登らずにはゐなからう——彼等が握る笏はきつと彼等の籠手にもぎ取らして見せるぞ、そち達の空しく待ち望んだメシア（猶太人は救世主出で、ダヴィアの玉座を復興し他國に離散してゐる猶太人を再び強大な國民にするを信じたのである）の治世も、わしの功名心が目ざすやうなあんな力をそなたの離散した種族に與へはしない。わしはその功名心を共にすべき同種の魂ばかりを求めて來た、そしてわしはそなたの中にさういふ魂を見附けたのだ。」

「あなたはそんな事を猶太人の一人に向つて仰しやるのですか、」とレベッカは言つた、「まあ考へて御覽なさい——」

「二人の信條の相違を言ひ張つて、それをわしへの答とするのか、それはおよし、我々の秘密結社内では左様なお伽噺めいた事は嘲笑つて問題にしないのだ。我々の開祖達のたはけた行ひに、何時までも目を眩まされてゐると思つてはならない。彼等は人生の凡ゆる喜びを斷絶して、餓ゑや、渴きや、疫病や、或は蠻人の劍などで、死に瀕しつゝも有つ殉教者の楽しみを獲ながら、他面、迷信の眼にのみ價值のある瘠せ土の曠野を守らうと空しく努めたのだ。だが我々寺侍團は直ぐにもつと大膽な、もつと廣大な見解を採つて、我々の犠牲に對して、もつといふ辨償を見出した。歐羅巴の凡ゆる國々にある我々の廣大な領分、凡ゆる基督教國から武人の精英を我々の仲間誘ひ入れる因となる我々の高い武名——これ等は種々の目的に捧げられてゐるのだ、その目的と云ふのは敬虔な開祖が夢にも想像し

なかつたもので、そして我が寺侍團に、舊臭い主義から歸依して、その迷信の爲めに、唯々諾々我々の道具に使はれるやうな弱い人間共の等しく知らないものである。だが、わしはこれ以上我々の機密を明かしたうはない。丁度喇叭が鳴つてゐる、あれは何かわしに用事があるといふ合圖かも知れない。わしの言つた事をよく考へて置いておくれ。——左様なら！——わしは威嚇した亂暴を許せよとは言はない、あれもそなたの性格を發揮させる爲めには必要だつたのだ、黄金は試金石に當てゝ見て、やつと分るものだ。わしは直きに歸つて來て、又とつくりそなたと相談しよう。」

彼は再び櫓部屋に入つて、階段を下りて行つた、後に残つたレベッカは、不幸にも極悪人の堂中に陥つて、その狂ほしい野心を聞き、たつた今その身を曝した死の光景の恐ろしさにも劣らず、恐怖の念に打たれたのであつた。レベッカは櫓部屋に入ると、先づヤコブの神の自分に與へた御加護を深く謝し、又この先きも、自分の爲め父の爲めに加護あらん事を天に祈るのであつた。その祈りを捧げた時、今一つの名前が何時の間にかその中に交つてゐた——それは武運盡きて、血に涙いた敵の手中に陥つたあの負傷した基督教徒の名であつた。が彼女ははつと胸に感じてその思ひを止めた、それはまるで、天の神に祈りを捧げてゐる時でさへ、その人の運命と自分の運命とが何の結合も持ち得ない人——ナザレ人であり、自分の信仰に敵同志である人——の思ひ出を自分の祈りの中に交へたかのやうであつた、併しその祈りは最早口から出てゐた。それに又、彼女は自分の宗派の凡ゆる狭量な偏見を斥けて、それを取り消さうとも望まなかつたのである。

(二十五)

生れてこのかた見た中の、

一番分りにくい筆蹟！

(「屈辱を忍んで勝利を得る」)

寺侍が城中の廣間に着いて見ると、其處には既にド・ブラシーが來て待つてゐた。「貴方の口説き落しも」とド・ブラシーは言葉をかけた。「今のけたまはしい呼笛で、私同様、矢張り妨害されたことでせうね。だが、貴方はこんなに遅く残り惜しげに參られたところを見ると、どうやら私などよりは上首尾に參つたらしいですね。」

「では、貴方のサクソンの世嗣姫の口説き落しは不首尾だつたのかね、」と寺侍は言つた。

「本當に、」とド・ブラシーは答へた、「ローエナ姫は私が婦人の涙を見るに耐へないと云ふのを聞いたことがあるに相違あるまいて。」

「そんな事はお言ひなさるものぢやない！」と寺侍は言つた。「傭兵團の隊長ともあらう者が、一婦人の涙を氣に掛けられるとは！ 戀の松明に注ぎかけられた二三滴の涙は、その戀の焰を益々盛んに燃え立たすものなんです。」

「貴方のほんのばら／＼降りかゝる二三滴位なら大變有難いが、」とド・ブラシーは答へた、「しかしあの姫は燈臺の灯も打ち消す位の泣いて／＼泣き拔きました。エイマ僧正から聞き及んだ聖ニオベ（希臘の神話に出づ。ニオベはテーベの王アマフィオンの妻、その子の美忌數の多いのを誇つたのでその子は悉くアルテミスに彼女の面前で殺された。彼女は極度の悲哀を表はす典型とせられた）の時代以來、あんなに手を揉み絞り、あんなに眼に涙を溢らしたものは決してあるまい。水の精があゝのサクソン美人に憑いたのだ。」

「さう云へば、あの猶太娘の胸には無數の惡魔が巢喰つたのです、」と寺侍は答へた、「たつた一匹では、アポリオン（希臘語で破壊者の意、惡魔の名で、底なき坑の使者）新約聖書、黙示録九章）自身だつて、あんなきかぬ氣の誇りと決心とを吹き込む事は出来まい。——それはさうと、フロン・ド・ブーフは何處でせう？ あゝの角笛は益々やかましく鳴つてゐる。」

「彼はあの猶太人に掛合ひ最中なのだらうよ、」とド・ブラシーは冷かに答へた、「多分アイザックの哭なく聲で喇叭の音が吹き消されたのであらう。貴方も經驗で御承知かも知れないが、ブリアン殿、どの猶太人でも我々の友フロン・ド・ブーフの提出しさうな條件では自分の寶を手放すには、二十の角笛とおまけに、二十の喇叭を吹き鳴らす以上に響く程高い騒ぎをすることせう。兎に角、家來共に呼ばせませう。」

が、間もなく、そのフロン・ド・ブーフも二人の許へやつて來た、彼は讀者が既に知られるやうに、暴虐無情な所業へ邪魔を入れられ、彼處を出て來たのであるが、何か必要の指圖を言ひつけてゐた爲

め此處へ來るのに、暇取つたのである。

「この忌々しい騒ぎの因を見ようではないか、」とフロン・ド・ブーフが言つた、「さあ此處に一通の書面がある。思ふにこれはサクソン語で書かれたものであらう。」

彼はその書面をながめて、幾度も／＼引つくり返した、引つくり返してゐるさへすれば意味が分つて來る見込が、實際あるかのやうで。そしてそれをド・ブラシーに渡した。

「これは恐らく私の知る限りでは咒文だらう、」と當時の騎士の特色として、これも全くの文盲であつたド・ブラシーが言つた。「うちの牧師は私に書くことを教へようとしたのだが、私の字はみんな槍の鋒先か劍の身みたやうになるので、流石の老僧も諦めて了つたのです。」

「私にお見せ下さい、」と寺侍は言つた、「我々は僧侶に分相應なだけ我々の武勇を耀かす爲めに、多少の知識は持ち合せてゐます。」

「では、貴方の最も尊むべき知識のお世話にならうではないか、」とド・ブラシーは言つた、「この手紙には何と言つてありますかな。」

「これは正式の挑戦狀です、」と寺侍は答へた、「だが、本當にこれは若し馬鹿げた冗談でなけりや、これ迄諸侯の城のはね橋を通つて來た内で一番突飛な果し狀なんです。」

「冗談！」とフロン・ド・ブーフは言つた。「どんな奴がよくも左様な事で我々を茶化すか知りたいたいものだ！——お読み下さい、ブリアン殿。」

言葉に應じて寺侍は次の如くに讀み出した——
 『かく申すは幫間シヤクウィットレスの子ワンバ、並びに豚飼ひビオウルフの子ガースとて、家門高く自由の身に生れ通稱サクソンと呼ばれる、ロザードのセドリック様に仕ふる者共なり——』
 「貴方は氣が狂はれたな、」とフロン・ド・ブーフは、讀み手を遮りながら言つた。
 「いや確かにさう書いてある、」と寺侍は答へた。それから又自分の引き受けた事に取り掛つて、かう讀み續けた——

『前記セドリックの豚飼ひ男、ビオウルフの子、我れガースは、この我等の争ひに於て我等に與する者、即ち當分「黒メルワールきのろま」と呼ばるゝ騎士及び「的破り」と呼ばるゝ剛勇の郷士、ロバート・ロックスリーの援助を得て汝レジナル・フロン・ド・ブーフ及び何人にもあれ、汝の同盟者なる者等に告ぐ。汝等は理由も示さず、將た宣戦もなさずして、不法にも優勢を頼み、我等の主君上記セドリック及び家門高く自由の身に生れし處女、ハーゴットスタンティストアイドのローエナ姫、及び家門高く自由の身に生れし人、コニングスボローのアセルステイン、及び彼等の従者なる數人の自由の身に生れし者及び彼等の奴隷に生れし數人の農奴及びヨークのアイザックと名づけらるゝ一猶太人、並びにその娘及び數匹の馬及び騾馬をば捕虜とせり。右の高貴の方々は、その従者及び奴隷、並びに馬及び騾馬、上記の猶太人父娘と共に、總て陛下に反かす王の公道を臣下として旅行中なりき。されば我等は上述の高貴なる人々、即ちロザードのセドリック、ハーゴットスタンティストアイドのローエナ、

コニングスボローのアセルステインをば、その僕、従者、及び家來、並びに馬及び騾馬、前記の猶太人父子と共に、彼等に屬する一切の諸道具諸共、この書面の到着後一時間以内に我等、又は我等が指名の人々に引き渡すべき事を要求す。而して右の人々及び物品には手を觸れ損傷する事あるべからず。以上従はざる時は我等汝等に宣告せん、我等は汝等を夜盜、逆賊の類と見做し、身命を賭して、戦鬪、攻圍、又はその他の手段にて汝等と争ひ、極力汝等を苦しめ亡ぼすべし。されば神汝等を監視給はんことを。——聖ウィソルド日の前夜、ハート・ヒル街道の集合所と定めし大櫛の下にて署名す。以上、コプマンハーストの禮拜堂にて、神、聖母マリア、及び聖ダンスタンに仕ふる一聖僧これを記す。』

この書面の最後には、先づ第一番に、雄鶏の頭と雞冠との粗雑な畫が描きなぐつてあつて、それにこの畫はウィットレスの子ワンバの自署であるといふ意味を示す文字——と辛うじて稱し得るものが添へてあつた。この立派な記號の次には、ビオウルフの子ガースの印であるしるしと斷書して、十字架が描いてあつた。その次には、亂暴な放膽な筆蹟で、「黒メルワールきのろま」といふ言葉が認めてあつた。そして、全體の締め括りとして、可なりきちんと描かれた一本の矢が、郷士ロックスリーの印と記してあつた。騎士達はこの風變りな書面を始めから終りまで聞いてゐた、そしてそれから、驚き黙したまゝ、互に目と目を見合せて、これが何の前兆か全く知るに苦しんでゐる體であつた。が、先づド・ブラシーが

抑へ切れなくなつて、ふつと噴き出し、沈黙を破ると、もつと控へ目ではあるが、寺侍もそれに釣り込まれて笑ひ出した。ところがこれに反して、フロン・ド・ブーフだけは、二人が場合をも顧みず、不謹慎であるのにむつとした様子であつた。

「率直に御警告申すが、」と彼は言つた、「今は左様に笑つてゐる時ではない、それよりは斯様な場合にどう處するか談合なさるべきだ。」

「フロン・ド・ブーフ殿は、この間、倒されてから、未だ機嫌が直らない、」とド・ブラシーは寺侍に言つた、「あの手紙は、幫間と豚飼ひ男とから參つたに過ぎないのに、果し状と云ふだけに恠氣附いてゐる。」

「本當に、」とフロン・ド・ブーフは答へた、「貴方一人でこの冒険を悉くお引き受けなさる事が出来ればよいがと望むのだ、ド・ブラシー殿。彼奴等は、誰か強い者共に尻押しをされなけりや、斯様な考へも及ばぬ厚かましい事をする勇氣はない。この森にはわしが鹿を保護致すのを兎や角言ふ浪士が可なりある。わしは、手に血を染めながら御獵林の鹿を盗み殺す現行犯人を捕へ、一匹の野鹿の角に縛り附けてやりましたら、彼奴はその鹿に突かれて五分間で死に申した、すると、わしはその仲間の者から先日アシビィであの的に放たれたと變らぬ程澤山の矢を射られたのでした。——これ、奴」と、彼は自分の従者の一人に向つて言ひ繼いだ、「お前だな、この法外な挑戦に加勢致し居る人數が何人位るか偵察にやられたのは？」

「はい、少くとも二百人位は森の中に集まつて居ります、」と近侍の一人の従者が答へた。

「大變な事だ！」とフロン・ド・ブーフは言つた、「これも各々方に私の城をお貸し申したから起つた事なのだ、御自分の企てを靜かに處理出来ないで、こんなに私の耳の傍へ熊蜂の巢を持つて來るやうな大騒ぎをお惹き起しなさるとは！」

「熊蜂の？」とド・ブラシーは言つた、「いやどちらかと言へば螫針のない雄蜂でせう、森に逃げ込んで身を養ふ爲めに働くより寧ろ鹿を屠らうといふ懶惰な悪者共の一團だ。」

「針のない？」とフロン・ド・ブーフは聞き咎めた、「二三尺餘もある叉形鋏の箭、而もそれがほんの小さい金貨の幅位あつて的に射られたら、結構な針なんだ。」

「馬鹿な事を言はるゝな、騎士殿！」と寺侍は言つた。「兎に角家來共を召集して、威勢よく突撃致さう。騎士一人は——いや、兵卒一人は、あんな百姓共二十人に當りますわい。」

「そりや當る、當り過ぎる位だ、」とド・ブラシーはこれに同じた、「私などは、あんな奴等と槍を合はすさへ恥ぢる位だ。」

「寺侍殿、」とフロン・ド・ブーフは言つた。「彼等が黒奴の土耳其人か、乃至は、剛勇無雙のド・ブラシー殿、フランスの弱蟲百姓でもあつたなら、仰せ御尤もであらう、が此奴等はイングランドの郷士共なのだ、こつちに武器と馬とがあるといふ外、我々に優つたところが何があらう、而も肝腎のその武器や馬さへこの林の間の徑路では何の役にも立つまい。突撃すると貴方は申されました

な？　ところが此處には城を守るだけの人数もやつと位ゐしかゐない。わしの部下の精銳は皆ヨークに參つてゐる。ド・ブラシー殿、貴方の軍勢もみんなさうだ。だから今は、今度の氣違ひじみた仕事に働いた少人数の外には、二十人そこ／＼しかゐないのだ。」

「眞逆相手方にこの城を攻撃するだけの軍勢が集められると氣づかはるゝのではあるまいな？」と寺侍は言つた。

「いやブリアン殿、さうぢやない、」とフロン・ド・ブーフは答へた。「あの浪士共は實に豪膽不敵の首魁を戴いてゐるのだ。が、向うに色々な戦具、雲梯、經驗を積んだ指揮者などがなければ、この城はびくとも致さぬ。」

「近所の人々へ使者を走らせて、」と寺侍は言つた、「三人の騎士がレジナル・ド・ブーフの居城で幫間と豚飼ひ男に包圍されて困却してゐるから、家來を集めて、早速救助に来て戴きたいと言はせなさい！」

「冗談を言はれる、騎士殿、」と領主は答へた、「それにしても誰を使者に立てよう？——マルヴォアザンとはや家來共とヨークにゐるし、その他の味方の者もさうである、いや、こんな忌々しい企てがなかつたなら、私も其處へ行つてゐたのに。」

「ではヨークに使者をやつて、家來共を呼び戻さう、」とド・ブラシーが口を出した、「若し彼等賊共が、私の軍旗の棚曳くのも恐れず、或は又我が傭兵團の勢ひに僻易もしなかつたなら、これ迄緑の森で

弓を引いた者の中で、最も勇敢な賊だと申しても恥かしくないと褒めて遣はさう。」

「それにしても、一體誰がそんな使者に立たう？」とフロン・ド・ブーフは言つた、「彼等は行く道々を塞いでゐて、使者の胸を引き裂いてしまふだらう。——うむ、いゝ考へがある、」と彼は一寸休んでから言ひ足した——「寺侍殿、貴殿は讀む事も書く事も出来なさる。それで若し、十二ヶ月前にクリスマスの酒宴最中歿くなつた、うちの牧師の筆や紙が見附かりさへしましたなら——」

「恐れながら、」と未だ傍に隨いてゐたかの従者が口を出した、「アフリード婆奴が、あの懺悔僧を慕ふところから、何處かにその墨や筆や紙を藏つてゐるかと思ひます。何時ぞやあの婆さんがかう言ふのを耳にした事がございます、あの僧こそ、男といふ男が婦女に會ひさへすれば、屹度口に出すやうなことを少しも言はなかつた人だと、はい。」

「行つて、探して來い、アンゼルレ、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「それから、寺侍殿、この大膽な挑戦狀に返事をお書き下さい。」

「私は筆の先で返事をするよりは寧ろ劍の尖で返事したいのだ、」とボア・ギルベールは言つた、「だが、お望み通りにするとしよう。」

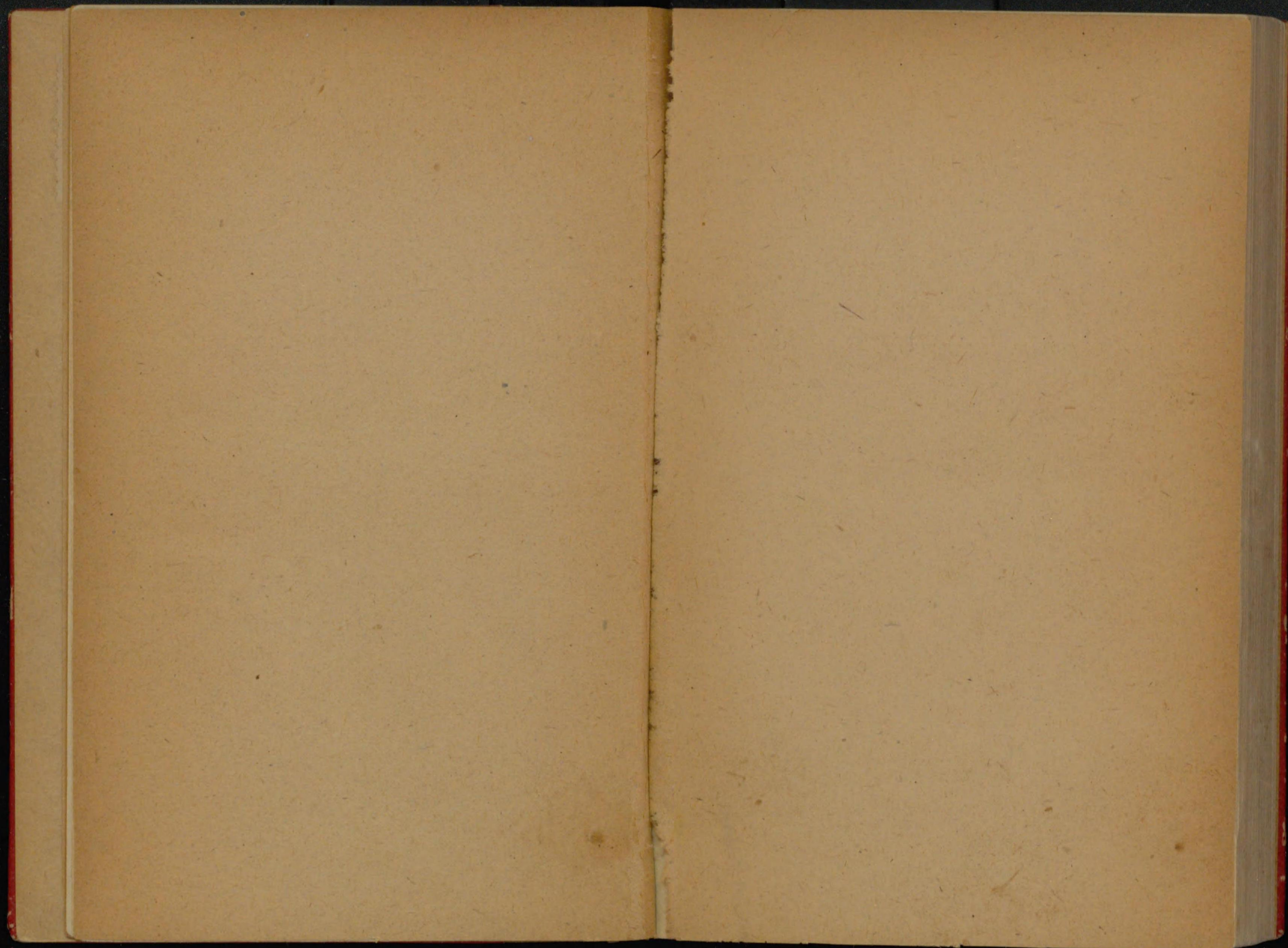
そこで、彼は腰を下して、フランス語で次のやうな趣意の書面を認めた——

『レジナル・フロン・ド・ブーフ卿は、部下の身分高き騎士の味方及び聯類者と相携へて、奴隸、奴僕又は脱走者の手にて書ける果し狀を受理せず。自ら黒裝束の騎士と名乗る者、たとひ眞に武士道の

禮遇を受くる資格あらんも、その身現在の加盟によりて騎士の品位を落され、生れ高き人々より尊重を求むる権利を失ひしものと知るべきなり。我等の捉へし捕虜に就いては、基督教的博愛主義の見地より、彼等の懺悔を聴き、彼等の罪障消滅を神に祈るべき僧侶一名を派すべきやう要求す。そは他意なし、今朝午前中に彼等を死刑に處し、首を胸壁に掲げて、我等が如何に彼等を救助せんとな奮起せる者を顧みざるかを示さんと、既に我等の確く決心するところなり。されば、上述の如く、汝等は彼等の罪障消滅を神に祈るべき僧侶一名を派すべし、斯くなさば汝等又彼等にこの最後の友誼を盡す事とならん。』

この書面は、疊んでから、従者に渡され、従者から、外そとに待つてゐた使者に、彼が持つて來た手紙の返事として、渡された。

使者に立つた郷士はかくして自分の使命を果して、味方の屯所たむろへと引き上げた。屯所は差當り、この城から箭の届く距離の三倍程隔たつた古さびた櫛の木の蔭に設けられてあつた。其處では、ワンバとガースとが、同盟者黒装束の騎士とロックスリイとあの快僧と一緒に、彼等の挑戦狀に對する返事を頻りに待ち兼ねてゐるところであつた。彼等の周圍まはりや、少し離れた所には、多くの豪膽な郷士の姿が見受けられた、その田舎風の服装、風雨に曝された顔などは、彼等の平常の職業をよく示してゐる。既に二百人以上集まつてゐる上に、尙ほ頻りに馳せ加はつた。彼等が首領として仰いだ人々は、たゞ



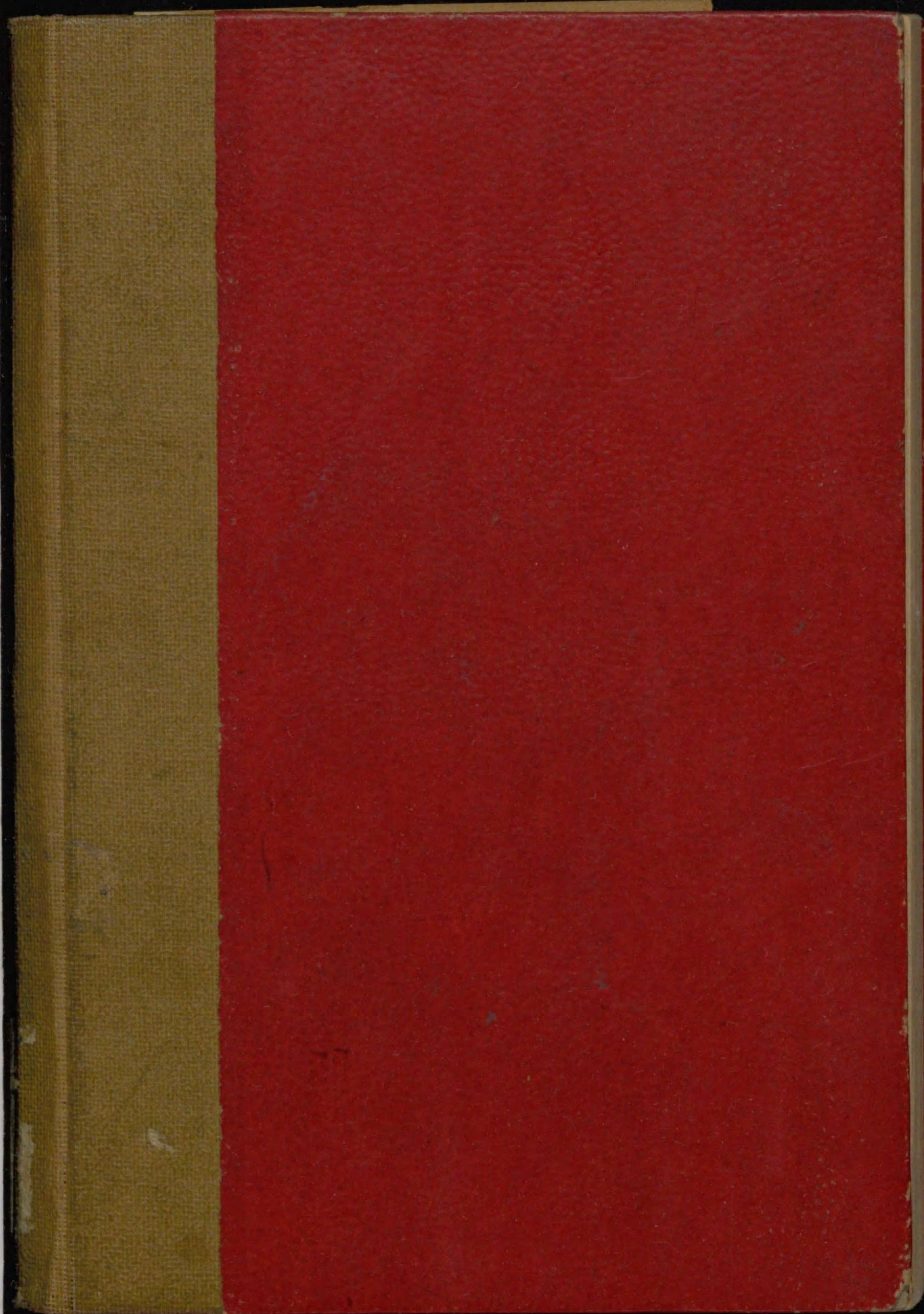
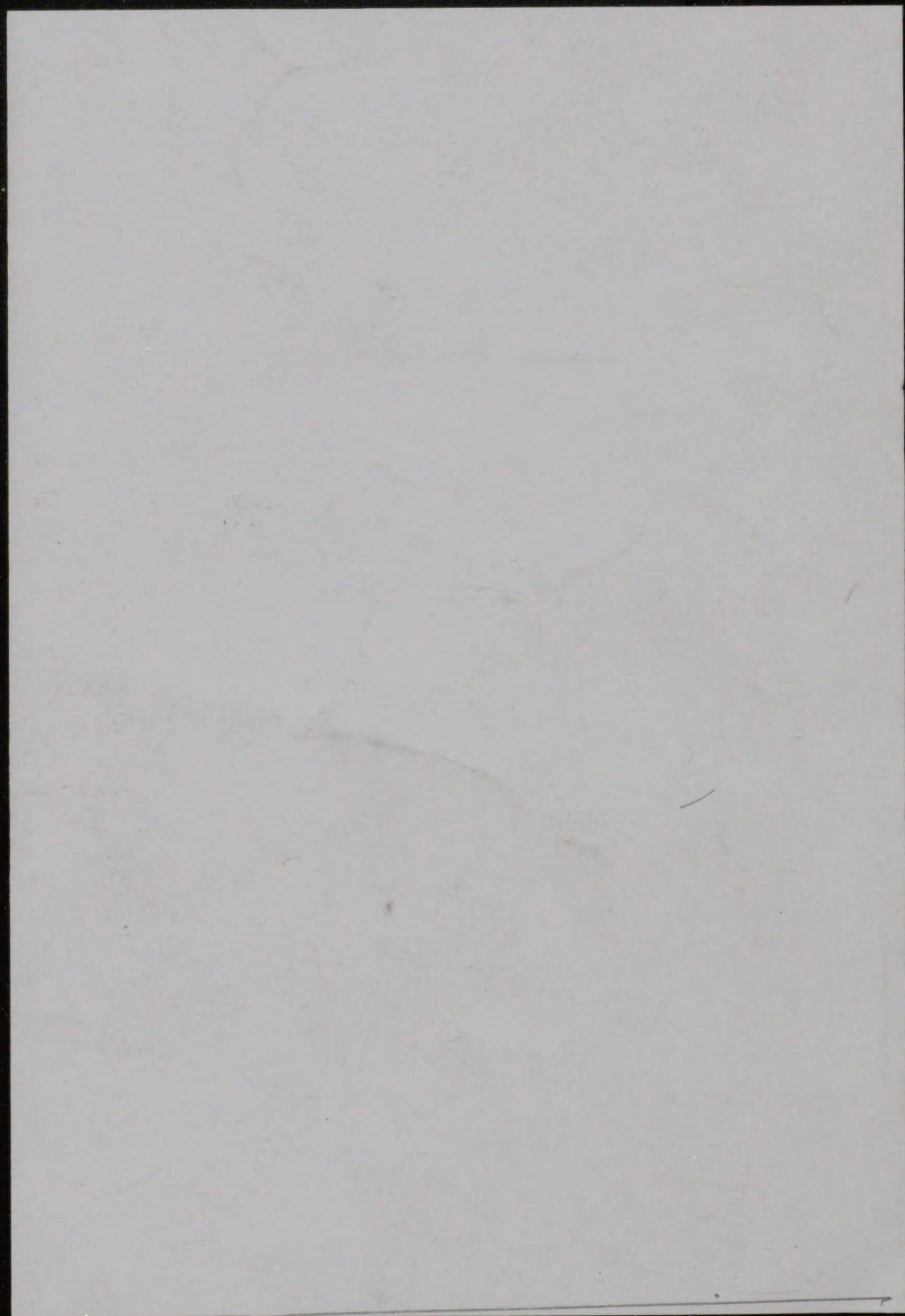
エツ ネル フゲ	白北 秋原	廣水 徳野	四二 葉亭 迷亭	正久 雄米	信吉 子屋	や三 す子 宅	テハ イア	ゲエ テ	一岡 平本	三甲 郎賀
父 と 子	文詩 雀 の 生 活	記戦 此 一 戦	説小 平 凡	説小 破 船	説小 海 の 極 み ま で	説小 偽 れ る 未 亡 人	テ ス (上 下)	ゲ エ テ 詩 集	漫漫 文畫 人 の 一 生	説小 犯 罪 發 明 者
362頁 45銭	228頁 35銭	244頁 35銭	148頁 15銭	500頁 60銭	60頁 60銭	286頁 40銭	上398頁 50銭 下312頁 40銭	170頁 25銭	318頁 40銭	206頁 30銭
路 白鳥 福田 編	省 白鳥 吾 編	臨中 川澤	森田 草平 他 三氏 著	高次 郎須	スシ ピエ ヤク	絃吉 二郎	フデ ユマ ス	エフ ロル ベ	ドス トエ フス キイ	スシ ピエ ヤク
大 正 詩 選	昭 和 詩 選	近 代 思 想 十 六 講	近 代 文 藝 十 二 講	日 本 思 想 十 六 講	ジ ユ リ ア ス シ ー ザ ー	感 草 光 る	椿 姫	白 痴 (全 四 卷)	ロ ミ オ と ジ ユ リ エ ツ ト	
246頁 35銭	110頁 15銭	510頁 60銭	444頁 55銭	496頁 60銭	150頁 20銭	270頁 55銭	344頁 55銭	512頁 60銭	(1)45銭 (2)40銭 (3)(4) 各35銭	174頁 25銭

人現代詩 全集	人現代詩 全集	ゲエテ	ンピヨ ンル	バアル ツィ セフ	ンソチ ンヴ	春生 月田	風小 葉栗	大宇 陀兒	ドスト ベリン	バアル ツィ セフ
島崎藤村集	初期十二詩人集	ヘルマンとドロテア	森の處女	ランデの死	寶島	澄める青空・自然の恵み	終編金色夜叉	小魔人	痴人の告白(上下)	サアニン(上下)
163頁 25銭	164頁 25銭	112頁 15銭	203頁 30銭	314頁 40銭	299頁 40銭	167頁 25銭	232頁 30銭	373頁 45銭	252頁 各35銭	上40銭 下35銭

トスコ ツ	吉田 二郎	人現代詩 全集	人現代詩 全集	人現代詩 全集	人現代詩 全集	人現代詩 全集	人現代詩 全集	人現代詩 全集	人現代詩 全集	人現代詩 全集
アイヴンホー(上)	想感 靜かなる土	川路柳虹集	三木露風集	北原白秋集	横瀬夜雨集	野口米次郎集	岩野泡鳴集	蒲原有明集	薄田泣菫集	土井晩翠集
374頁 45銭	268頁 35銭	158頁 25銭	171頁 25銭	174頁 25銭	163頁 25銭	134頁 25銭	154頁 25銭	139頁 25銭	155頁 25銭	147頁 25銭

トル イス	フロ ンウ グ	伸長 谷川	政小 二郎	トホ マイン ツ	ツモ サオ ンバ	春生 月田	ツフ イ フリ	絃吉 二郎	山本 三	トル イス
幼年・少年	イヴン チェ リン	説小 直八 こども 旅	説小 海 燕	ホイ ット マン 詩集	モオ パッ サン 選集	想感 生命 の道	四つ の戀 物語	想感 木に 凭り て	曲戲 同志 の人 々	我が 懺悔
278頁 35銭	108頁 15銭	227頁 30銭	332頁 40銭	226頁 30銭	372頁 45銭	448頁 55銭	172頁 25銭	226頁 30銭	192頁 25銭	144頁 20銭

メリ メ	ワワ ア ス ツ	ツフ イ フリ	ジイ ド	春生 月田	絃吉 二郎	三甲 郎賀	藤島 村崎	藤島 村崎	エド オ テ	ホ ウ
カル ル メ ン	ワ ア ツ ワ ス 詩 集	小 さ な 町	背 徳 者	集詩 感傷 の春	想感 山家 日記	説小 幽靈 犯人	説小 伸び 支度	説小 ある 女の 生涯	サ フ オ	ア ッ シ ヤ 家 の 没 落
180頁 25銭	308頁 40銭	224頁 30銭	170頁 25銭	284頁 40銭	246頁 35銭	308頁 40銭	290頁 40銭	216頁 30銭	242頁 35銭	160頁 25銭

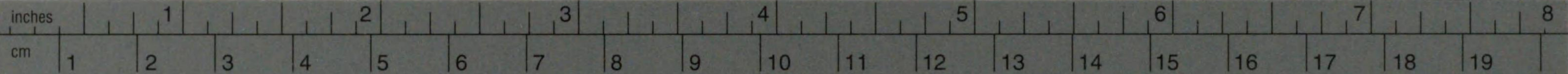


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

